

島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅳ

玉作関係遺跡

1987・3

島根県教育委員会

目 次

I	出雲玉作研究小史	(勝部 衛)	1
II	玉作遺跡の分布	(松本岩雄)	4
	1. 調査の方法		4
	2. 玉作遺跡の分布		4
III	古代玉作遺跡の概要	(高橋進一・松本岩雄)	13
	1. 大原遺跡		13
	2. 玉造遺跡		14
	3. 鍵尾遺跡		14
	4. 高広遺跡		15
	5. 西川津遺跡		15
	6. 布田遺跡		16
	7. 大草玉作遺跡		17
	8. 平所遺跡		19
	9. 松本遺跡		20
	10. 乃白権現遺跡		21
	11. 平松遺跡		21
	12. 小城口遺跡		23
	13. 垣ヶ尻遺跡		23
	14. 千本遺跡		24
	15. 砂子原遺跡		25
	16. 片田遺跡		26
	17. 玉神谷遺跡		27
	18. 一丁田遺跡		28
	19. 堂廻遺跡		28
	20. 中島遺跡		29
	21. 後原遺跡		30
	22. 一崎遺跡		31
	23. 出雲玉作跡宮垣地区		31
	24. 出雲玉作跡宮ノ上地区		32
	25. 出雲玉作跡玉ノ宮地区		34
	26. 蛇喰遺跡		34
	27. 小丸山遺跡		37
	28. 徳連場遺跡		38
	29. 向新宮遺跡		38
	30. 波止遺跡		38
	31. 平床遺跡		39
	32. 日焼廻遺跡		39

33. 延木谷遺跡	40
34. 廻原遺跡	40
35. 西遺跡	41
36. 大田遺跡	41
37. 田仏遺跡	42
38. 有ノ木遺跡	42
39. 神田遺跡	43
40. 火尻原遺跡	44
41. ソリ田遺跡	46
42. 宮畑遺跡	47
43. 脇田遺跡	48
44. 六反田遺跡	49
45. 向市遺跡	49
46. 布志名狐廻遺跡	50
47. 永丁夫遺跡	52
48. 岩屋口遺跡	53
49. 布田遺跡	54
50. 大日遺跡	54
51. 大東高校校庭遺跡	54
52. 又下遺跡	55
53. 矢野遺跡	56
IV 近・現代の玉作りについて (松本岩雄)	57
1. はじめに	57
2. 玉材採掘坑	57
A 金屋廻玉材採掘坑	57
B 蔵ラ廻玉材採掘坑	58
C 横屋堀玉材採掘坑	59
3. 瑪瑙細工場跡	59
4. 竹下幹氏寄贈資料	60
◆ 山陰地方玉作関係参考文献	62

表 目 次

表 1 島根県玉作関係遺跡一覧	11
表 2 玉作湯神社収蔵庫玉作関係遺物奉納(追加分)一覧 (遠藤 融)	61

例 言

1. 本書は、昭和61年度国庫補助を得て島根県教育委員会が実施した生産遺跡分布調査（玉作関係遺跡）の報告書である。
2. 玉作関係遺跡台帳の原本は、島根県教育委員会で保管している。
3. 調査は以下のような組織で島根県教育委員会が実施した。

調査指導 山本 清（島根県文化財保護審議会副会長）

寺村光晴（和洋女子大学教授）

町田 章（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）

渡辺貞幸（島根大学助教授）

事務局 熊谷正弘（文化課課長），安達富治（文化課課長補佐），蓮岡法暲（同），矢内高太郎（文化係係長），永塚太郎（埋蔵文化財第1係係長），吉川 広（文化課主事），白根敬三（財務課主事）

調査員 宮沢明久（文化課文化財保護主事），松本岩雄（同），西尾克己（文化課主事），田根裕美子（文化課嘱託）

委嘱調査員 高橋進一，宮本正保，佐藤雄史

整理作業員 堀江五十鈴，湊 健一，三輪奈津子

調査協力 遠藤 融（玉作湯神社宮司），和田統彦（忌部神社宮司），吉岡弘光（六所神社宮司），今岡定雄（忌部公民館長），勝部 衛，足立幸子，岡崎雄二郎，吾郷雄二，川本健二，遠藤孝男，吉岡弘行，糸原 博，衣川正治，戸谷圭二，内田律雄，足立克己，三宅博士，渡部益夫，福岡敏文，杉原清一，赤沢秀則，勝部明生，関川尚功，鈴木一男，竹下 幹，福島 照，舟木一郎，田中義昭，渡部定六，渡部兵八，玉作湯神社，忌部神社，六所神社，忌部公民館，出雲玉作資料館，玉湯町教育委員会，松江教育委員会，仁多町教育委員会，大東町教育委員会，島根大学

なお、分布調査および資料整理にあたっては地元の方々をはじめ多数の方々に終始多大な協力を得た。

4. 本書に登載した玉作関係遺跡は、主として弥生時代から平安時代のものを対象としたが、一部近・現代の玉材採掘坑・瑪瑙細工場跡等にも触れた。遺跡の名称は原則として小字名を冠することとしたが、分布調査のみでは遺跡のひろがり等を把握し難い面があり、今後の調査によっては名称を変更すべきものも含まれていると思われる。玉作湯神社・忌部神社保管資料の採集地点を全て確認することができなかったため、今後さらに精緻な調査が必要である。
5. 本書に掲載した地形図は、全て上方が北である。本文中に「カド石」と記したものは赤茶色を呈する玉髓で、碧玉・瑪瑙などとともに産する。玉材として利用された例はないが、玉作遺跡から出土する場合は碧玉・瑪瑙をとる際に打ち欠いて捨てられたものと思われる。俗に「カド石」と称されているのでここではその名称を用いた。
6. 本書の執筆は、勝部衛，高橋進一，松本岩雄が行なった。執筆分担は目次および各項末尾に記したとおりである。
7. 本書の編集は、松本岩雄が行なった。

I 出雲玉作研究小史

1

出雲での玉生産は、『出雲国計会帳』（天平5年、733年）、『古語拾遺』（大同2年、807年）、『延喜式』（延長5年、927年）など、奈良時代から平安時代の古文献から窺うことができる。これらの文献では、出雲のどこに生産拠点があったか不明だが、『出雲国風土記』^{註1}（天平5年、733年）を見ると、「忌部神戸」^{註2}に拠点の一つがあったことがわかる。

平安時代以後玉生産を中止したと考えられるが、中世末から近世にかけて、古代に玉を生産し、献上したのはかつての忌部神戸であり、玉材産出地の花仙山のふもとに位置する「玉造」として出雲では推測していた。『忌部総社神宮寺縁起』^{註3}（永禄9年～慶長6年、1566～1601年）には「往古奉納雲州之國造之朝廷齋部祭器而作精珠類忌部之玉造邑」とある。松江藩の儒臣黒沢長尚は享保2年（1717年）に著した『雲陽誌』で湯船明神（現玉作湯神社）の項に「古語拾遺に出雲の國玉造とするは此所なり」と書いている。玉材について、天明2年（1782年）の『玉造記』^{註4}には貢ぎ物の瑪瑙・青石はこの地で産すると書かれている。

このように、文献では古代の玉の生産地として「玉造」を挙げ、今日知られているような他の地域には言及していない。玉造地区では、多数の玉作関係資料が採集されているところから、すでに実物資料を知っていた可能性も捨て切れないが、おそらく文献や地名による推測であろう。

2

出雲において玉作りに関する考古資料の顕在化は明治を待たねばならなかった。第2次大戦後までに、花仙山をはさむ、玉湯川流域と忌部川流域、さらに古代出雲の中心地での一つであった意宇川流域の3地区でそれぞれ複数の玉作遺跡が発見されていた。

このうち玉湯川流域が最も早く、大々的、組織的に収集がなされた。明治10年代に、玉作湯神社が中心となって収集が始まったとされている。資料の散逸を恐れた宮司が氏子の発見の都度、神社に奉納せしめたのである。^{註5}神社は、奉納にあたって、1点1点の資料について、奉納者名、資料名、発見地の小字名等を細かく記録した。このことは資料の価値を高めたばかりでなく、遺跡の分布図を作成するうえでも、多大な貢献をなした。最も古い奉納の記録は明治27年の砥石である。当初は玉未成品よりは砥石が目についたようで、明治年間には、砥石25個、玉未成品5個と、前者がたいへん多い。大正末から昭和初期にかけて最も多くの資料が収集され、^{註6}今日まで700点を越えている。

意宇川流域では、大庭地区で明治12年から収集がはじまり、忌部川流域ではやや遅れ、明治38年、下流の乃白での砥石の発見が最初である。忌部神社を中心とした収集は大正年間から始まったとされている。^{註7}

中央の学会が、出雲での玉作関係遺物を知ったのは、明治33年を最初とする。花仙山の瑪瑙調査に訪れた東京学士会院の田中芳男が、玉作湯神社に保管されていた砥石を偶然見つけ、依頼を受けた玉作湯神社が3個を東京帝国大学人類学教室に送った。当時教室員であった八木奨三郎が興味を持ち、明治33年5月10日付けの『時事新報』に「曲玉砥石の新発見」と題して所見を発表した。その後明治42年大道弘雄の詳細な紹介もあり、全国的に出雲玉作遺跡が知られることになった。当時の著名な研究者の訪問や報告が相次いだ。^{註8}^{註9}

地元の歴史家野津左馬之助も玉作りに関心を寄せた一人である。大正12年玉湯川流域で当時知られていた4箇所の玉作遺跡を詳しく紹介し、^{註10}のち昭和4年には忌部川流域の7箇所を詳しく報告している。^{註11}

大正14年1月には、京都帝国大学考古学教室挙げての調査が行なわれた。結果は京都帝国大学文学部考古学研究報告第10冊

『出雲上代玉作遺物の研究』として、昭和2年に刊行された。出雲玉作りの研究史上欠くことの出来ない重要な報告である。それまでの出雲国玉作研究の集大成ともいわれる。発掘はなされなかったが、玉作湯神社、忌部神社、六所神社等の保管資料を紹介し、製作技法を細かく論じた。玉作遺跡として、6箇所が挙げられ、分布図には10箇所近い地点に出土位置を示すドットが落とされている。今日知られている大部分の遺跡があげられ、現在も基礎資料として欠くことができないものである。

遺跡については、玉湯町内の3箇所が大正11年に生産遺跡では初めて国指定を受けた。また同じく玉湯町内から出土した玉作資料の一部約400点が昭和14年に国宝（昭和25年法律改正により重要文化財）指定、昭和36年には追加指定を受けている。

京大報告や野津の研究以後、出雲玉作研究もひとくぎりついた格好で、その後見るべきものはなかった。しかし、第2次大戦後、とくに昭和30年代後半以後、発掘を伴う調査が実施され、出雲玉作りも新たな段階を迎えた。昭和35年に行なわれた加賀片山津遺跡の発掘で、わが国最初の玉作工房跡が検出され、^{註12}大きな影響を与えた。

大場磐雄、寺村光晴らによって行なわれた昭和39年忌部中島・後原遺跡の調査は、出雲の玉作遺跡で最初の記念すべき調査であった。玉作工房跡も中島遺跡で検出され、玉作りの具体像や年代観に貴重な資料をもたらした。昭和43年から45年にかけて実施された出雲国庁跡の発掘調査でも、玉未成品や砥石が出土し、明治以来の採集を裏付けた。昭和44年と46年には3次にわたり、出雲国玉作りの中心地と目されていた玉湯町の史跡出雲玉作跡（宮垣地区）の調査が山本清、寺村光晴らによって行なわれた。^{註13}約2.8ヘクタールのほぼ全域を調査対象とした大規模な調査であった。30棟に及ぶ多数の工房跡や数万点に達する玉作関係資料が検出された。古墳時代前期から平安時代にかけて、長期間玉作りを実施したことが判明し、玉生産の具体的な技法なども明らかになった。昭和49年には昭和27年に確認されていた大東高校校庭遺跡が発掘調査された。^{註14}また、表採により出雲東端の安来市でも3箇所の玉作遺跡が発見されている。^{註15}

昭和50年代には、出雲地区、とくに平野部での開発に伴ない、発見される玉作遺跡が相次いだ。いずれも弥生時代の遺跡であった。昭和50年～51年には松江市平所遺跡の調査が行なわれ、出雲で初めて弥生時代の玉作遺跡となった。^{註16}後期の終末に属し、水晶玉の生産を中心としていた。その後、昭和55～56年には弥生時代中期中葉～後葉の玉作遺物が松江市布田遺跡から見つかり、^{註17}また昭和60年には松江市西川津遺跡で弥生時代前期にまでさかのぼる玉作関係資料が発見された。いずれも、製作技法として、擦り切り手法を持つことが注目されている。^{註18}

こうした一連の出雲玉作りに関する新しい成果は、寺村光晴らによってその都度フォローされ、体系化への努力がなされている。^{註19}

以上、出雲における玉作遺跡の発見、研究史について概観した。明治の初年、玉作遺跡は僅か「玉造」1箇所であったものが、その後の採集や発掘によって、大幅に増加した。生産年代も、欠落した部分がまだ多いものの、弥生時代の前期から平安時代まで、ほぼ一貫していることが判明した。出雲における玉生産の様相もかつてのイメージとは一変しつつある。^{註20}

（勝部 衛）

- 註1. 加藤義成『修訂出雲国風土記参究』昭和56年
2. 加藤義成氏は註1の著書で現在の松江市東西忌部町から玉湯町の東部にかけての地をあげる。忌部川と玉湯川の流域にあたる。
3. 藤岡大拙「忌部神社蔵古記録について」『山陰——地域の歴史的な性格——』昭和54年
4. 玉湯町玉造在住長谷川正司氏蔵
5. 浜田耕作編「出雲上代玉作遺物の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第10冊 昭和2年
6. 上代出雲玉作出土品明細書および同補遺（玉湯町『玉湯町史』上巻、昭和36年）
7. 註5に同じ。明治38年の乃白の記録は註6の明細書に明治8年とあるが、玉作湯神社の台帳で確認したところ、明治38年の誤りであった。
8. 大道弘雄「曲玉砥石につきて」『考古界』第8篇第3号 明治42年
9. 玉作湯神社に保管されている参拝名簿によると、柴田常恵（明治39年）、松村瞭（大正4年）、喜田貞吉（大正4年）、辻善之助（大正6年）、梅原末治（大正6年）、黒板勝美（大正10年）、田沢金吾（大正12年）などの名が見える。明治は少ないが、

大正から昭和の初期にかけて多くなっている。

10. 野津左馬之助『島根県史』3 大正12年
11. 野津左馬之助「八束郡忌部村に於ける上代玉作遺跡」『島根県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第3輯 昭和4年
12. 大場磐雄・寺村光晴「出雲国忌部の玉作工房跡と出雲玉作」『日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨』昭和39年
13. 加賀市教育委員会『加賀片山津玉造遺跡の研究』昭和38年
14. 山本清「出雲国府跡」『島根県大百科事典』上巻 昭和57年
15. 玉湯町教育委員会『史跡出雲玉作跡発掘調査概報』昭和47年
16. 前島己基「出雲国玉作遺跡の一例——大東高校校庭遺跡——」『日本玉研究会会誌』第1号 昭和45年, 東森市良・蓮岡法暲・宮沢明久『大東高校グラウンド遺跡——校庭拡張工事に伴う緊急調査概報——』昭和49年(青焼き版)
17. 内田才「原始・古代」『安来市誌』昭和45年, 同「安来にもあった玉造——攻玉遺跡の発見——」『季刊文化財』第18号 昭和47年
18. 島根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』I 昭和51年, 同II 昭和52年, 本報告書では, 玉作工房跡の年代を古墳時代初頭とするが, 現在は弥生時代の終末とする意見が大勢を占める。
19. 島根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』IV 昭和58年
20. 島根県立博物館『西川津遺跡の出土品よりみた古代出雲人のくらし展』昭和61年
21. 寺村光晴『古代玉作の研究』昭和41年, 同『古代玉作形成史の研究』昭和55年他

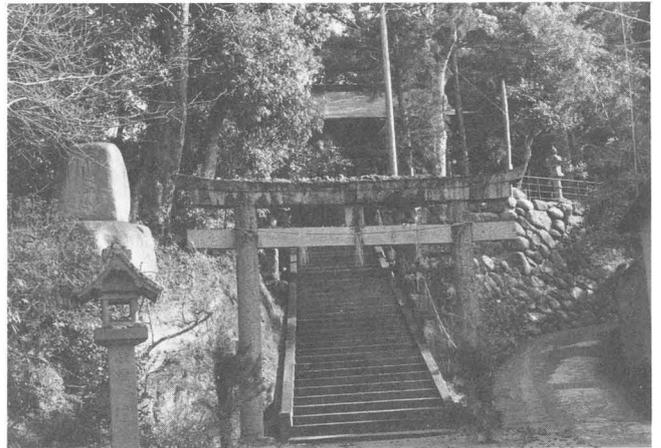


図1 玉作湯神社



図2 忌部神社

Ⅱ 玉作遺跡の分布

1. 調査の方法

島根県は律令制時代の旧国名では出雲、石見、隠岐の三国が含まれている。このうち玉作関係遺跡は今のところ旧出雲国内のみに分布している。出雲における玉生産については古く『出雲国計会帳』（天平5年、733年）、『古語拾遺』（大同2年、807年）、『延喜式』（延長5年、927年）などの文献から窺うことができるが、遺跡・遺物からその存在が明らかにされたのは明治以降のことである。とりわけ、明治10年以降に玉作湯神社に奉納された玉作関係遺物は、奉納者名、資料名、発見地の小字名が細かく記録しており、遺跡分布を把握する上できわめて学術的価値の高いものであった。忌部神社においても大正年間から同様な作業がなされている。

このたびの分布調査にあたっては、まずそうした基礎資料を確認し、それをもとに地名を探索して現地を踏査することから着手した。踏査に際しては、遺物出土地を確認したのちその周辺をできる限り広範にわたって観察するように心がけた。ただし、最近では小字名が廃止されつつあり、地番のみになっているところも多く、神社の台帳に記載された地名を全てにわたって実査することはできなかった。また、夏期の調査が多かったので、特に水田部の場合は遺物の散布状況を把握し難い状態であり、以前遺物が出土したとされる地点で今回必ずしも遺物を採取できたとは限らない。

ところで、分布調査のみで玉作遺跡と認定することは至難の技である。たとえば、原石産出地である花仙山周辺では自然の崖面や後世に整地・開墾された土の中に碧玉片や瑪瑙片を含んでいることがままある。そうした場所において玉材を採取したからといって、直ちに玉作遺跡にするわけにはいかないのである。玉類未成品、砥石、土器等がそろって発見されれば申し分ないわけであるが、表面的な踏査のみではなかなか発見できないのである。したがって、このたびの調査では明確な玉類未成品や砥石はなくても、原則として玉材片などとともに土器類が散布している地点を一応玉作遺跡として取りあげることとした。

なお、遺跡の名称としては原則として小字名を冠することとしたが、分布調査のみでは遺跡のひろがり等を把握し難い面があり、今後の状況によっては名称を変更すべきものも含まれていると思われる。また、踏査は不十分な体制のもとで短期間のうちに実施したため、不備な点や計画していても実施できなかったこともある。今後さらに充実した調査が必要である。

2. 玉作遺跡の分布

先述した方法で今回把握した玉作遺跡は53箇所である。これらの遺跡は、東は伯太川流域の安来方面から西は出雲市にわたるまで広く分布している。この分布を大づかみにみると8地域に分類することが可能であろう。

1. 中海にそそぐ伯太川流域

この地域は安来市にあたり、大原遺跡、玉造遺跡、高広遺跡、鍵尾遺跡の4箇所が知られている。いずれも工房跡が確認されていないので年代等については不明である。ただし大原遺跡については、採集された須恵器から山陰須恵器編年Ⅱ～Ⅲ期のころの玉作遺跡と推測される。なお、大原遺跡では円面硯をはじめとする奈良時代の須恵器も採集されており、8世紀代に玉作りが行なわれていた可能性もある。

2. 中海にそそぐ意宇川流域

この地域は、松江市大草町、山代町、竹矢町、矢田町周辺である。古くから著名である旧大庭村の遺跡（本書では大草玉作遺跡と仮称している）があるほか、近年布田遺跡でも玉作関係遺物が出土している。また、平所遺跡は茶臼山の北麓にあたるが、この地域に含めておくことにする。

布田遺跡は弥生中期の玉作遺跡で、擦り切り抜法によって緑色凝灰岩製の管玉を製作している。平所遺跡では弥生後期の良好な工房跡が調査されている。水晶製算盤玉を主体として碧玉管玉等も若干つくられている。

3. 宍道湖にそそぐ乃白川（忌部川）流域

原石産出地である花仙山の東麓で、松江市乃白町、東忌部町、西忌部町周辺にあたる。古くからよく知られている後原遺跡、中島遺跡、平松遺跡などをはじめとして合計14遺跡が分布している。玉湯川流域に次いで遺跡分布密度の高いところである。中島遺跡では古墳時代中期の工房跡が調査され、玉類としては勾玉未成品、水晶切子玉未成品、有孔円板、白玉等が出土した。このほか後原遺跡では石釧か車輪石の未成品と考えられる碧玉製亀甲状石が出土しており、この地域において古墳時代前期に玉作りが行なわれていたことが知られる。下限については調査例がないため不明確であるが、玉神谷遺跡などで8～9世紀代の須恵器が出土しているの、その時期までは実施されていたものと推測される。

4. 宍道湖にそそぐ玉湯川流域

八東郡玉湯町を中心とする地域で、花仙山の西麓に位置する。玉作遺跡の分布密度が最も高く、出雲玉作りのメッカともいべきところである。玉湯川流域ではないが、この近くの布志名や林村でも玉作遺跡が確認されているので、ここでは便宜上それらも含めておくことにする。この地域では、我国の生産遺跡として最初に国指定史跡となった出雲玉作跡は

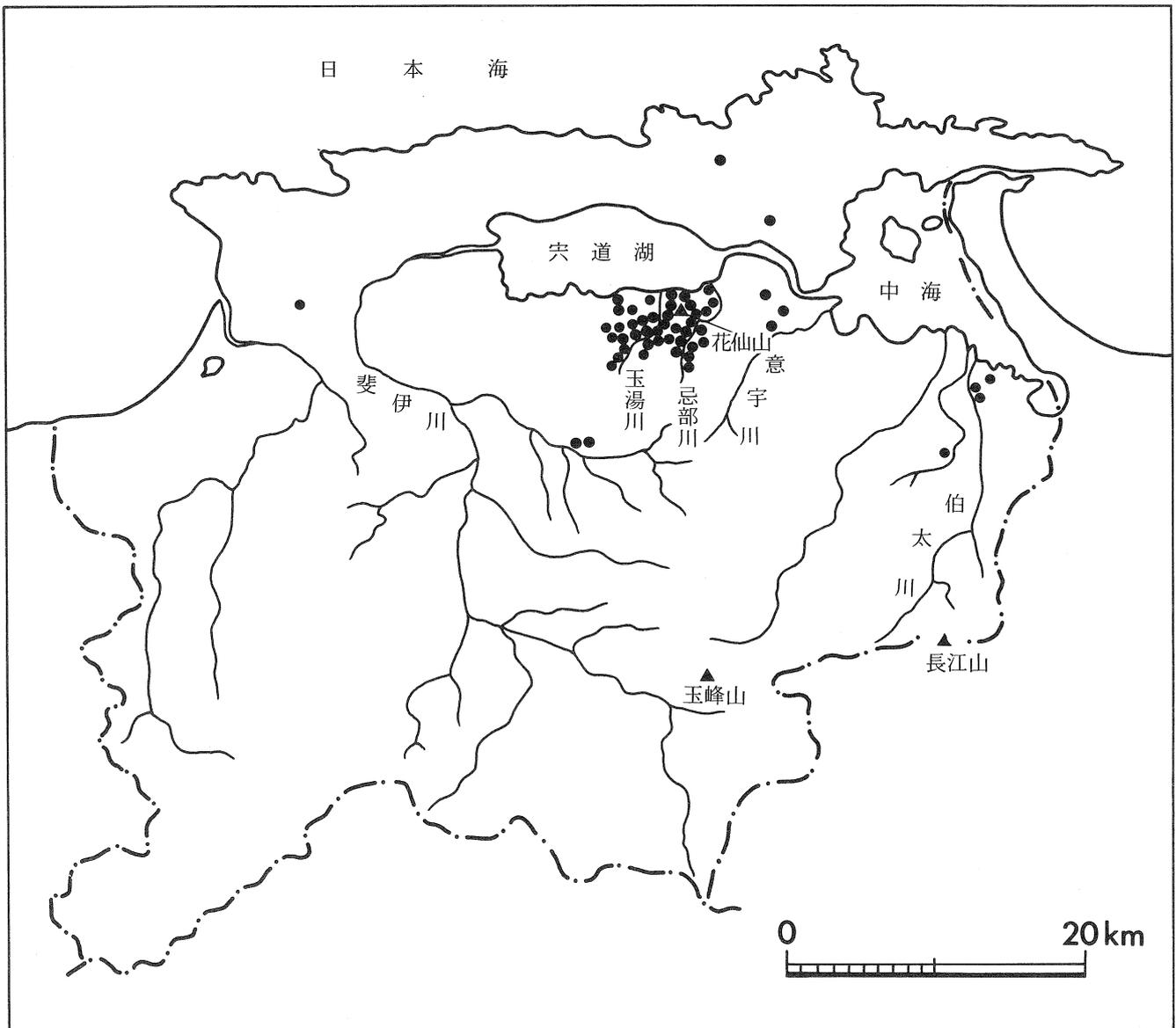


図3 玉作関係遺跡分布図

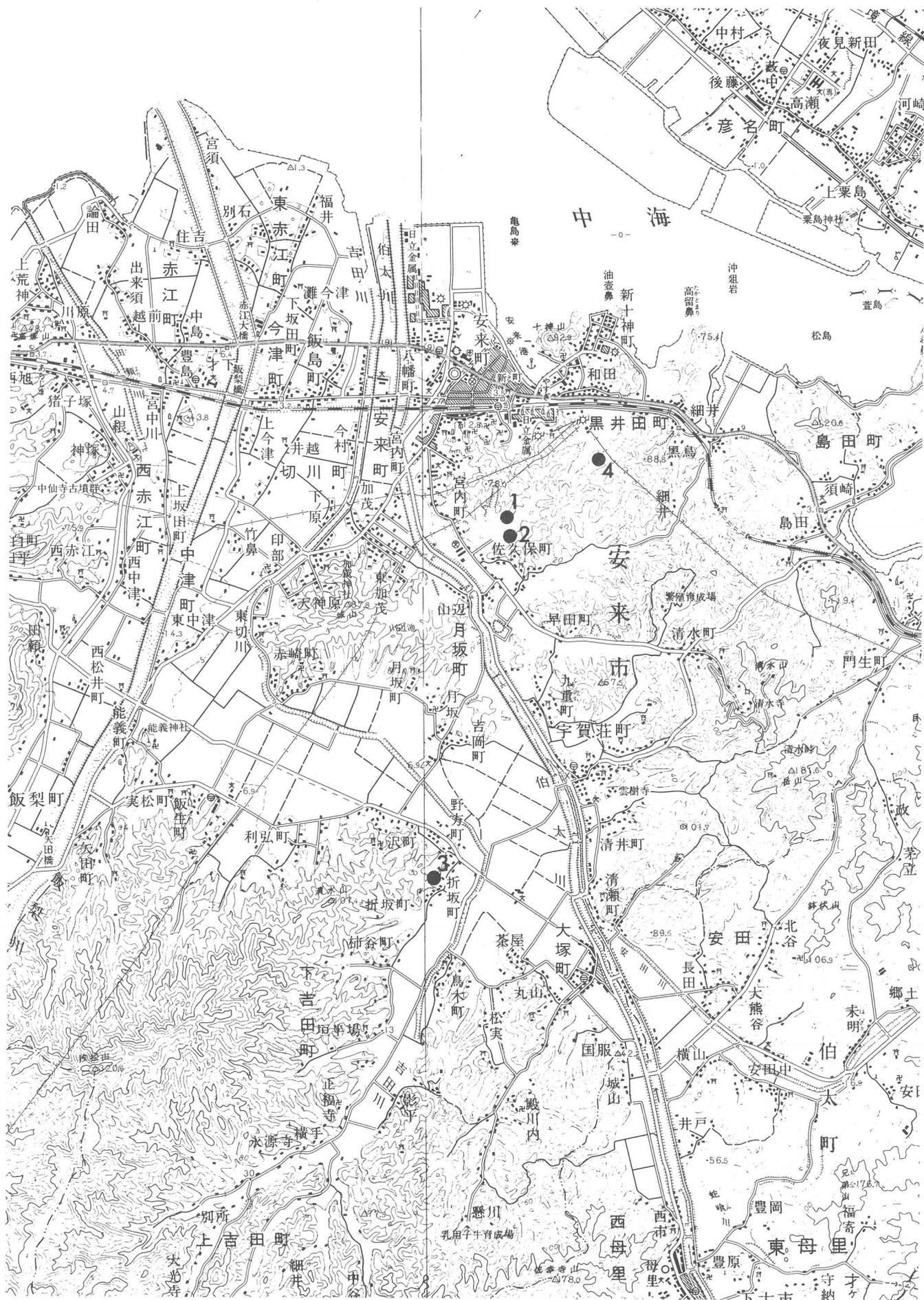


図4 安来周辺玉作関係遺跡の分布 1 : 50000

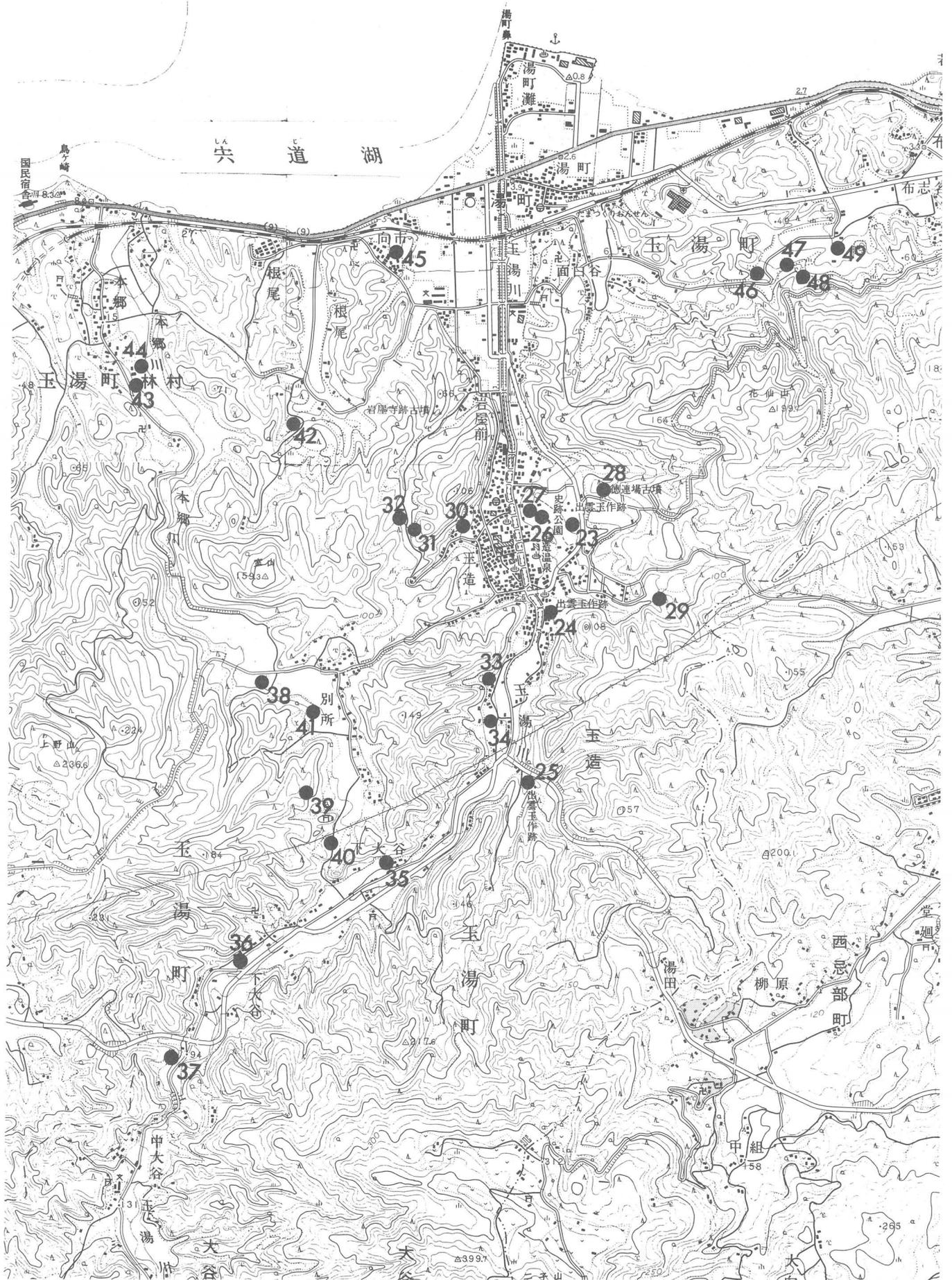


図6 玉湯町周辺玉作関係遺跡の分布 1 : 25000

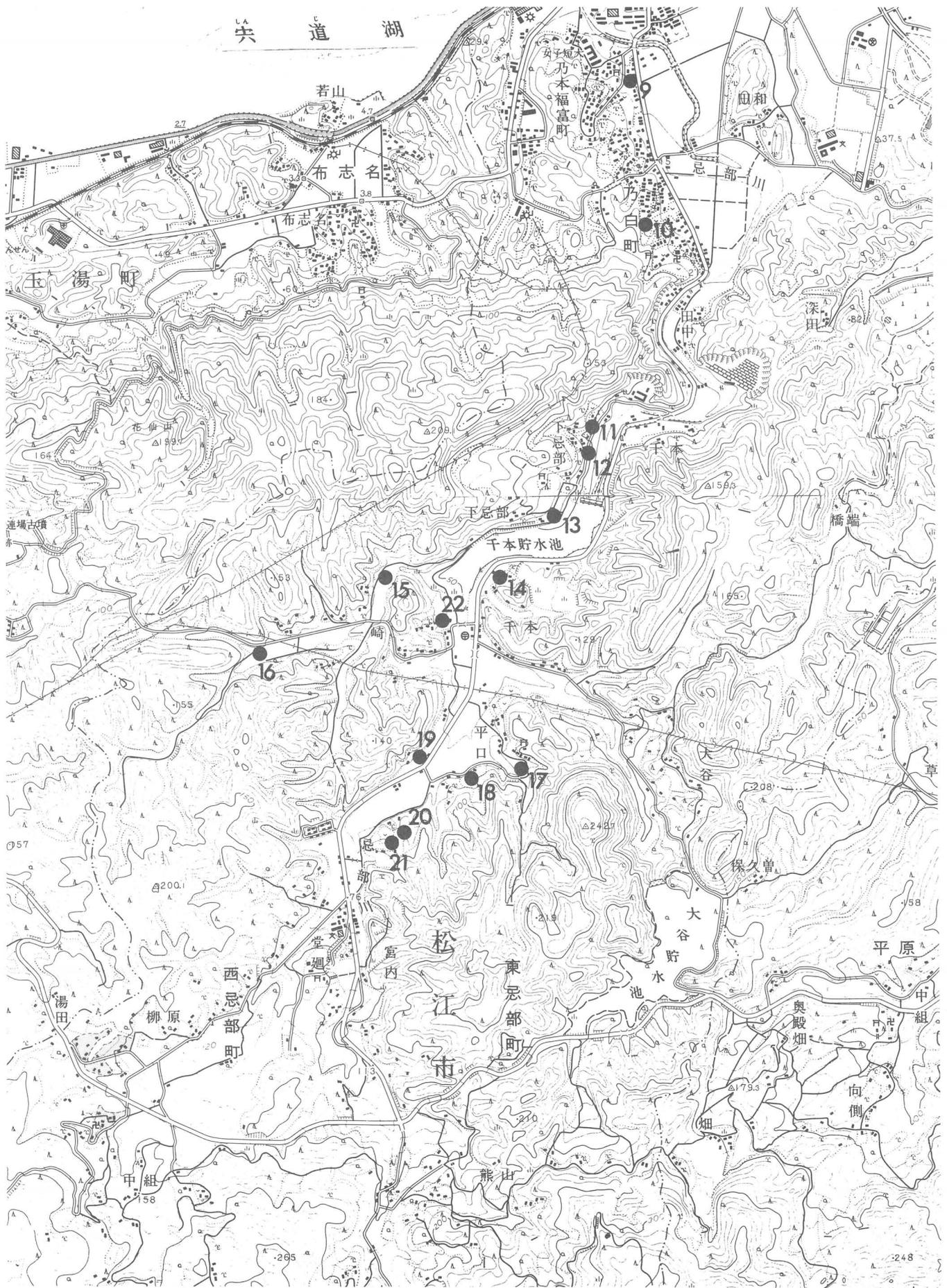


図7 忌部町周辺玉作関係遺跡の分布 1 : 25000

じめとして合計27遺跡が存在する。

出雲玉作跡宮垣地区では古墳時代前・中・後期の工房跡のほか、奈良・平安時代に及ぶ多数の工房跡が検出されている。また、近年出雲玉作跡宮ノ上地区で行なわれた調査では工房跡は検出されていないものの弥生末～古墳時代前期の土器とともに玉類未成品が出土しているので、この流域においても弥生時代にまで遡る可能性が出てきた。また、このたびの分布調査では、火尻原遺跡のように水晶平玉を主体とする8～9世紀代の玉作遺跡が相当数存在することが明らかになった。

5. 朝酌川流域

この流域では今のところ松江市西川津町の西川津遺跡しか知られていない。この遺跡では弥生前期に玉作りが行なわれていたことが確認されており、現在のところ県下で最古の玉作遺跡として注目すべきものである。布田遺跡と同様に擦り切り技法によって碧玉・緑色凝灰岩製の管玉が製作されている。

6. 宍道湖にそそぐ講武川流域

八束郡鹿島町の大日遺跡があるのみである。白瑪瑙あるいは石英片や滑石製勾玉状品が出土しているが、現状では玉作遺跡と断言できない。今後の調査が期待される。

7. 斐伊川支流赤川流域

大原郡大東町で、大東高校校庭遺跡と又下遺跡が知られている。両遺跡は約200m隔てた至近距離にあり、本来は同一の遺跡としてとらえた方が良いのかもしれない。大東高校校庭遺跡では工房跡は発見されていないが、5世紀前半ごろと思われる土器とともに碧玉勾玉未成品、碧玉管玉未成品などが出土している。

8. 旧斐伊川流域

出雲市矢野町の矢野遺跡で最近玉作関係遺物が出土し、この地域ではじめて確認されたものである。斐伊川は少なくとも8世紀以前はこの矢野遺跡の近くを流れていたものと考えられるので、旧斐伊川流域と仮称しておくことにする。

矢野遺跡では、碧玉片、瑪瑙片、水晶未成品、筋砥石が出土している。それらが出土した層は攪乱を受けてはいたが、ごく近辺に玉作遺跡の存在する可能性が高い。土器は主として弥生前期から古墳時代前期のものであり、玉作りもそれらの土器のいずれかに伴うものと推測されよう。

ところで、『出雲国風土記』をみると玉作関係記事は「意宇郡」と「仁多郡」のみにみられる。「意宇郡」の場合は大半が花仙山周辺の現在の玉湯町を中心とする地域の記事であるが、一例だけ遠隔地のものがある。すなわち「長江山 郡家東南五十里^{有一水精二}」とみえる記事がそれである。「長江山」は、能義郡伯太町上小竹にある永江山（標高570m）にあたとされている。残念ながらこのたびはその周辺まで踏査することができなかったので遺跡の存在等については不明である。

「仁多郡」には「玉作社」、「玉峯山」、「玉上神」等の関係記事がみられる。玉峯山は仁多郡仁多町亀嵩と能義郡広瀬町の境界にある。亀嵩集落からみるとよく目立つ標高820mの秀麗な山で、頂上付近には大岩が露出している。マツタケ岩付近の登山道で水晶原石を採取することができた。現在、頂上に神社はなく、麓の湯野神社境内に櫛明玉命を祀る玉作社が遷座されている。湯野神社周辺の水田、畑を中心に踏査したが、玉作関係遺物を採取することができなかった。ただし、川本健二氏によれば板持寅造氏宅前の水田中より瑪瑙、砥石が出土したことがあるらしいとのことであり、今後精緻な分布調査を実施すれば、この地域においても玉作関係遺跡が発見されるであろう。

以上の遺跡分布と年代を概観すれば、弥生時代の玉生産は西川津遺跡、布田遺跡、平所遺跡などのように原石産地からやや離れたところでも集落内で少しずつ実施されていたようであるが、古墳時代になると花仙山周辺が圧倒的多数を占めるようになる。さらに出雲の場合は奈良・平安時代まで玉生産の行なわれていたことが注意される。奈良・平安時代の成品出土例は少なく、どのような使用のされ方をしていたのか不明な点が多い。飴飾品とか仏具といったもの（正倉院御物の中に「莊玉」とされている水晶平玉状品がある）も検討すべきものと思われる。分布調査の結果では奈良・平安時代の遺跡では水晶平玉を多く生産しているようにみうけられる。なお、他地域では奈良・平安時代の玉生産はほとんど行なわれていないようであり、何故出雲のみが後世まで玉生産を続けたのか大きな問題といえる。（松本 岩雄）

表1 島根県玉作関係遺跡一覧

番号	名称	所在地	遺構・遺物	文献	備考
1	大原遺跡	安来市佐久保町大原	土師器, 須恵器, 碧玉片, 赤瑪瑙片, 石英片岩, 砥石	31	
2	玉造遺跡	安来市佐久保町玉造	土器片, 瑪瑙	31	
3	鍵尾遺跡	安来市折坂町鍵尾	筋砥石, 須恵器, 土師器	28・31	
4	高広遺跡	安来市黒井田町長廻	碧玉管玉未成品, 碧玉剥片, 須恵器	57	県教委保管
5	西川津遺跡	松江市西川津町海崎ほか	緑色凝灰岩管玉未成品, 筋砥石, 弥生土器	61	県教委保管
6	ぬの でん 布田遺跡	松江市竹矢町字布田ほか	緑色凝灰岩管玉未成品, 碧玉片, 瑪瑙片, 石鋸, 弥生土器	54	県教委保管
7	大草玉作遺跡	松江市大草町日岸田ほか	碧玉片, 瑪瑙片, 水晶, 碧玉勾玉未成品, 碧玉平玉未成品, 筋砥石	2・24	
8	平所遺跡	松江市矢田町字平所 535	工房跡, 水晶算盤玉状品未成品, 碧玉片, 鉄製工具, 筋砥石, 弥生土器	37・38	県教委保管
9	松本遺跡	松江市乃木福富町松本	碧玉片, 赤瑪瑙片, 須恵器		
10	乃白権現遺跡	松江市乃白町 623	白瑪瑙片, 赤瑪瑙片, 碧玉片, 土師器, 須恵器		玉作資料館保管
11	平松遺跡	松江市西忌部町字平松ほか	白瑪瑙, 赤瑪瑙, 碧玉, 筋砥石, 須恵器		
12	こじょうぐち 小城口遺跡	松江市西忌部町字小城口	白瑪瑙, 碧玉, 筋砥石, 須恵器		筋砥石は忌部神社保管
13	か け じり 垣ヶ尻遺跡	松江市西忌部町字垣ヶ尻	碧玉, 白瑪瑙, 赤瑪瑙, 水晶, 須恵器, 土師器		
14	千本遺跡	松江市東忌部町字千本	赤瑪瑙, 白瑪瑙, 須恵器, 鉄鏝		
15	砂子原遺跡	松江市西忌部町字砂子原	碧玉, 赤瑪瑙, 石英塊, 土師器		
16	片田遺跡	松江市西忌部町字片田	白瑪瑙, 水晶, 須恵器, 土師器		
17	おお じんだに 玉神谷遺跡	松江市東忌部町字玉神谷	碧玉, 赤瑪瑙, 水晶, 土師器, 須恵器		
18	一丁田遺跡	松江市東忌部町字一丁田	碧玉, 白瑪瑙, 水晶, 土師器, 須恵器		
19	堂廻遺跡	松江市西忌部町字堂廻	水晶, 石英, 土師器, 須恵器		筋砥石は忌部神社保管
20	中島遺跡	松江市東忌部町字中島	工房跡, 勾玉未成品, 有孔円板, 白玉, 内磨砥石, 土師器	19・20	
21	うしろばら 後原遺跡	松江市東忌部町字後原	碧玉製亀甲状石	64	玉作資料館保管
22	いっ さき 一崎遺跡	松江市西忌部町字一崎	結晶片岩製砥石	65	忌部神社保管
23	出雲玉作跡 宮垣地区	八束郡玉湯町大字玉造字宮垣ほか	工房跡, 勾玉未成品, 管玉未成品, 水晶丸玉未成品, 白玉未成品, 土師器	32	玉作湯神社・玉作資料館保管
24	出雲玉作跡 宮ノ上地区	八束郡玉湯町大字玉造字宮ノ上ほか	勾玉未成品, 管玉未成品, 筋砥石, 内磨砥石, 土師器, 須恵器	58・59	玉作湯神社・玉作資料館保管

番号	名 称	所 在 地	遺 構 ・ 遺 物	文 献	備 考
25	出雲玉作跡 玉ノ宮地区	八束郡玉湯町大字玉造字玉ノ宮ほか	勾玉未成品,管玉未成品,平玉未成品 筋砥石,内磨砥石,土師器,須恵器		玉作湯神社保管
26	蛇 喰 遺 跡	八束郡玉湯町大字玉造字蛇喰	碧玉,赤瑪瑙,白瑪瑙,水晶平玉 未成品,土師器,須恵器		
27	小 丸 山 遺 跡	八束郡玉湯町大字玉造字小丸山	碧玉,水晶,石英片岩,白瑪瑙, 管玉未成品,須恵器		
28	徳 連 場 遺 跡	八束郡玉湯町大字玉造字徳連場	碧玉,土師器		
29	向 新 宮 遺 跡	八束郡玉湯町大字玉造字向新宮	管玉未成品,丸玉未成品,筋砥石 内磨砥石		玉作湯神社保管
30	は と 波 止 遺 跡	八束郡玉湯町大字玉造字波止	碧玉製勾玉未成品,管玉未成品,瑪瑙		玉作湯神社保管
31	平 床 遺 跡	八束郡玉湯町大字玉造字平床	勾玉未成品,丸玉未成品,平玉未 成品,筋砥石,内磨砥石		玉作湯神社保管
32	日 焼 廻 遺 跡	八束郡玉湯町大字玉造字日焼廻 1325-1 ほか	碧玉,瑪瑙,水晶,土師器,須恵 器		
33	のぶきだに 延 木 谷 遺 跡	八束郡玉湯町大字玉造字南	碧玉,水晶,須恵器		
34	廻 原 遺 跡	八束郡玉湯町大字玉造字廻原	滑石勾玉未成品,碧玉,筋砥石, 内磨砥石,須恵器		玉作湯神社・玉作資料館保 管
35	西 遺 跡	八束郡玉湯町大字大谷 31	碧玉,水晶,筋砥石		玉作湯神社保管
36	大 田 遺 跡	八束郡玉湯町大字大谷字大田	赤瑪瑙勾玉未成品,砥石		玉作湯神社保管
37	たほとけ 田 仏 遺 跡	八束郡玉湯町大字大谷字田仏	碧玉,水晶,硅化木,須恵器		
38	有ノ木遺跡	八束郡玉湯町大字林村字別所・有ノ木	碧玉,水晶,土師器,須恵器		玉作資料館保管
39	神 田 遺 跡	八束郡玉湯町大字林村字別所	筋砥石		
40	火 尻 原 遺 跡	八束郡玉湯町大字林村字別所火尻 原	水晶平玉未成品,碧玉,赤瑪瑙, 白瑪瑙,土師器,須恵器		
41	ソ リ 田 遺 跡	八束郡玉湯町大字林村字別所	水晶平玉未成品,碧玉,土師器, 須恵器		
42	みやばたけ 宮 畑 遺 跡	八束郡玉湯町大字林村字根尾	碧玉・瑪瑙勾玉未成品,水晶平玉 未成品,須恵器		玉作資料館保管
43	脇 田 遺 跡	八束郡玉湯町大字林村 618 (通称「脇田」)	碧玉,土師器,須恵器		
44	六 反 田 遺 跡	八束郡玉湯町大字林村本郷字六反田	碧玉,水晶,須恵器		玉作資料館保管
45	向 市 遺 跡	八束郡玉湯町湯町	碧玉,硅化木,土師器,須恵器		
46	布志名狐廻遺跡	八束郡玉湯町大字布志名字狐廻 736	勾玉未成品,管玉未成品,切子玉未 成品,丸玉未成品,土師器,須恵器	50	玉作資料館保管
47	ながちようぶ 永 丁 夫 遺 跡	八束郡玉湯町大字布志名字永丁夫 ほか	管玉未成品,赤瑪瑙,白瑪瑙,水 晶,土師器,須恵器		
48	岩 屋 口 遺 跡	八束郡玉湯町大字布志名字岩屋口	碧玉,水晶,赤瑪瑙,白瑪瑙,土 師器,須恵器		
49	ぬの だ 布 田 遺 跡	八束郡玉湯町大字布志名字布田	碧玉,赤瑪瑙,土師器,須恵器		
50	だい にち 大 日 遺 跡	八束郡鹿島町南講武字大日	白瑪瑙,碧玉?,石英		鹿島町教委保管
51	大東高校 校庭遺跡	大原郡大東町大字大東字輪ノ内ほ か	勾玉未成品,管玉未成品,筋砥石 内磨砥石,土師器	36	県教委・島根大学保管
52	また げ 又 下 遺 跡	大原郡大東町大字大東字又下	水晶勾玉未成品,碧玉管玉未成品 赤瑪瑙,内磨砥石,須恵器	65	大東町教委保管
53	矢 野 遺 跡	出雲市矢野町	赤瑪瑙,白瑪瑙,碧玉,水晶,緑 色凝灰岩,筋砥石,弥生土器		島根大学保管

※ 文献番号は巻末の参考文献に一致する

Ⅲ 古代玉作遺跡の概要

1. 大原遺跡

所在 安来市佐久保町大原に所在する。伯太川に流れ込む小河川によって形成されたと思われるほぼ東西に走る小谷に位置している。この小谷は西に向かって開けており、遺物の散布はその北辺、すなわち丘陵南側斜面に認められる。標高6～8m、眼下に広がる谷水田の標高は4m程度である。

遺跡の概要 この遺跡は昭和47年、内田才氏によって『季刊文化財』第18号「安来にもあった玉造——攻玉遺跡の発見——」の中で発表され、安来市埋蔵文化財の遺跡分布図にも、大原遺跡、大原Ⅱ遺跡として掲載されている。

遺跡の東半分は竹林となっており、西半分は茶畑、その境付近は竹林の中に茶が生えている。西半分の茶畑は小さな谷をなしており、ゆるやかな斜面である。東半分の竹林はかなり急な斜面であるが、周囲の丘陵斜面よりはなだらかである。遺物の散布する範囲は東西60m、南北15m以上に渡っているが、周辺には雑木が多く、遺物を採取し難い状況にあるので、もっと広がる可能性がある。

東側斜面より須恵器、土師器片、碧玉、赤瑪瑙チップ、砥石を表採した。西側谷部では須恵器、土師器片、碧玉チップ、内磨砥石に使用された石英片岩の破片が採集され、これらは同一の遺跡であると考えられる。

遺物 須恵器は小細片ばかりであるが、器形の分かるものは、蓋坏^{註1}、高台をもつ坏。高坏である。このうち蓋坏は山陰須恵器編年第Ⅲ期のもの、高台付坏は柳浦編年2式^{註2}のものと考えられる。

土師器は小細片ばかりで、なおかつ風化が激しく、器形は不明であるが、高坏の脚が含まれているようである。

玉材としては碧玉、赤瑪瑙の破片が採集された。すべてチップであり、未成品らしいものは含まれていない。量的には碧玉がほとんどで、

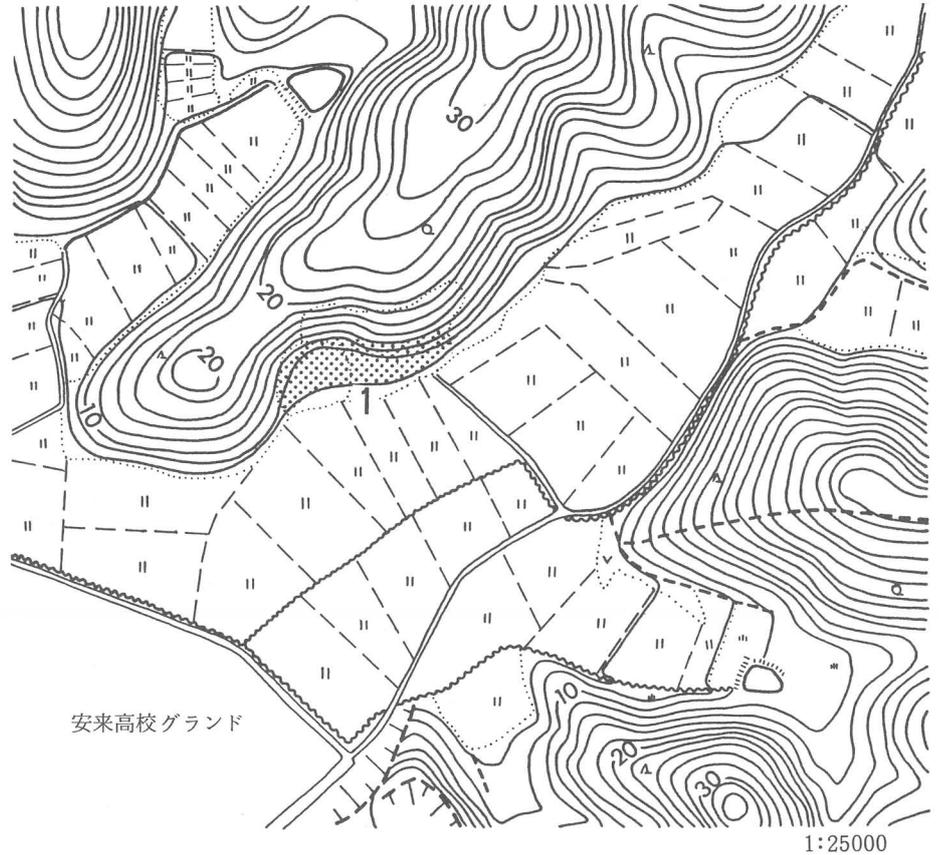


図8 大原遺跡(1)の位置



図9 大原遺跡近景

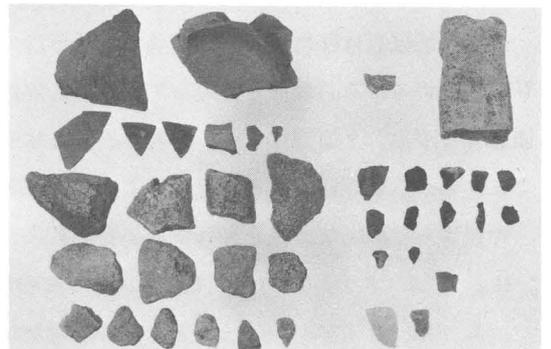


図10 大原遺跡採集遺物

赤瑪瑙チップは1点だけであった。碧玉は濃緑色を呈し、良質なもので、玉造、花仙山の碧玉に肉眼的には類似している。

砥石は金属用の砥石と思われるもので、現存長6cm幅3cm高さ3cmの四角柱状で、研ぎべりによって内側にわん曲している。使用痕は四面に見られるが、使用頻度に差が見られる。花崗岩製。

石英片岩は18×10×2.5mmの小破片であるが、内磨砥石の一部であろう。

なお、この遺跡からはかつて円面硯が採集されている。

まとめ 今回の踏査の採集品の須恵器が山陰Ⅲ期以降のものであったこと、石英片岩の破片が見られることから、従来、時期不詳であった安来の玉作遺跡が、花仙山周辺の玉作遺跡と深くかわり、時期もまた同じ頃であった事を示唆しているのではないかとと思われる。

註1. 山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論文集』昭和35年 以下古墳時代須恵器の年代観については全てこの論文にもとづく。

註2. 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第3号 松江考古学談話会 昭和55年 以下、歴史時代須恵器の年代観については主にこの論文にもとづく。

2. 玉造遺跡

所在 安来市佐久保町玉造に所在する。伯太川右岸の標高6mあまりの畑地で、北側は安来高校のグラウンドになっている。

遺跡の概要 「玉造」という地名のあることから、内田才氏によって昭和26年ごろから注意されていたが、その当時はまだ玉作りに関する遺物が確認されていなかった。ところが昭和47年に内田才・近藤正氏等が分布調査されたところ瑪瑙原石や土器片が採集され、玉作遺跡として認識されるに至った。^{註1}このたびの踏査では残念ながら遺物を採集することができなかったが、今後さらに丹念な調査を実施する必要がある。

註1. 内田才「安来にもあった玉造——攻玉遺跡の発見——」『季刊文化財』第18号 昭和47年

3. 鍵尾遺跡

所在 安来市折坂町鍵尾にある。

遺跡の概要 玉磨用と考えられる筋砥石1個が表面採集されていることから玉作遺跡の可能性が指摘されている。^{註1}地元の人はかつて附近で水晶や瑪瑙の破片を採取されたことがあるということである。^{註2}今回の調査では、砥石の明確な出土地点は確認することができなかった。字鍵尾谷と呼ばれる水田や畑（丘陵緩斜面）を踏査したが、その際には玉材の剥片等も採取することができなかった。ただし、周辺では相当数の土器片が採集された。

遺物 筋砥石は砂岩製で、欠損品であるが12×10cm、厚さ10cmあまりある。筋は一面のみにみられ、5条入っている。このたびの踏査で採集した遺物は、須恵器片33点、土師器片5点、青磁1点、古銭1点である。小片のため不明確ではあるが、須恵器片は8世紀代およびそれ以降のものが多い。

今後さらに綿密な調査を実施する必要がある。

註1. 内田才「原始・古代」『安来市誌』安来市 昭和45年

註2. 内田才「安来にもあった玉造——攻玉遺跡の発見——」『季刊文化財』第18号 昭和47年

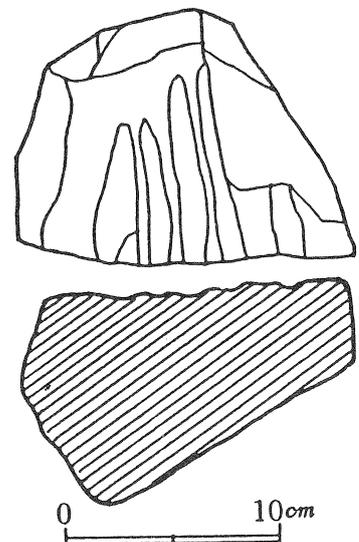


図11 鍵尾遺跡出土の砥石
（『安来市誌』1970より）

4. 高 広 遺 跡

所在 安来市黒井田町長廻に所在する。国鉄安来駅の南東1kmの地点で、『出雲国風土記』でいう意宇郡安来郷にあたる。

この地は、伯太川河口付近の東側に広がる低丘陵上に位置しており、遺跡の眼前に中海に向かって広がる大きな谷を望み、背後には標高100m以下の低山塊が広がっている。

遺跡の概要 高広遺跡は島根県住宅供給公社による「和田住宅団地」建設に伴い、島根県教育委員会が調査主体となり、昭和57、58年にわたって発掘調査が行なわれ、住居跡、土壇、横穴墓、掘立柱建物、段状遺構等が検出された。

そのうち調査区西端の谷斜面、谷底に当るⅡ区調査区の谷底部で検出された掘立柱建物跡S B18・19第1遺構面、S B20第2遺構面から碧玉管玉未成品、碧玉片が出土している。これらの遺構から検出された須恵器は、いずれも高広遺跡の編年では、7世期後半以降に編年されている。

遺物 1はS B19第1遺構面より出土。全長2.3cm、直径約1cmの多角形を呈し、各側面は縦方向に研磨痕が認められる。2はS B19第1遺構面より出土。一部に二次加工痕がある。3はS B18より出土。一部に二次加工痕がある。4はS B20第2遺構面より出土。石核状で、一部に二次加工痕がある。^{註1}

註1. 足立克己・丹羽野裕ほか『高広遺跡発掘調査報告書』 島根県教育委員会 昭和59年

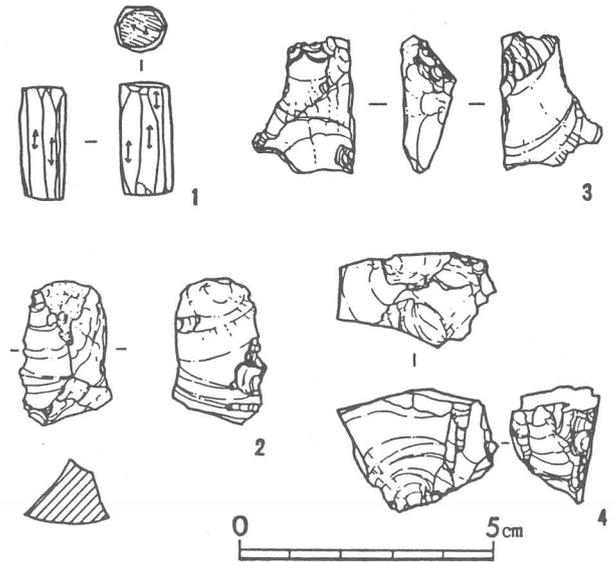


図12 高広遺跡Ⅱ区出土碧玉製管玉未成品実測図
(『高広遺跡』1984より)

5. 西 川 津 遺 跡

所在 松江市の北東部に広がる遺跡。朝酌川が蛇行しながら北から南へむかって大橋川の方へ流れているが、遺跡は朝酌川にかかる海崎橋^{かいさきはし}あたりからガラガラ橋付近にかけての広範囲に広がっている。現在、大半が海拔2～3mの水田地帯となっており、所在地は松江市西川津町海崎ほかである。

遺跡の概要 河川改修事業に伴い、島根県教育委員会が昭和52年度から昭和60年度まで断続的に発掘調査を実施してきたものである。

これまでの調査により、縄文時代早期から中世までの長期にわたる遺構・遺物が検出されている。ヤマトシジミを中心とする貝塚のほかに、遺構としては貯蔵穴、掘立柱建物跡、木製品製作に関係すると思われる杭列など、遺物としては土器・石器、鉄斧、骨角器、木製品など多種多様のものがみられる。

玉作関係の遺物は、弥生前期後半の土器とともに出土したとされているが、工房跡などの遺構は検出されていない。

遺物 玉作関係遺物は、緑色凝灰岩製の未成品数十点、筋砥石1点などで、量的には少ない。管玉が製作されており、その製作工程をおおまかにみると次のとおりである。①採取した材料に溝を入れ、板状に割る。②各面を板状に研磨する。③溝を入れたのち折って棒状のものを作成する。④棒状の未成品に直交する溝を入れて折り、

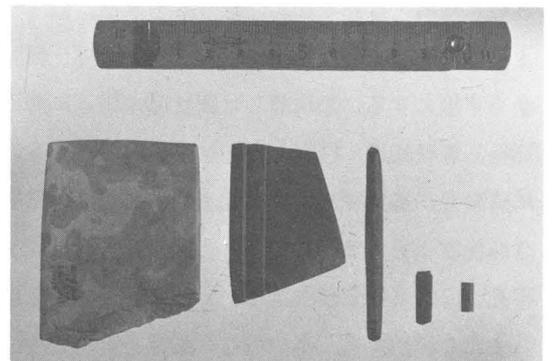


図13 西川津遺跡出土の管玉未成品

管玉の長さを決定する。⑤周縁を研磨する。⑥穿孔する。このような攻玉技法は基本的に布田遺跡のものと同じであり「擦り切り技法」と仮称されている。

本遺跡において、この技法がすでに弥生前期から存在することが確かめられた。西川津遺跡では擦り切り技法で製作したと思われる石斧もあるので、それとの関連も注意すべきであろう。弥生前期の玉作遺跡は鳥取県羽合町の長瀬高浜遺跡でも確認されているが、そこでは擦り切り技法はみられず、西川津遺跡と異なる様相を示している。

註1. 内田律雄『西川津遺跡の出土品よりみた古代出雲人のくらし展』 島根県立博物館 昭和61年

6. ぬの でん 布田遺跡

所在 松江市竹矢町字布田を中心として、その周辺に所在する。遺跡は意宇川の沖積作用によって形成された全長27kmの平野の、古い三角洲上微高地に位置する。標高3m前後、地目は水田である。

遺跡の概要 本遺跡は昭和43年10月、近藤正氏によって弥生遺跡として紹介され、昭和49年3月、県教委によって国道9号線バイパス計画路線内で試掘調査が行なわれており、弥生土器、須恵器、土師器、石斧が出土している。

昭和55年～57年にかけて、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会によって、一般国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査として、発掘が行なわれ、弥生時代前期～中期にかけてのものと、古墳時代中期、さらにそれ以降の時代の遺構が検出された。

玉作関係遺物は、溝、土壇、ピットの埋土中、包含層中より検出され、住居跡に伴うものはなかった。板状に加工した緑色凝灰岩に、施溝、打割を加えて管玉を製作するのを特徴とする。弥生時代中期中葉～後葉のものである。他に玉作関係の遺物としては、施溝に使う石鋸、砥石等がある。また凹石、平砥石などもあり、これは玉素材の分割、研磨に使用された可能性がある。

遺物 石鋸はSD10、IV A区SD02、明褐色砂質土遺物包含層、IV B区遺物包含層から出土している。玉髓、結晶片岩、流紋岩製である。

砥石はSD12下層より、筋砥石と思われる物が1点出土している。これは砥石の中央に長さ6.6cm、深さ0.7cm、幅1.7cmのU字溝が走り、内部は磨滅している。流紋岩質凝灰岩製。

他に砥石表面に細いU字状の溝が走る砥石が数点出土している。

玉類としては勾玉1点の他は管玉未成品が多数出土している。

管玉製作工程は、①石核を打割し、直方体に近い形に整形する。②その平坦面に長軸方向に施溝して薄く分割する。③この分割品にさらに施溝・打割を加え、長さ6～8cm、幅4～5cm、厚さ0.5～1cmの板状品をつくり出す。④この両面、側面に研磨を加え、表面を平坦にする。⑤研磨した板状品の側辺に沿って0.5～0.6cmの間隔をあけ施溝、打割し方柱状の未成品とする。⑥これの角を徐々に研磨し、多角柱～円柱に仕上げる。この段階で長さ1.5～3.0cm、3cm程度のものはここで半分折り、1.5cm程度のものにする。⑦穿孔。⑧研磨仕上げを行ない、径2～3mmの完成品を作る。

またこの他にも、やや新しい要素をもつ技法に、板状未成品とは別に形割段階で一応全面研磨した方柱を造る手法が存在したと考え

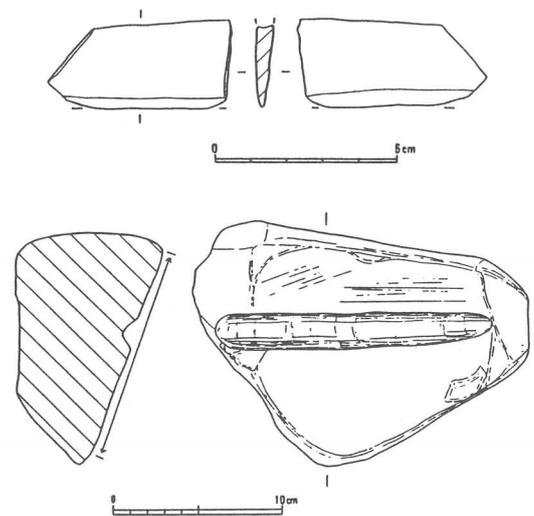


図14 布田遺跡出土の石鋸と筋砥石
(『国道9号バイパス予定地内調査報告書』IV 1983より)

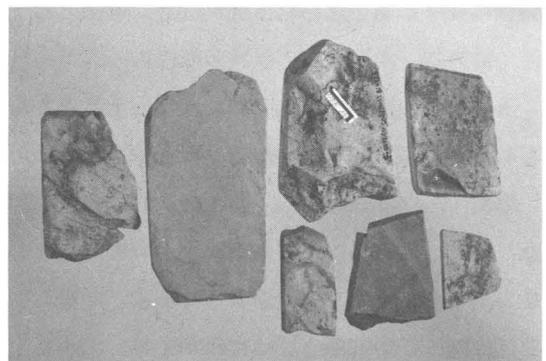


図15 布田遺跡出土の玉類未成品

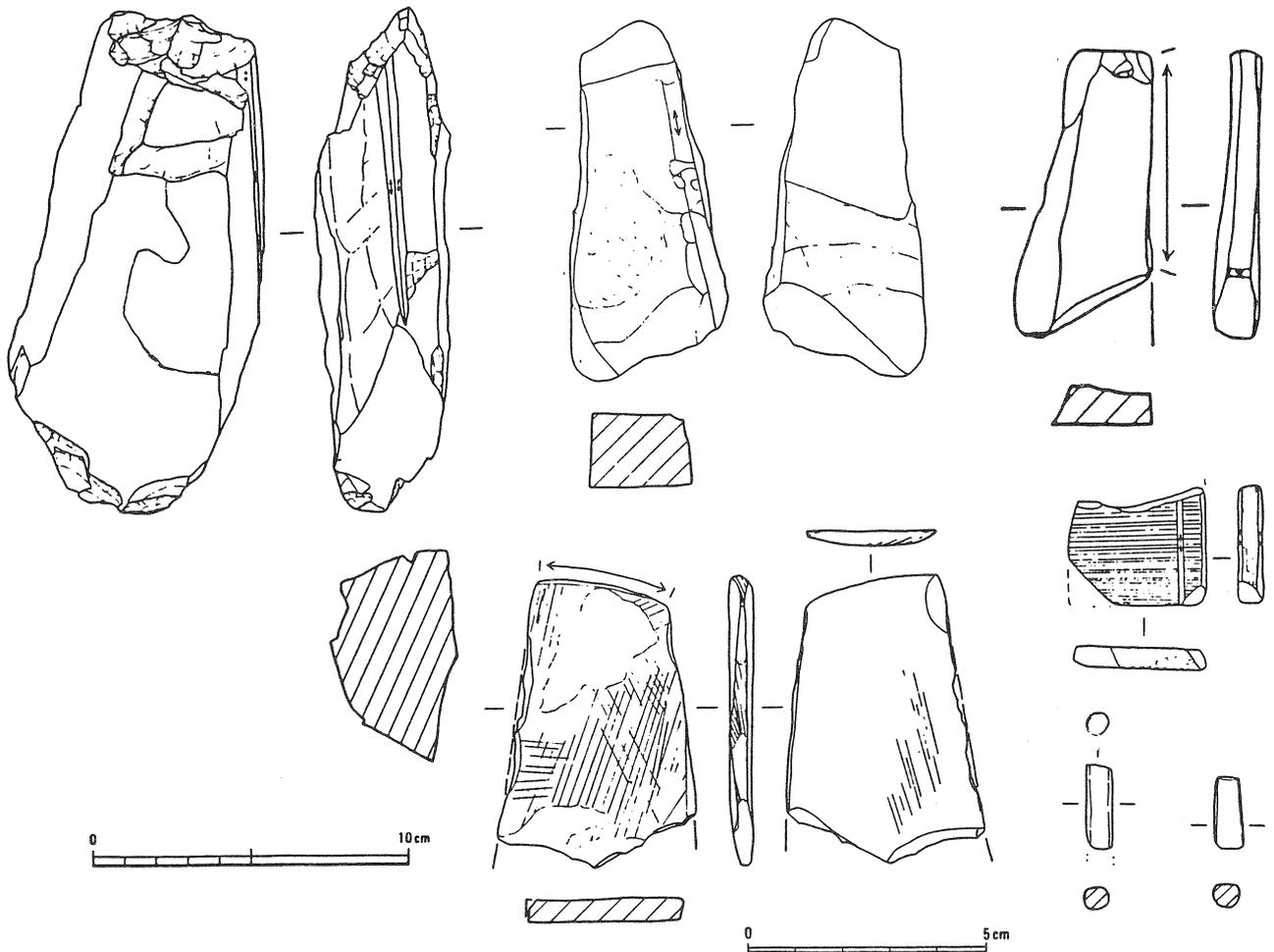


図 16 布田遺跡出土の玉類未成品（管玉製作工程）
 （『国道9号バイパス予定地内調査報告書』IV
 1983より）

られるものが、IV A区SK 22～25より出土している。この方柱に更に施溝，打割を行ない，4つの形割品が造られると思われる。

勾玉は，半透明黄褐色を呈する瑪瑙製で片面から穿孔されているが，弥生時代のものとは考えにくいのではないだろうか。

この他にSD12に西端部北側で，総数300点余の黒曜石，赤瑪瑙，青瑪瑙，硬質砂岩チップが幅1.5m，長さ4mにわたって散布しているのが検出された。チップは瑪瑙類が大半を占め，最も集中するあたりに径40cm程度の円形焼土と炭化物が検出されているが，遺溝はなかった。石器あるいは玉作りの工房跡の可能性が高い。時期不詳。

註1. 足立克己ほか「布田遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』IV 島根県教育委員会 昭和58年

7. 大草玉作遺跡

所在 松江市大草町日岸田ほかに所在する。意宇川下流左岸に六所神社があり，玉作関係遺物が発見される場所は主として六所神社境内の北側から東北にかけての附近一帯である。意宇川下流平野の中に位置するが，この一帯は標高約8mの微高地をなしており，地目はほとんどが水田である。ちょうど出雲国庁跡があるところを中心として広範囲に遺物の散布がみられる。

遺跡の概要 この遺跡はすでに明治初期には地元の人には知られていたようで，明治42年には学会でも紹介されている^{註1}。この遺跡の名称は松江市合併前の古い村名をとって「大庭玉作遺跡」とされているが，現在この地は大草町となっている^{註2}。

ので、ここでは便宜上「大草玉作遺跡」と仮称しておくことにする。

遺物の発見される土地の小字は東北端から日岸田、堂田、丁ノ明神、大社分田、宮ノ後、作兵衛田、御領田と続く一区画をなしており、その範囲はおよそ200m四方にわたるといわれている。さらにこの地域から約100m隔てた北側には竹矢町字神田があり、その西側約100mの所には山代町字樋ノ口があってこの二箇所からも砥石が発見されている。このように玉作関係遺物が発見される範囲はきわめて広範囲にわたっているが、分布密度のもっとも多いのは日岸田から宮ノ後にかけての一带であり、ことに日岸田の水田からは多量の瑪瑙、碧玉、水晶の原石とその石屑が採集されている。^{註3}



図17 大草玉作遺跡周辺の字名

昭和58年、島根県教育委員会は鉄塔建設予定地であった「^{かんてん}神田」地区の発掘調査を実施した。

その結果、玉類等は出土しなかったが花崗岩製筋砥石が1点発見された。ただし、この砥石とともに9世紀後半～10世紀初頭の須恵器坏が混在して出土するなど、包含層はプライマリーな状況を呈していなかったといふことである。^{註4}

遺物 日岸田の水田から採集されている玉作関係資料は次のとおりである。碧玉製こま1、碧玉勾玉未成品1、碧玉平玉未成品3、瑪瑙勾玉3、水晶平玉1、水晶切子玉未成品3、原石、石屑、筋砥石25。

これまでに一部の調査は実施されているが、工房跡を検出するまでには至っておらず、遺物発見地の全てを玉作関係の遺跡として認めるにはなお若干の疑問が残る、かつ年代・性格等についても不明な点が多い。出雲国庁跡の存在から、攻玉工房に加えて銹玉工房の存在した可能性も指摘されている。^{註5}

註1. 大道弘雄「曲玉砥石につきて」『考古界』第8編第2号 明治42年

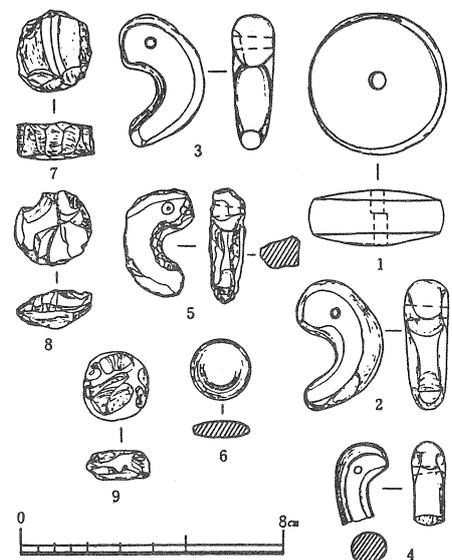


図18 大草玉作遺跡出土の玉類 (『島根県文化財調査報告書』5集より)

2. 浜田耕作・島田貞彦・梅原末治「出雲上代玉作遺物の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究报告』第10冊 昭和2年
3. 近藤正「玉作関係遺物」『島根県文化財調査報告書』第5集 島根県教育委員会 昭和43年
4. 三宅博士氏の御教示による。
5. 寺村光晴『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館 昭和55年

8. 平所遺跡

所在 松江市矢田町字平所 535 に所在する。この地は茶臼山（標高 171 m）の東北麓，南から北に派生する支脈の西側斜面に位置しており，標高20～30 mである。現在は国道9号道バイパスとなっている。

遺跡の概要 遺跡は昭和50年，国道9号線バイパス建設に伴い島根県教育委員会によって調査された。

調査の結果竪穴式住居3，玉作工房跡1，溝状遺構1，古墳時代後期の埴輪窯跡1が検出された。このうち玉作工房跡は鍵尾I式土器を伴い，主に水晶を原材として算盤玉状・丸玉状の2種の玉を作成していた。また多くの鉄製工具が検出された。

玉作工房は隅丸方形プランを呈し，東壁長 5.45 m，西壁長 5.50 m，南壁長 5.65 m，北壁長 5.50 mを測る。ほぼ中央に工作用特殊ピットを持ち，これは径 110 × 65 cmで，二段掘りをなしており西側が深さ10cmの浅いテラスになっている。基底部に厚さ5 cmの乳白色粘土が見られ，テラス面には厚さ3 cm余りの暗褐色砂が認められ，上縁には一部に水晶剥片・屑片が集積していた。

遺物 玉材として水晶質材 816 点，碧玉質材 106 点，赤瑪瑙質材 2 点の計 924 点の未成品，剥片，屑片が出土している。

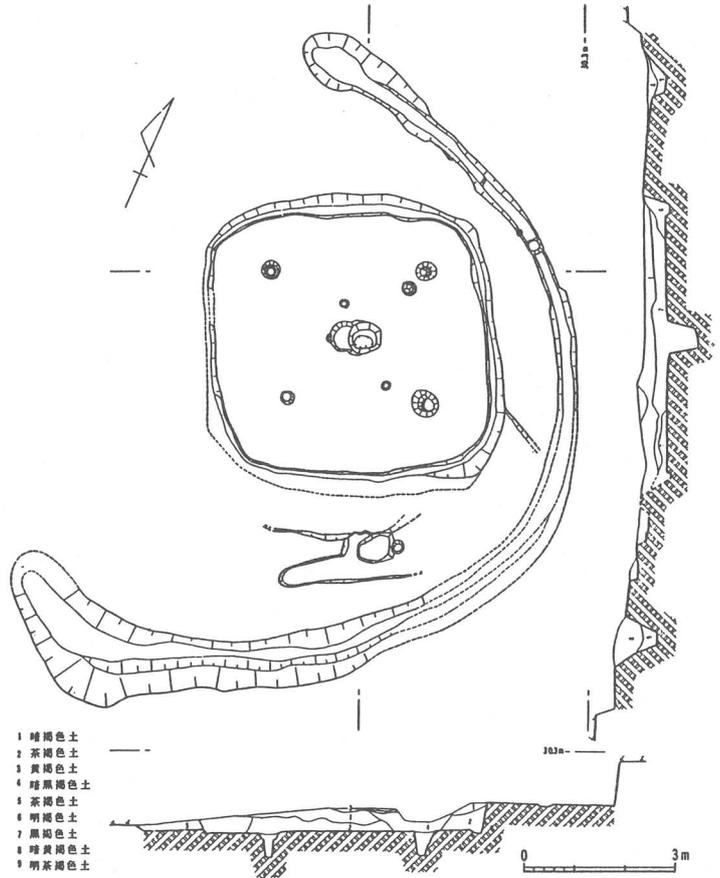


図19 平所遺跡の玉作工房跡
（『国道9号バイパス予定地内調査報告書』II 1977より）

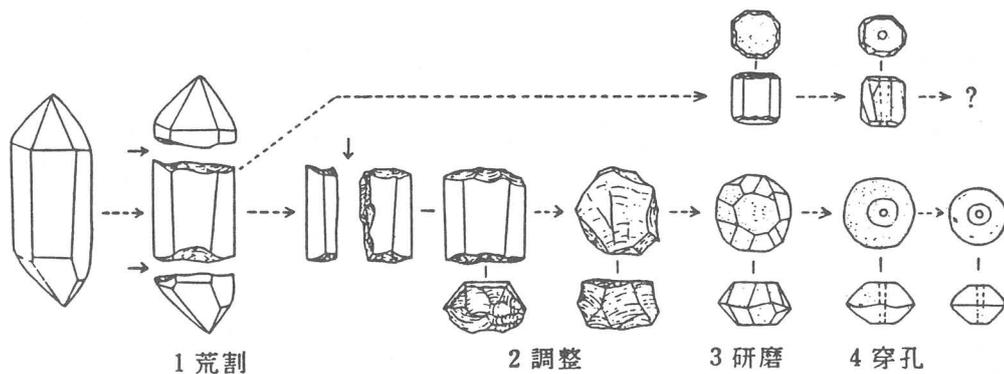


図20 平所遺跡出土水晶製玉類製作工程模式図
（『国道9号バイパス予定地内調査報告書』II 1977より）

水晶原石はまず上下両端部を打ち欠き、これの上下面に打撃、押圧剥離によって調整を加え、縦方向に側面が剥離される。こうして得られた扁平な未成品は、側面から順次磨かれ、この段階で算盤玉状の形状が作り出される。穿孔は一方向穿孔で先端の平らな錐が用いられたと思われる。穿孔後さらに入念な研磨が加えられ成品として仕上げられたと思われる。

鉄器は鑿状2種、ケンガネ状、錐状のものが主体をなし、総数109点が工作用ピットを中心に出土している。なかでも錐が62点と一番多く、これは断面方形を呈し、先端は先細りで断面円形をなしている。

砥石は4点出土しており、砂岩製筋砥石が2点ある。また27×17×8.7cmを測る上下に平坦面をもつ自然石玄武岩が竪穴内の北東隅付近から出土しており、台石として使用されたものと思われる。また錐の勢車と考えられる径2.8cm、中央に0.6cmの小孔を有する球形土製品が出土している。

土器は壺・甕類、長頸壺、器台、脚付盆、高坏など各器種にわたりこれらは鍵尾Ⅰ式に編年される。^{註1}

註1. 松本岩雄ほか「平所遺跡(2)」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ 島根県教育委員会 昭和52年

9. 松本遺跡

所在 松江市乃木福富町松本に所在する。この地は花仙山山塊の北東端の小さく舌状に張り出した台地状丘陵上に位置し、眼下に忌部川の後背水田を見下ろしている。標高25～30m、地目は畑である。

遺跡の概要 遺跡はこの地域では珍らしく丘陵頂部の台地状平坦地に営まれている。遺物は270×100mの広範囲に散布しており、須恵器が大半であるが、玉類、弥生土器も含まれている。遺跡の南方は茶畑になっており、土が露出していなかったため遺物は採集出来なかったが、地形的に見て、遺跡の存在が予想される。

玉類は少量であるがここでも小規模な玉作りが行なわれていたのであろう。

遺物 須恵器は19点が採集されたが、小片ばかりである。

土師器は小片1点が採集された。

弥生土器は1点採集された。小片であるが壺の底部であると思われる。

玉材としては碧玉1点、赤瑪瑙1点が採集された。碧玉は皮の部分と思われる、質は悪い。赤瑪瑙は厚さ1.4cmの板状原石の破片である。

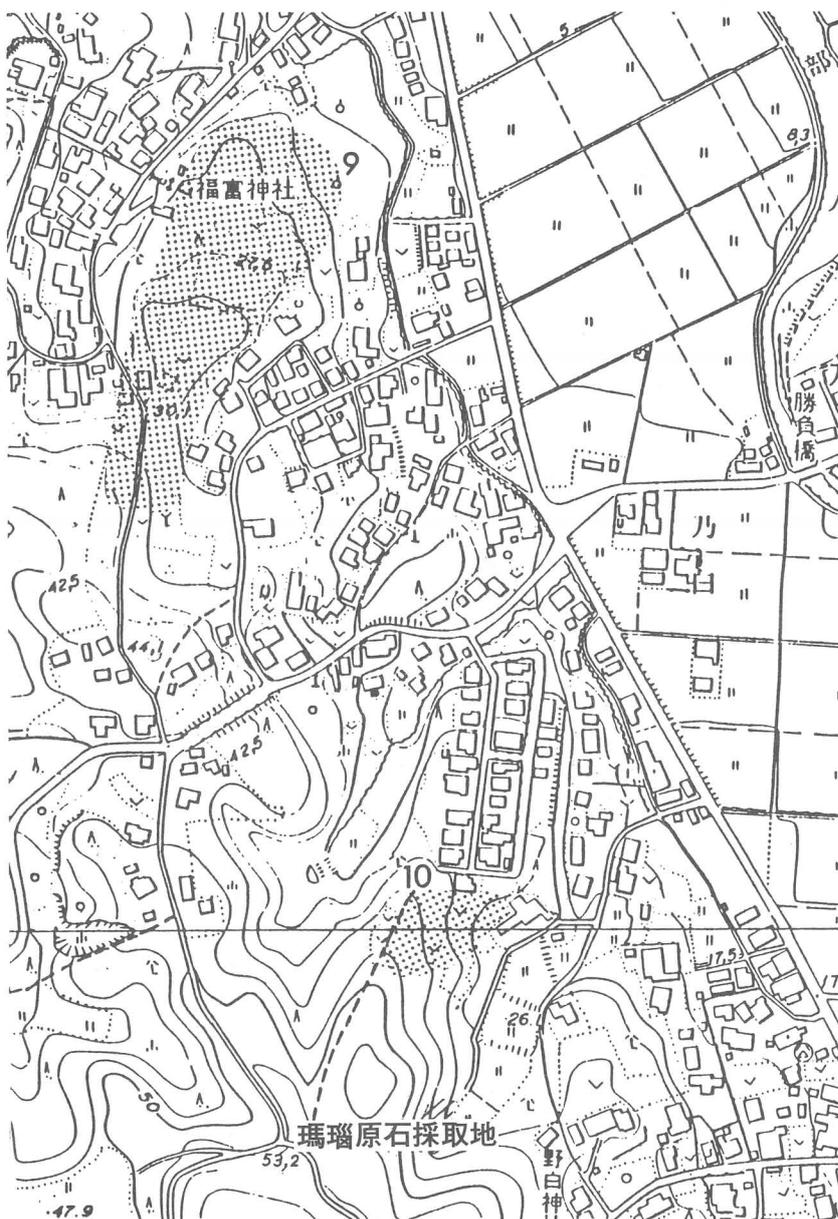


図21 松本遺跡(9)と乃白権現遺跡(10)の位置 1:5000

10. 乃白権現遺跡

所在 松江市乃白町 623 に所在し、乃白川（忌部川）の沖積平野水田を見下ろす、花仙山山塊東端の標高10～20 m程度の丘陵緩斜面を占めている。現状は畑となっている。

遺跡の概要 本遺跡は土地所有者が畑として開墾、耕作中に遺物が発見され、1979年玉作資料館の勝部氏が確認されたものである。この時の遺物には赤・白瑪瑙原石、碧玉・瑪瑙勾玉未成品3点、碧玉・石英平玉未成品2点、碧玉管玉未成品1点、その他不明未成品4点、筋砥石1点、内磨砥石1点、剥片があり、玉作資料館に保管されている。目次権一郎氏によれば近くに瑪瑙掘りのあとがあるが、質がよくないらしい。

今回の踏査では、土器類、玉類ともに良好な資料は得ることが出来なかったが、良質の赤瑪瑙剥片など数点の玉材の散布が見られ、また、特に目次氏宅南東にある畑は、耕されて間もなくということもあり、多くの遺物が見られた。

遺物 須恵器は小片ばかりであるが、山陰須恵器編年Ⅳ期の蓋海の破片が含まれている。

土師器は小細片ばかりで器形不明。

玉材としては碧玉1点、赤瑪瑙4点、白瑪瑙5点が採集された。いずれも破片であり、未成品らしい遺物は見られないが、最も良質な石は赤瑪瑙である。

まとめ 今回の踏査では未成品等の遺物は発見出来なかったが、赤・白瑪瑙剥片が採集され、またかつて採集された遺物のことを考え合せば、玉作遺跡と見ることが出来るであろう。

またこの遺跡の南方にある小谷の谷奥で、ほ場整備が行なわれており、丘陵カット面の赤色土中に白瑪瑙原石が不整形ではあるが板状に近い形で含まれているのを確認した。この地域においても、こうした遺跡近くの露頭などで採掘された原石を用いて小規模な玉作りが行なわれたものと思われる。

11. 平松遺跡

所在 松江市西忌部町字平松を中心とした地域に位置する。東向きの斜面中腹に南北に走る町道があり、遺物の散布は道の上と下方の畑地にみとめられる。遺跡は忌部川の谷水田に面する。花仙山山塊の南東端の丘陵緩斜面上（東向きの斜面）に位置し、標高は40～60 mである。現状では道によって、北側の丘陵上と、南側の谷水田との間の緩斜面上に開かれた畑上とに分断されているが、もとはもっとなだらかな一続きの斜面であったのであろう。



図22 松本遺跡遠景

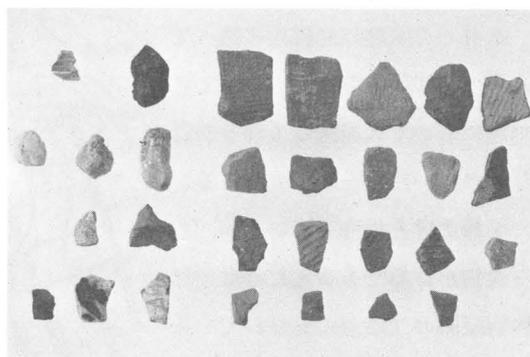


図23 松本遺跡採集遺物



図24 乃白権現遺跡近景

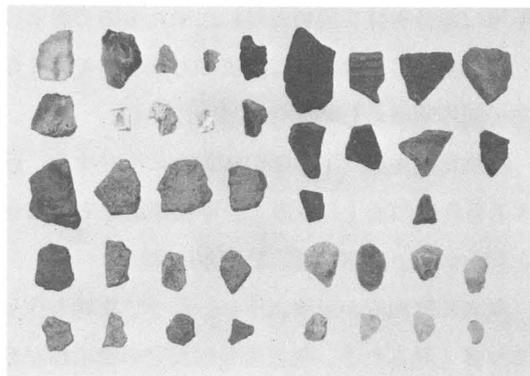


図25 乃白権現遺跡採集遺物

遺跡の概要 本遺跡は昭和2年に刊行された『京都帝国大学文学部考古学研究報告』にもすでに紹介^{註1}されている。南北300m、東西100mの広い範囲に遺物の散布が見られ、また東へ300mほど行った所の字清水尻、穴が峠の地にも玉作遺跡の存在が知られていたが、現在は土取りのため消滅してしまっている。

これらの遺跡は忌部川に沿って近接した状態で存在し、かつてこの地において大規模な玉作りが行なわれていたことが推測される。

平松遺跡と総称しているが、現在遺物が採集できる場所は平松、鋳物屋脇の二地点に分かれていますので、以下それぞれの地区毎に概要を記することにする。

平松地区 西忌部町字平松に所在する。南東方向にゆるやかに傾斜し、忌部川の谷水田を見下ろすことが出来る。標高50~60mで地目は畑。石原薫氏宅の裏の畑に最も多く遺物が散布している。白瑪瑙が圧倒的に多く、赤瑪瑙、碧玉片が若干ある。

遺物 須恵器は小片ばかり6点採集された。不明品ばかりであるが、古手の物も混っているようである。

玉材は白瑪瑙62点、碧玉3点、赤瑪瑙5点、カド石3点で、白瑪瑙が85%を占める。

この白瑪瑙は全て原石塊状、または原石の地肌を残しており、フレイク、チップ状のものが数点見られる。これらは、玉を作る際に不用な部分を打ち欠いた時に出来たものであろう。

赤瑪瑙、碧玉は美しい良質のものである。またカド石は、その端に一部赤瑪瑙らしい部分を持っている。

鋳物屋脇地区 下忌部町59番地に所在する。忌部川の谷水田に接する丘陵緩斜面上に位置し、平松遺跡ともとは一続きであったものと思われる。地目は畑、標高40m程度。

屋号の鋳物屋が示すように、かつて鋳物を作っていたようで、鉄滓が多く見られる。現在加藤勉氏宅の横の畑が起こされており、多くの白瑪瑙を中心とする遺物が採集された。

遺物 須恵器は小片3点を採取した。器形が分かるものに高台付

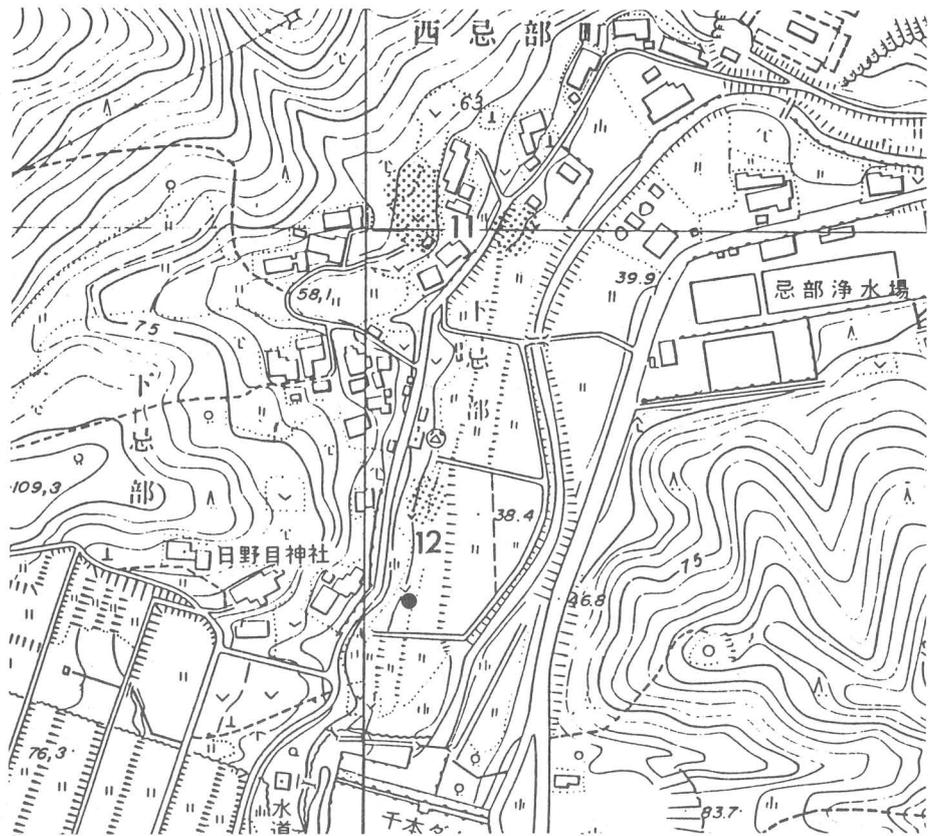


図26 平松遺跡(11)と小城口遺跡(12)の位置 1:5000



図27 平松遺跡遠景

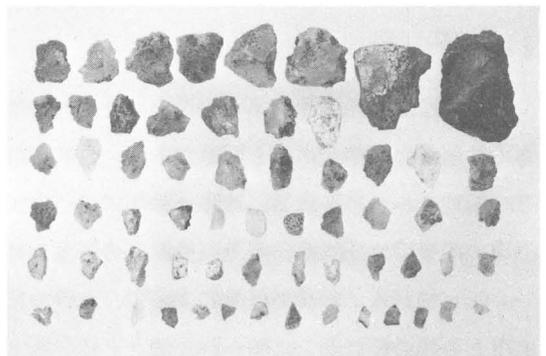


図28 平松遺跡採集遺物

の坏1点がある。

鉄滓は採集したものは5点であるが、もっと多く見られた。

玉材は白瑪瑙67点、赤瑪瑙11点、碧玉5点、淡緑色不明石7点、水晶2点をかぞえる。

白瑪瑙が全体の70%以上を占めており、圧倒的に多い。原石の自然面を残しているものがほとんどである。現存長17×10×3mmの未成品残欠が1点みられる。板状に加工されており、両面はかなり磨かれており、生きている面は楕円形を呈している。

水晶、碧玉、赤瑪瑙は良質であるが、いずれもチップで、数も少ない。水晶1点に30×18×10mmの小塊状のものが見られるが、未成品である可能性は少ない。

淡緑色を呈し、瑪瑙様の産状を呈する名称不明の石が7点見られる。碧玉の質の悪い物かもしれない。

註1. 京都帝国大学「出雲上代玉作遺物の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第10冊 昭和2年

12. 小 城 口 遺 跡

所在 松江市西忌部町下忌部字小城口に所在し、平松遺跡の南方にあたる。

遺跡の概要 鋳物屋脇より200mほど忌部川上流に行ったところで、東側に向かって傾斜する緩斜面上に位置する。標高40~50m。地目は畑である。遺物の散布は極めて希薄であるが、公会堂の南側に若干集中している。

また、忌部神社に「大正14年1月10日石原幸太郎奉納 下忌部字小城口ニテ発見」の墨書のある筋砥石が奉納されている。これは、長さ32cm、幅18cm、厚さ15cmの花崗岩製で二面が使用されている。(図版4-6)

遺物 須恵器は小片3点を採取したが、時期、器形については不明。

玉材は白瑪瑙6点、石英6点、碧玉に近いカド石1点であり、いずれも小片で、未成品等はみられない。

13. 垣ケ尻遺跡

所在 松江市西忌部町字垣ケ尻に所在する。千本貯水池が、逆「く」の字状に折れた所の、その曲折突端の丘陵緩斜面上に位置している。現在は千本貯水池を見下ろしているが、もともとは忌部川沿いの谷水田まで、なだらかに傾斜していたと思われる、千本池の湖底にも遺跡が続いている可能性が高い。標高60m前後、地目は畑である。

遺跡の概要 『松江市の埋蔵文化財』松江市教育委員会

(1980)によると、この地点から20mほど西に行ったあたりに下忌部玉作遺跡として記載されているが、今回の踏査では確認



図29 垣ケ尻遺跡13の位置 1:5000

出来なかった。

遺物の分布は比較的密度が低く、玉類石材片が多く見られ、土器類は少ない。普通の碧玉とは少し違った濃暗緑色、また淡緑色を呈する石材が目される。

遺物 須恵器は小細片が3点あり、いずれも器形不明。

土師器は小細片が2点あり、いずれも器形不明。

玉材は碧玉5点、白瑪瑙3点、赤瑪瑙4点、水晶1点、淡緑色碧玉様石4点が採集された。

碧玉5点のうち濃緑色の通常みられる碧玉は1点のみで、他は濃暗緑色を呈する石である。このうち1点は、 $3.5 \times 1.7 \times 1.6$ cmを測り、全面に荒い調整を加えており勾玉未成品の残欠と思われる。

白瑪瑙は1点がフレイクで他は自然面がほとんどである小塊状の石片である。さほど良質の美しいものではない。

赤瑪瑙はチップが4点採集された。これもまた、特に良質と言える程のものではない。

水晶破片は無色透明の良品で、 $1.9 \times 1.5 \times 0.8$ cmを測り、割れていない面に荒い研磨痕を残しており、未成品の残欠と考えられる。

以上の他にカド石4点、石英3点、磁器4点、五十銭硬貨1点を採集した。

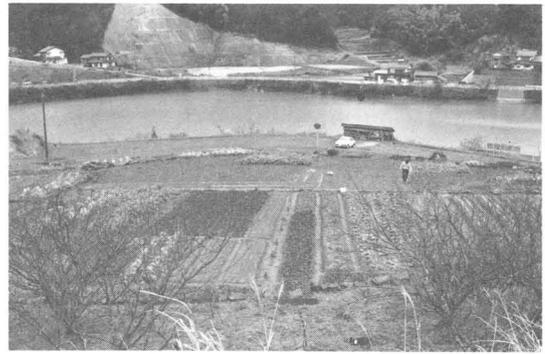


図30 垣ヶ尻遺跡近景



図31 千本遺跡(14)の位置 1:5000

14. 千本遺跡

所在 松江市東忌部町字千本に所在する。北西に向かってゆるやかに低くなる傾斜地上に位置する。標高55~65m、地目は畑。この地は、千本貯水池の南沿いに位置しており、尾根一つをへだてた南に『忌部村誌』（昭和2年）に攻玉地として記載されている千本があり、そこからは、砥石、勾玉、未製品瑪瑙破片、土器が出土したとされている。

遺跡の概要 遺跡は普賢寺の参道沿いにある畑であり、散布範囲は50×60mあまりで、広いが全体に希薄な分布状況である。採集品



図32 千本遺跡近景

の中には鉄滓が含まれており、この地で何らかの製鉄が行なわれていたことがあるのであろう。またこの地のすぐ北側では採土の為、土が大きく削り取られており、遺跡が破壊されている可能性が高い。

遺物 須恵器は小片3点が採集された。うち1点は高台付の坏である。他は不明である。

土師器は器形不明の小片1点がある。

玉材としては赤瑪瑙1点、白瑪瑙2点、石英12点が採集されている。このうち赤瑪瑙は残存長2.5×2×1cmで、何らかの未成品(荒割り)残欠になる可能性が高い。白瑪瑙は自然面の多い小片である。

鉄滓は採集したのは1点であるが、比較的、数多く見つけることが出来た。

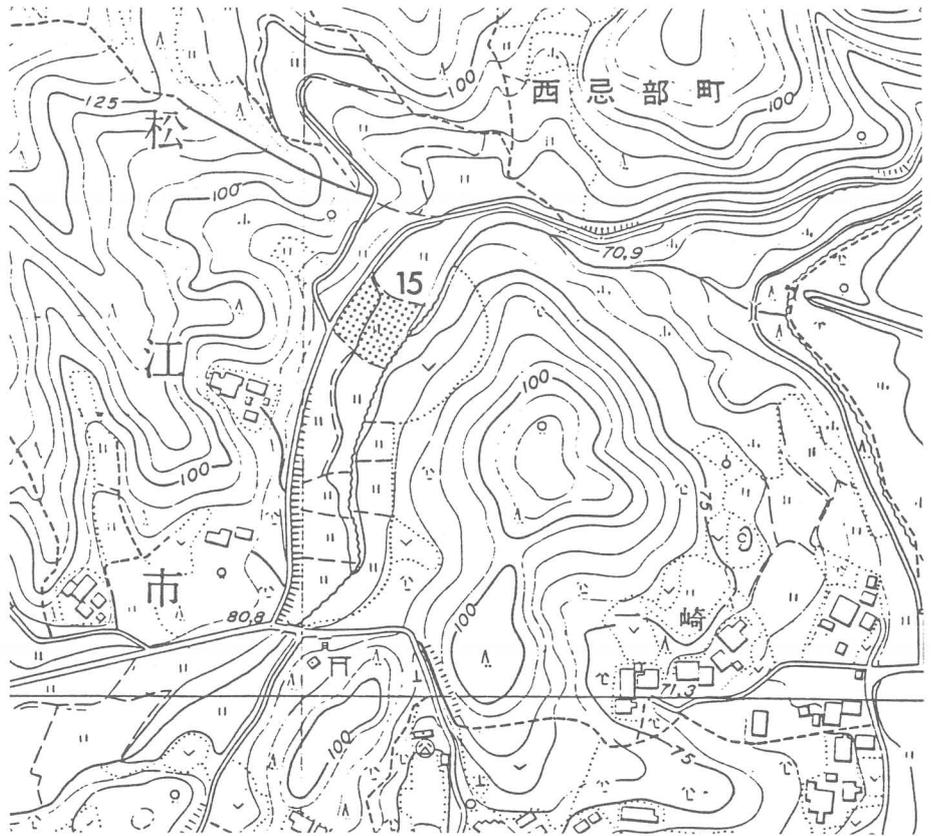


図33 砂子原遺跡15の位置 1:5000

15. 砂子原遺跡

所在 松江市西忌部町字砂子原に所在する。遺跡は一崎集落のある丘陵背後を回って流れ、千本貯水池に流れこむ小川によって形成された谷中の水田に位置している。この地は南東方向にゆるやかに傾斜しており、標高約75m、地目は水田である。

遺跡の概要 道路から川までの間に、ほ場整備の行なわれた三段の水田があり、踏査の行なわれた日に、たまたま荒起こしされていたため、遺物を採集することが出来た。したがって周辺にも遺物が散布している可能性がある。現状では40×50m程度の範囲に遺物が見られた。

また『島根県史蹟名勝天然紀念物調査報告第三輯』（昭和3年）によると、砂子原では多く紅白瑪瑙を産すと記載されており、本遺跡の北西～西にかけて広がる山塊中から瑪瑙原石が産出することが予想される。

今回の踏査では数は少ないながらも、土師器、碧玉、赤瑪瑙が採集されており、玉作遺跡である可能性は高いと思われる。



図34 砂子原遺跡遠景

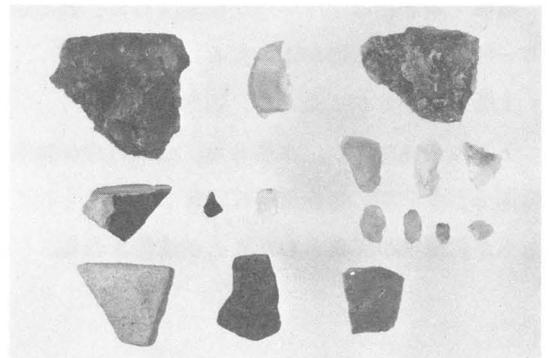


図35 砂子原遺跡採集遺物

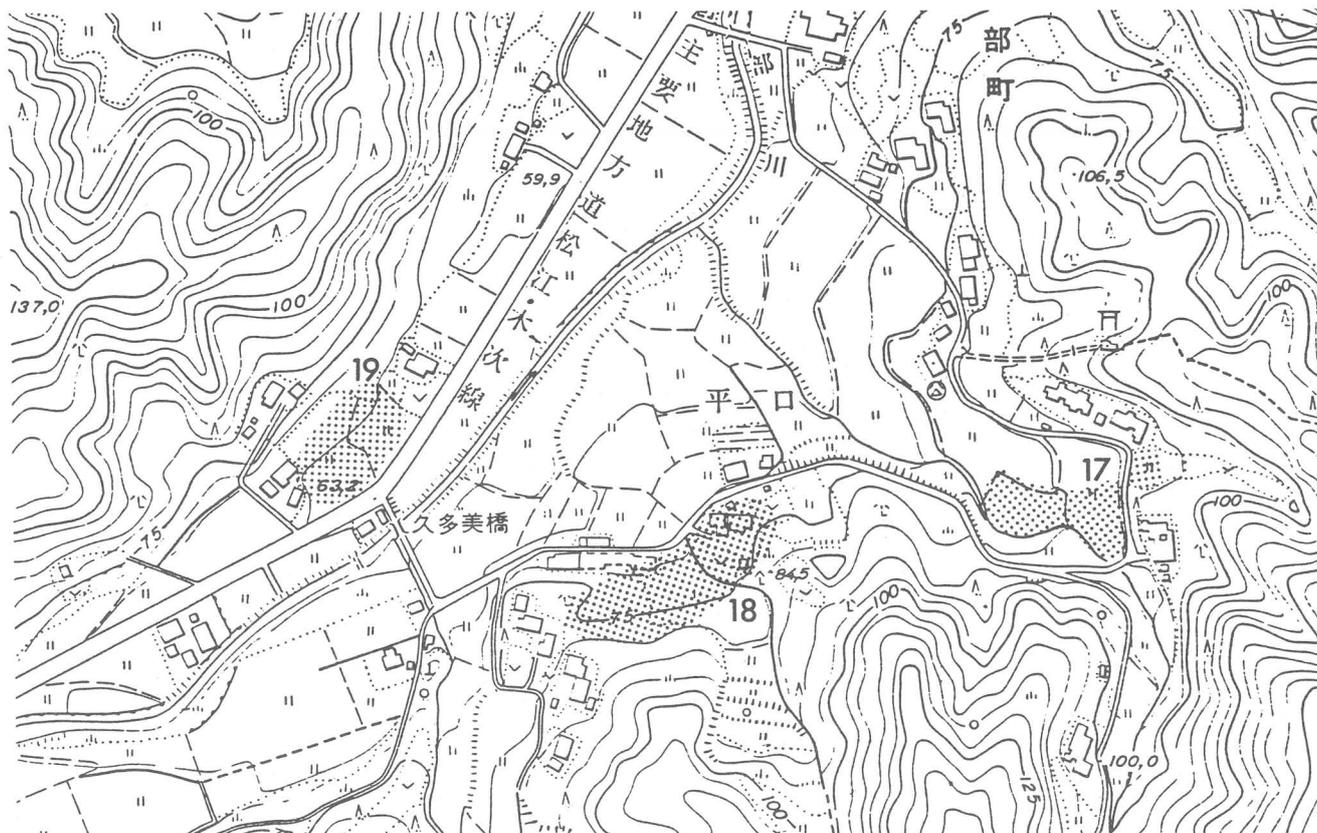


図39 玉神谷遺跡(17), 一丁田遺跡(18), 堂廻遺跡(19)の位置 1 : 5000

17. 玉神谷遺跡

おおじんだに

所在 松江市東忌部町字玉神谷に所在する。この地は久多美山西麓を流れ、忌部川に合流する小河川によって形成された小谷にあり、小河川の上流約 350 m、久多美山北西麓に位置している。標高85 m 程度、地目は水田である。

遺跡の概要 遺跡は、昭和61年に区画整理が行なわれた水田であり、水田中及びあぜ部分から遺物が採集され、あぜ部分で多く見出すことが出来た。土地所有者である福島照氏の言によれば、かつては多くの土器類、玉類が見られ、水晶玉、筋砥石が出土したこともあるそうである。また同氏より、かつて出土した須恵器、土師器、硅化木等の遺物約60点の寄贈を受けた。この須恵器の中には山陰須恵器編年Ⅰ期から歴史時代のものまでが見られる。

また採集品の中には、鉄鏝、久多美城にかかわりが有る可能性のある青磁が含まれており、本遺跡は玉作遺跡のみならず、連綿と続いた幅広い複合遺跡であった可能性が高い。

遺物 須恵器は小片15点を採集した。時期、器形の分かるものとしては蓋坏、高坏が含まれており、蓋坏は山陰Ⅲ期のものである。

土師器は小片15点を採集した。壺、甕の胴部が多い。高坏様のもも含まれている。

玉材は碧玉7点、赤瑪瑙3点、水晶9点が採集された。

碧玉は全てチップ状のものであり、赤瑪瑙は2点がフレイクである。



図40 玉神谷遺跡近景



図41 玉神谷遺跡採集遺物

水晶はチップ1点が無色透明の良質なものである他は、全て白濁部分が多く、良質なものではない。未成品が2点採集されており、1点は $2.3 \times 1.5 \times 0.7 \sim 1.0$ cmの隅丸直方体を呈しており、全面に押圧剥離による細部調整が見られ、一部荒い研磨痕が見られる。もう一点は平玉未成品の残欠であり、直径1.1cm、厚さ0.5cmを測る。全体に細部調整が見られ、側面には、一部擦痕が残っている。

鉄鏝は大小11点が採集されたが、水田中にはまだ多く見られた。炉壁が溶けて出来たと思われるガラス状の物も含まれている。

青磁は1点あり、碗と思われる。



図42 一丁田遺跡遠景

18. 一丁田遺跡

所在 松江市東忌部町字一丁田に所在する。この地は久多美山の西約600mにある。長さ250m足らずの小谷の谷尻北側斜面に占地しており、玉神谷遺跡の西約250mに位置している。

遺跡は北側に向ってゆるやかに傾斜しており、標高70~80m、地目は畑である。

遺跡の概要 本遺跡の近くには『松江市の埋蔵文化財—遺跡分布調査報告書—』松江市教育委員会(1980)によると、平口横穴群三穴が存在することになっているが、今回の踏査では、見出すことは出来なかった。

土地所有者の舟木一郎氏の言によると、現在宅地になっている所の地名が「一丁田」であり、この宅地で、碧玉、赤瑪瑙、水晶が時折出土し、炭焼小屋付近から玉磨砥石が出土したそうであるが、現在出土品の所在は不明である。舟木一郎氏宅の西側、水田を隔てたところに畑があり、遺物を採集することができたのでこれらも含めて「一丁田遺跡」と呼ぶこととした。舟木氏の話や今回の踏査の結果からすると、本遺跡は玉作遺跡の可能性が高いと思われる。

遺物 須恵器は小片2点を採集した。いずれも甕の胴部と思われる。

土師器は小片が2点あり、いずれも器形不明。

玉材としては碧玉1点、白瑪瑙1点、水晶2点、カド石1点が採集された。いずれもチップである。碧玉の質は良くない。水晶の1点は無色透明な良質のもので、1点は白濁部分の目立つものである。

このほか陶器小片1点がある。器形は不明。

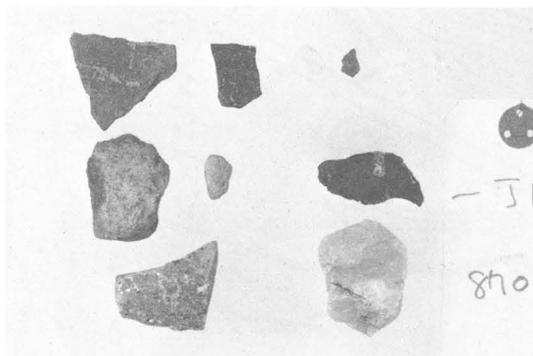


図43 一丁田遺跡採集遺物

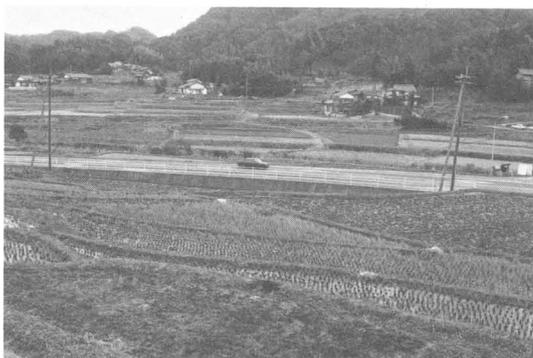


図44 堂廻遺跡近景
(道路より手前の水田)

19. 堂廻遺跡

所在 松江市西忌部町字堂廻に所在する。この地は千本貯水池の上流約800mの忌部川西岸の低丘陵上にあり、ゆるやかに南東方向に傾斜している。遺跡の南脇には、主要地方道松江・木次線が通っ

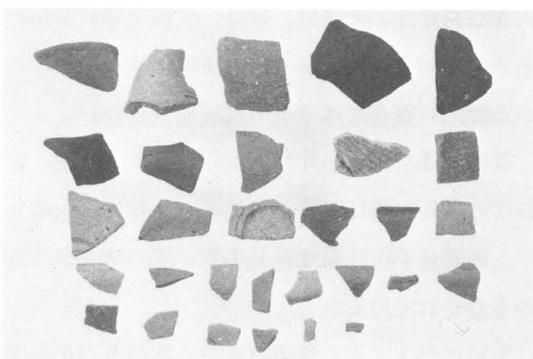


図45 堂廻遺跡採集遺物

ており、約30m南を忌部川が流れる。標高60~65m、地目は一部畑であるが、大部分は水田となっている。

遺跡の概要 踏査の行なわれた日に、たまたま水田の荒起こしが行なわれており、多くの遺物を採集することが出来た。遺物の散布する範囲は80×50mあまりの広い地域に渡っている。採集品の大半が須恵器で、土師器片が少数ある。水晶が1点のみ採取されたが、地山に含まれていたものとは思えないことから、玉作遺跡の可能性もあると言える。

また「堂廻平松附近ニテ発見 糸川熊太郎奉納 大正14年1月10日」の墨書のある筋砥石が忌部神社に奉納されている。これは残存長12×9×5cmの花崗岩製で、断面長方形であり、四面とも使用されている。

遺物 須恵器は小片が多いが30点採集された。器形の分かるものは、蓋坏、高坏、壺があり、これらは全て山陰須恵器編年Ⅳ期及びそれ以降の歴史時代須恵器に編年されると思われる。

土師器は小片が2点あり、器形は不明。

水晶は比較的透明度が高く、質の良いものである。玉素材としてよいのではないかとと思われる。

石英は14点ある。

20. 中島遺跡

所在 松江市東忌部町字中島に所在する。忌部川の右岸、標高80~90mの丘陵上に位置する。この丘陵は上面の平坦面が広く、現況地目は畑と荒地になっている。

遺跡の概要 大正から昭和初期にかけて、砥石や叩石が忌部神社に奉納されており、相当古くから玉作関係遺物が出土する地点として注目されていたところである。

昭和39年、大場磐雄、山本清、寺村光晴氏等によって発掘調査が行なわれ、玉作工房跡が検出された。県下においてはじめて工房跡が確認されたところとして記念すべき遺跡である。工房跡は崖により半壊していたが、一辺約3.95m

の梯形の竪穴で、南壁に接した位置に工作用特殊ピットが存在していた。竪穴内からは大窪砥石、内磨砥石、勾玉未成品、有孔円板、白玉、土師器など多数の遺物

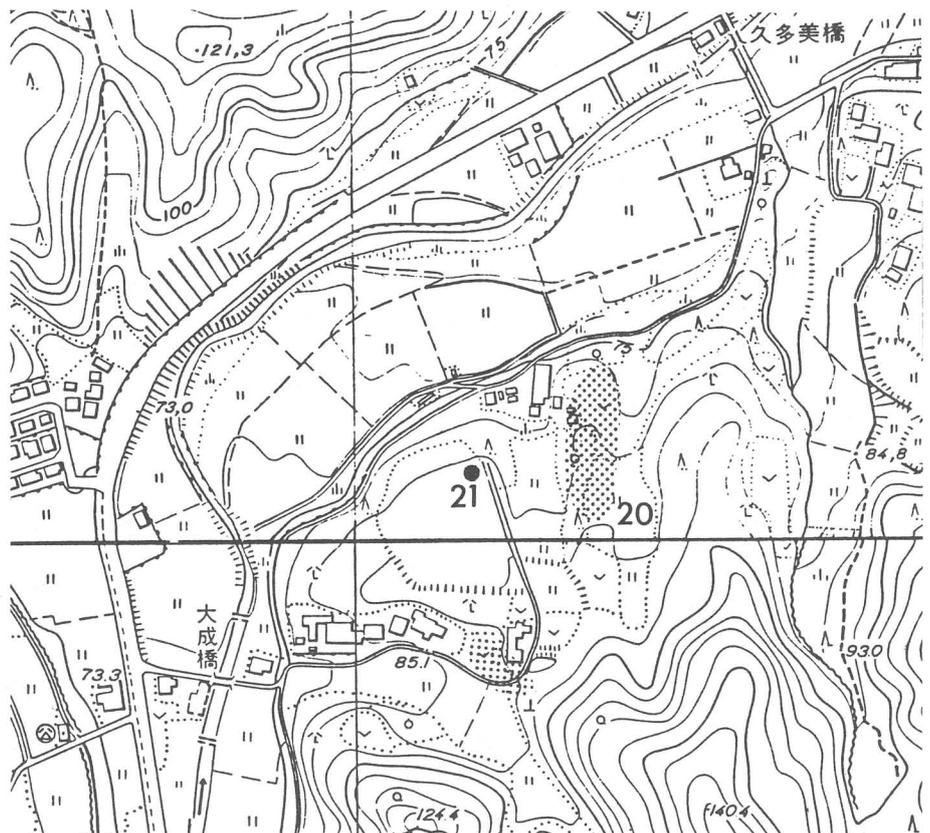


図46 中島遺跡(20)、後原遺跡(21)の位置 1:5000



図47 中島遺跡近景

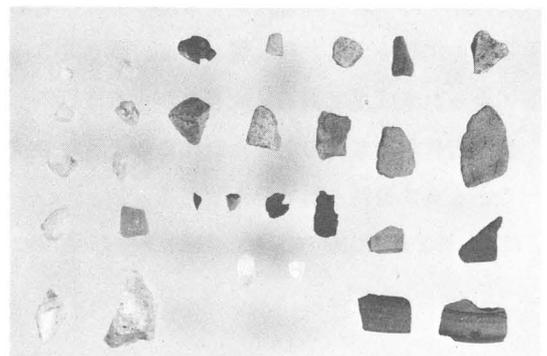


図48 中島遺跡採集遺物

が出土した。出土遺物の特徴から5世紀代のものと考えられる。^{註2}

今回の踏査では、碧玉片、水晶片、石英片、土師器、須恵器（I期）片などを採取することができた。これらの遺物は丘陵の北半に多く散布しているが、南半でもわずかにみられ、遺跡のひろがりは丘陵全体におよぶものと推測される。なお、このほかにこの丘陵の東側丘陵斜面で古式土師器片、舟木登吉氏宅付近の畑で土師器小片を採取した。

註1. 昭和62年1月、忌部神社にて実見。

2. 寺村光晴『古代玉作の研究』吉川弘文館 昭和41年

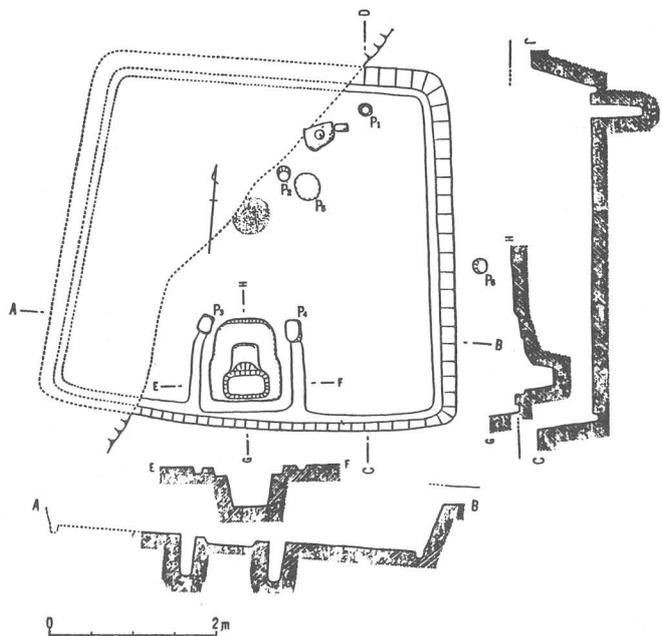


図49 中島遺跡1号工房跡
（『古代玉作の研究』1966より）

21. 後原遺跡

所在 松江市東忌部町字後原に所在する。忌部川中流域右岸の丘陵上に位置し、中島遺跡の西隣りにあたる。標高80~90mの台地状をなす丘陵で、かつては畑であったが、現在は大半がグラウンドに造成されている。

遺跡の概要 昭和39年、隣接する中島遺跡とともに発掘調査されたが、調査地点は表土が流失して地山が露出していたため遺構等は検出されなかった。

今回の踏査でも、大半がグラウンドに造成されてしまっていたため遺物を採集することができなかった。

遺物 碧玉製の亀甲状石が出土している。この資料は遺物に記された墨書により、大正4年頃に「後原」で発見され、大正10年に舟木長一郎氏によって忌部神社に奉納されたことがわかる。現在は玉作資料館で保管されている。平面形は不整形な多角形を呈し、最大径8.7cm、厚さ3.3cmを測る。やや薄い緑色を呈する碧玉で、側面打裂工程を終了して研磨段階に至った未成品である。大きさからみて石釧か車輪石の未成品であろう。^{註1}

当地方において今のところ他にこのような未成品は発見されていないが、出雲においても石製品の生産が行なわれていたことを示す資料として貴重である。

註1. 勝部衛「松江市東忌部町後原遺跡出土の亀甲状石について」『島根考古学会誌』第3集 昭和61年

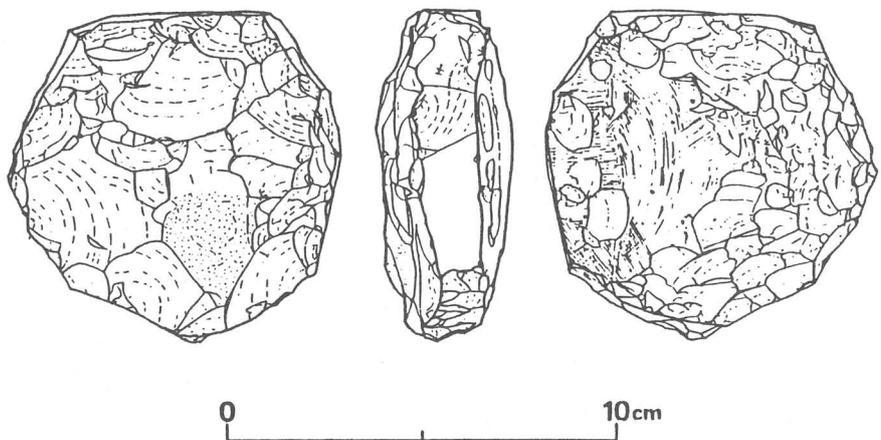


図50 後原遺跡出土亀甲状石実測図
（『島根考古学会誌』第3集 1986より）

22. 一崎遺跡

所在 松江市西忌部町字一崎に所在する。忌部神社所蔵の砥石をみると、現在の坂根裕美氏宅（西忌部町 392）の庭から出土したことがわかり、この周辺に玉作遺跡の存在する可能性が高いと思われるので、「一崎遺跡」と仮称して紹介しておくことにする。

遺物 砥石の表面には「紅簾石 大正十四年三月五日 坂根榮太郎奉納」との墨書がある。また忌部神社の『宝物台帳』には「大正十三年（最初十四年と記し、あとから十三年に改められている）四月一日 坂根伊太郎 全人宅庭ニアリ 紅簾石原石ナリ」との記述がある。記載の年月日に若干のずれがあり、同一のものではないとの疑いもあるが、砥石は一見原石にみえること、忌部神社所蔵品で他に「紅簾石」と記される類のものはないことなどから『宝物台帳』記載のものとも一致する可能性が高いものと判断される。砥石記載の年月日と『宝物台帳』記載の年月日が異なるのは、発見の日と奉納の日の違いではないかと推測される。

この砥石は結晶片岩製で、長さ37cm、幅19cm、厚さ4cmを測り、重量は5.94kgある。結晶片岩製のものとしてはきわめて大きく、細かく観察しないと使用痕もみえにくいので一見原石のように思える。平面形は不整四角形を呈しており、短辺の一部に自然面がみられる他は、縁の両側から打撃を加えて形を整えており、この砥石が完形品であることがうかがえる（図版4-1）。

両側面平坦部と一長辺に使用痕がみられる。両側面平坦部はほぼ全面が使用されており、平らに使用痕が残っている部分や、浅く「U」字形に窪んでいる部分があり、平砥石や筋砥石と同じ用途に供せられたと思われる。辺は丸味をおびた使用痕が残っており、いわゆる内磨砥石と同じ形態を呈している。

黒味を帯びた暗緑灰色を呈し、白斑や茶褐色の筋を混じえており、肉眼的な観察による材質は結晶片岩と考えられる。^{註1}

註1. 高橋進一「忌部神社所蔵の結晶片岩製砥石について」『歴史学通信』第11号 島根大学歴史学学生研究室 昭和62年

23. 出雲玉作跡宮垣地区

所在 八束郡玉湯町大字玉造字宮垣を中心とする地域で青木原、向畑、記加羅志神社旧跡を含む一帯である。玉湯川右岸の緩斜面で、玉材産出地である花仙山の南西麓に位置する。標高は30~50mある。

遺跡の概要 古くから著名な遺跡であり、大正11年10月12日付けで宮ノ上地区、玉ノ宮地区とともに国史跡の指定を受けている。生産遺跡としては我国ではじめて指定を受けたものである。

宮垣地区は昭和44年から46年にかけて3次にわたる発掘調査が行なわれ、その結果古墳時代前期から奈良・平安時代に及ぶ多数の玉作工房跡が検出された。^{註1}

このうち71CⅡ号址は一辺約5.7mの隅丸方形竪穴で、竪穴内中央に長方形の工作用ピットを伴い、床面が東へ9度傾斜する特異な構造をもつものであった。しかも多数の碧玉製管玉未成品、剥片、砥石等の各種玉作関係遺物とともに

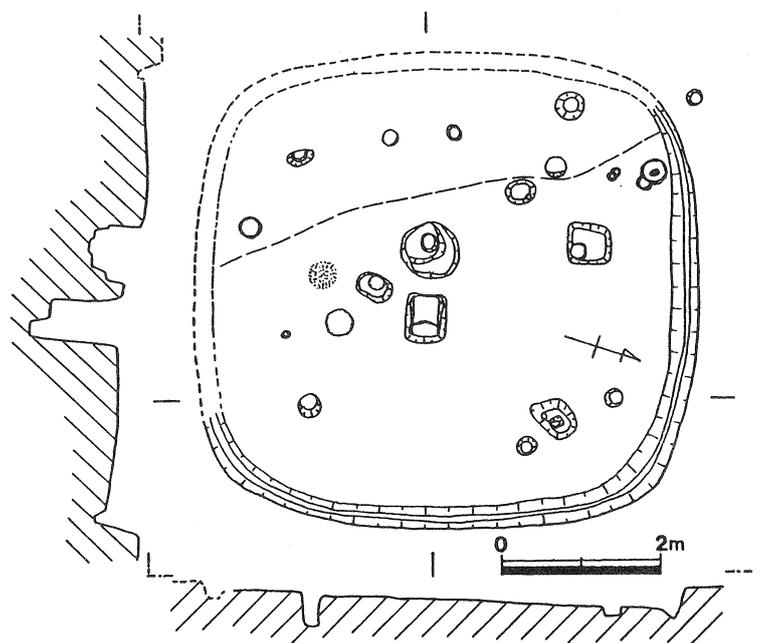


図51 宮垣地区71-CⅡ号工房跡
（『史跡出雲玉作跡発掘調査概報』1972より）

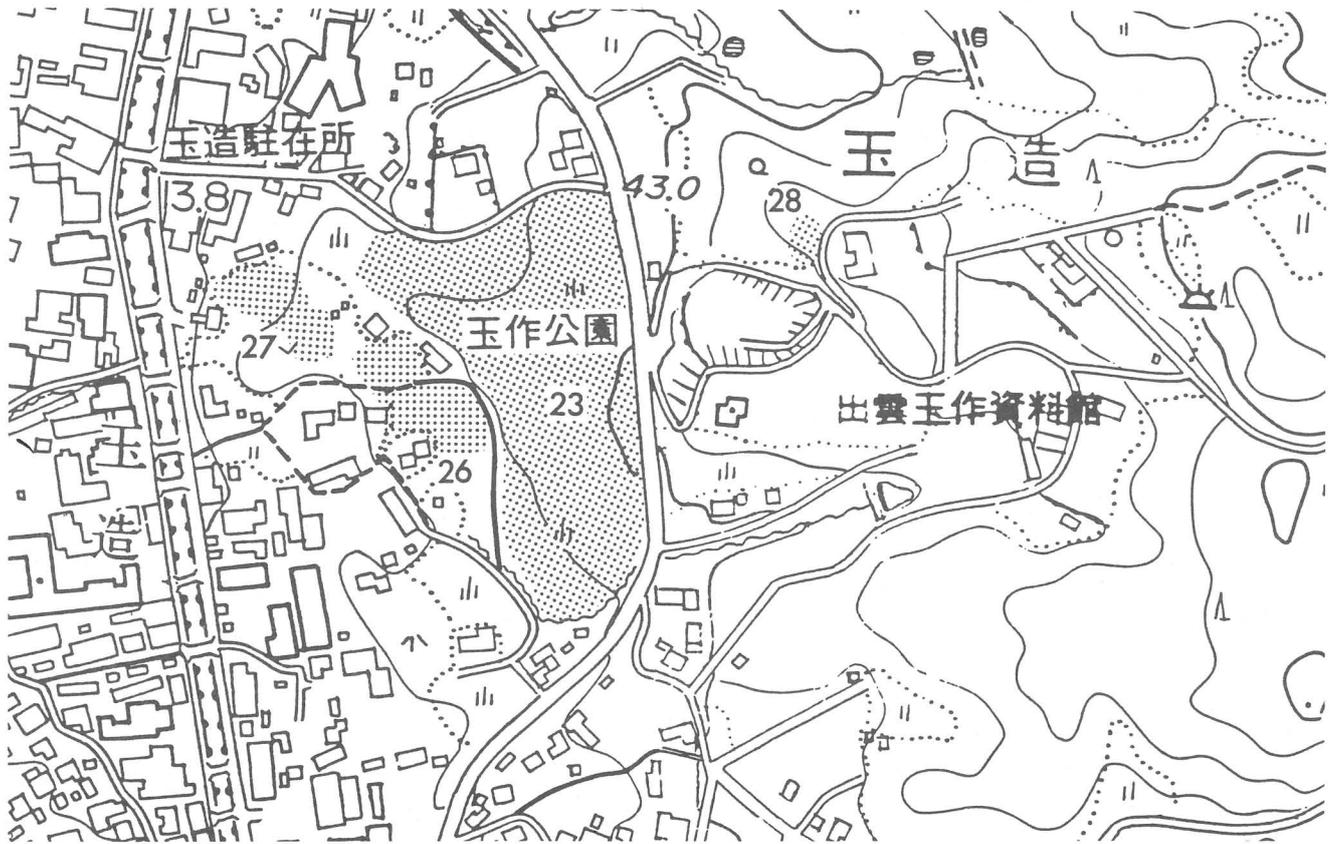


図52 出雲玉作跡宮垣地区(23), 蛇喰遺跡(26), 小丸山遺跡(27), 徳連場遺跡(28)の位置 1 : 5000

に古式土師器が出土しており、これがこれまでの調査結果に関する限り本遺跡において玉作りの上限を示すものであった。古墳時代後期の玉作工房跡としては69A I号址, 69B III号址, 71A I号址, 71B I号址等があり、これらはいずれも梯形プランで工作用ピットが壁際に位置し、各種多数の玉作関係遺物の出土をみている。なかでも71B I号址から多量の玉作関係遺物が出土し、完成品, 未成品, 原石, 大形剥片は1,500点以上にも達している。玉類の種類としては滑石製白玉, 碧玉製管玉, 碧玉製勾玉のほか水晶製丸玉などがあり、特に滑石製白玉未成品の多いことが注目される。これらとともに出土した須恵器は山陰の須恵器を4期に分けた場合の第II期^{註2}の特徴をそなえるものであった。

このほか奈良・平安時代の工房跡等も発見されており、本遺跡は質的にも量的にも他に比類をみない優れた攻玉遺跡で、生産遺跡の研究上きわめて重要な遺跡といえる。

なお、この地区は史跡公園として整備されており、史跡の東側には出雲玉作資料館がある。

- 註1. 山本清・寺村光晴・近藤正・前島己基『史跡出雲玉作跡——発掘調査概報——』玉湯町教育委員会
 2. 山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論文集』昭和35年

24. 出雲玉作跡宮ノ上地区

所在 八束郡玉湯町大字玉造字宮ノ上を中心とする地域である。玉湯川右岸にある玉作湯神社境内を中心としたところで、字宮ノ上のほか湯ノ端, 宮ノ後などを含む。標高20~30mの丘陵緩斜面で、大半は宅地になっている。

遺跡の概要 この周辺でも古くから玉作関係遺物が採集されており、大正11年に宮垣地区, 玉ノ宮地区とともに国の史跡として指定されている。この地区は指定以来発掘を伴う調査はなく、遺物・遺構を埋蔵する範囲や性格が不明確であった。そこで、今後の保存・管理上必要な資料を得るため昭和58・59年に玉湯町教育委員会によって発掘調査が実施された。その結果、社務所西南一帯で弥生時代終末から古墳時代前期初頭に玉作りが行なわれ、その後一時空白期間を置いたの

25. 出雲玉作跡玉ノ宮地区

所在 八束郡玉湯町大字玉造字玉ノ宮ほかに所在する。玉作湯神社の南方約800mの地点である。玉湯川とその支流湯田川の合流点にあたる。標高は40~50mある。

遺跡の概要 ことに字玉の宮と別所谷の二つの谷筋に遺物散布の地点が密集しているといわれ、山林と水田を主にして約4haが国指定史跡となっている。

玉ノ宮(玉宮神社)旧跡は、かつて櫛明玉命を祀る社が存在していたといわれるが、社は現在玉作湯神社に合祀されている。

昭和61年、玉湯町教育委員会によって別所谷の水田部の発掘調査が実施された。この調査は小範囲の試掘であったため、工房跡等の遺構は検出されていないが、多く玉作関係遺物や土器が出土した。

遺物 これまでに採集されて玉作湯神社に奉納された遺物のうち玉ノ宮から出土したものは赤瑪瑙勾玉4、青瑪瑙(碧玉)勾玉4、白瑪瑙勾玉1、青瑪瑙(碧玉)管玉・丸玉・平玉各1、石英平玉3、花崗岩筋砥石4、砂岩筋砥石1、花崗岩大窪砥石2、内磨砥石2などである。別所谷で採集されたものは青瑪瑙(碧玉)勾玉1、石製大丸玉1、花崗岩筋砥石3、花崗岩平砥石1のほかガラス製造の埴塙もある^{註1}。

昭和61年の調査では、碧玉管玉未成品や水晶未成品、砥石などとともに土師器、須恵器等も出土している。土師器には古式土師器が含まれており、須恵器にはⅢ期の特徴を有するものがあるなど遺跡^{註2}の年代幅は相当広いものと思われる。

註1. 玉湯町『玉湯町史(上巻)』昭和36年

2. 勝部衛氏の御教示による。

26. 蛇喰^{じゃばみ}遺跡

所在 八束郡玉湯町大字玉造字蛇喰に所在する。この地は花仙山西麓のやや大きく舌状にせり出し、玉湯川に近接する丘陵緩斜面上

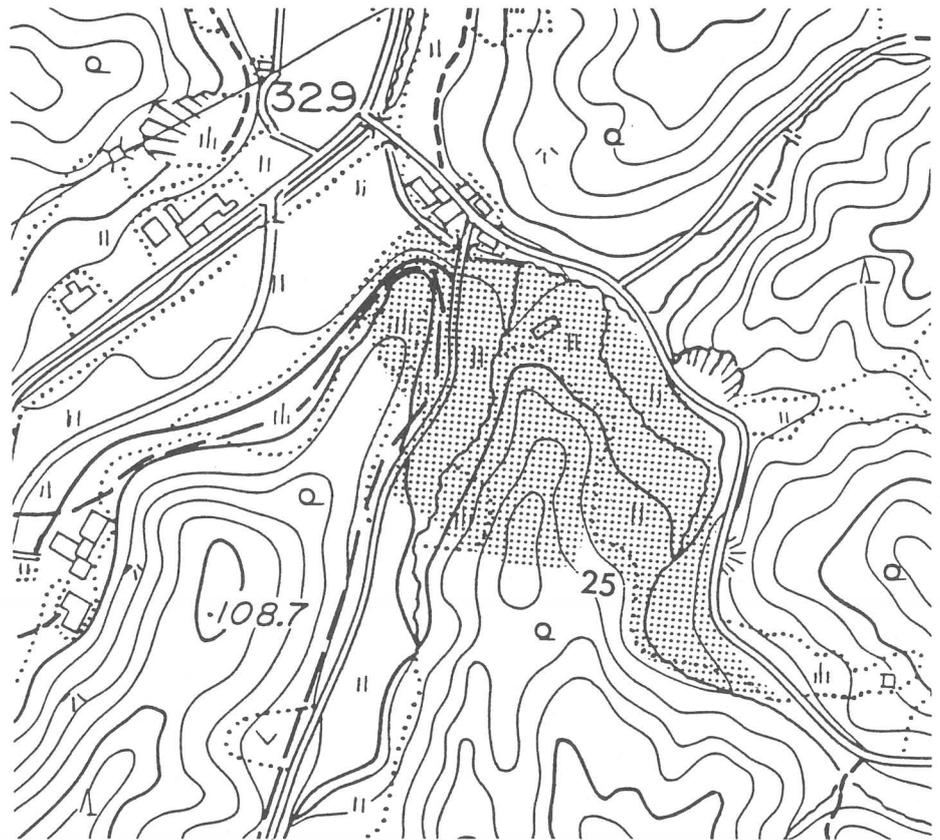


図55 出雲玉作跡玉ノ宮地区(25)の位置

1:5000

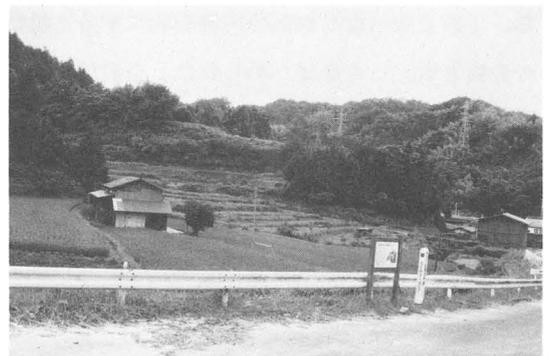


図56 玉ノ宮地区近景

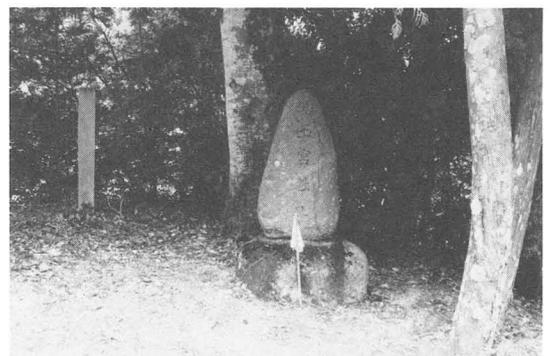


図57 玉ノ宮跡の石碑



図58 蛇喰遺跡(26①~④地点)と小丸山遺跡(27)

1:2000

に位置している。標高30~40m、地目は畑である。

遺跡の概要 本遺跡は史跡公園のすぐ西に広がる畑中に存しており、75×60mの広い範囲に遺物の散布が見られ、もともとは一続きの大きな遺跡であったと思われる。

現在の土地利用から全体を4地点に分け、それぞれの地点で多くの遺物を採集した。

— ① 地点 —

本遺跡の東側部分を占め、24×18mの畑であり、柵を隔ててすぐ東が史跡公園である。遺物は本遺跡中では最も少なかった。

遺物 須恵器は8点採集された。器形のわかるものとしては蓋坏のみであるが、糸切り痕の残る不明品底部がある。

玉材としては碧玉、水晶、瑪瑙、カド石がある。

碧玉は9点採集されたが、いずれも屑片と思われる。

水晶は5点が採集された。いずれも屑片と思われるが、1点は透明な良質のもので、他は白濁部分が多く見られる。

瑪瑙は赤瑪瑙、白瑪瑙各1点ずつが採集された。赤瑪瑙は2.2×1.6×0.6cmを測り、片面に自然面を持つ長方形板状のもので、側部にわずかに細部調整が見られ未成品と思われる。白瑪瑙は2.5×1.7×0.7cmを測る長方形の板状原石であるが、未成品とは思われない。



図59 蛇喰遺跡④地点



図60 蛇喰遺跡②地点採集遺物

— ② 地点 —

本遺跡の中央部分南半分を占めており、①地点の西隣である。歴史時代須恵器と水晶を中心とする遺物が採集されたが、碧玉管玉未成品も採集された。

遺物 須恵器は31点採集された。小片が多いが、高台付の坏、蓋が見られ、これらの須恵器はいずれも歴史時代のもと思われる。

碧玉は11点が採集されており、管玉未成品と、四角柱状に割られた石が各1点見られる他は、全て質の悪い屑片である。

管玉未成品は濃緑色を呈する良質のもので、形割を終え、一部研磨がなされている。現存長 $2.5 \times 1 \times 1$ cm を測り、四つ角には荒いツブシが施されており、残っている小口面の一部に研磨痕が見られ、全面に細部調整が及んでいる。

四角柱状品は、一側面が大きな打割によって割りとられている他は自然面である。管玉未成品の可能性もある。

水晶は42点採集されており、白濁したものが多いが、中には透明部分の多い良質な石がみうけられる。細部調整の残るものが9点含まれており、そのうち平玉未成品が3点ある。これらはいずれも透明部分の多い良質な石材を使用している。

平玉未成品はそれぞれ径 1.6 cm、厚さ 0.7 cm が最大のものであり、径 0.8 cm、厚さ 0.4 cm が最小のものである。もう1点は欠損品であるが径 1.2 cm、残存厚 0.5 cm を測る。

瑪瑙は白瑪瑙 5点、赤瑪瑙 1点があり、いずれも屑片である。

カド石は14点採集された。

このほかに硅化木 1点が採集された。内磨砥石の一部と思われるが、使用痕は認められない。一辺がやや丸みをおびている。残存長 2.6 cm、幅 2.6 cm、厚さ 0.9 cm を測る。

— ③ 地点 —

本遺跡の中央部分の北半分を占めており、須恵器、水晶、碧玉を中心とする遺物が採集された。須恵器には古手のものが見られず、また赤瑪瑙は1点しか採集されなかった。

遺物 須恵器は小片ばかりであるが56点採集された。器形が判明するのは須恵器蓋のみであるが、いずれも歴史時代須恵器である。

土師器は2点採集されたのみであるが、高台付の坏が含まれている。

碧玉は46点が採集された。長さ 3.5 cm を測る小塊状のものも含まれているが大半がチップ・フレイクである。平玉未成品が1点採集されている。これは径 1.7 cm、厚さ 0.7 cm を測るが、あまり質のいい碧玉ではない。

水晶は39点採集された。白濁した質の悪い石が多いが完全に無色透明なフレイクが1点のみであるが含まれている。これは長さ 1.8 cm、幅 1.2 cm、厚さ 0.7 cm を測り、縁にわずか 0.3 cm ばかりであるが加工痕が見られる。また管玉未成品 1点、平玉未成品 1点、不明未成品 2点が採集された。管玉未成品は1点は現存長 $2.5 \times 1 \times 0.9$ cm を測り、四角柱状に整えられているが、現存部の半分ぐらいから斜めに欠損している。平玉未成品も欠損品であるが縁が丸く整えられており径 1.2 cm、厚さ 0.5 cm を測る。

不明未成品の1点は $2.5 \times 2 \times 1.5$ cm の小塊状原石に多数の押圧剥離を加えて丸みをつけており、小玉のようにするのか、あるいはもっと大きいのが割れたので、勾玉のようなものにしようとしていたのかであろう。もう1点は $2.5 \times 0.8 \sim 1.3 \times 0.2 \sim 0.9$ cm を測り、自然面がほとんどの小片であるが、これに細部調整が加えられており、丸みがつけられている。小玉様のものを作出しようとしていたと思われる。

赤瑪瑙は1点採集されたが1 cm 足らずの自然面の多い屑片である。

カド石は21点採集された。

ほかに黒曜石 1点が採集された。 $2.5 \times 1.7 \times 1$ cm を測るフレイクであるが、使用痕が認められる。

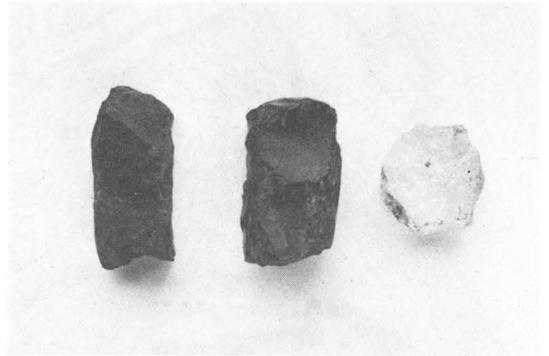


図 61 蛇喰遺跡②地点採集未成品

— ④ 地点 —

本遺跡群中の西側部分を占めており、最も多くの遺物が採集された。須恵器、碧玉、水晶が多く見られ、わずかながら土師器、瑪瑙も見られた。全体として奈良・平安時代のものと思われる遺物が中心である。

遺物 須恵器は大小176点が採集されている。器形の判明するものとしては坏、高台付の坏、須恵器蓋、高坏、壺、甕などがバラエティーに富んでいる。ヘラ書きの文字が見られるものが3片あり、いずれも坏と思われる。それぞれ「有」、「日」、「由」とわれ、特に「由」の字は忌部神社所蔵の湯峠出土の須恵器に書かれている字に似ていることが注目される。時期的には奈良・平安時代のもものがほとんどであると思われる。

土師器は小片が多いが11点採集された。器形の判明するものとしては高坏、坏があり、坏には糸切りが見られる。

碧玉は89点採集された。良質のものは少なく、大半が淡い緑色が混じったりしている。チップ状のものが多いが、フリク状、小塊状のものもある。細部調整の見られる剥片もあるが、未成品らしきものは見られない。

水晶は43点が採集された。白濁部分の多い質の良くないものが多いが、透明部分の多い良質なものも含まれている。細部調整の見られるものが9点あり、そのうち3点が平玉未成品である。いずれも直径1.5cm足らずのもので厚さは0.5cm程度のもものが2点、0.9cm程度のもものが1点ある。いずれも形割品である。他はチップ・フリク状のものが多いが、6.5×4×3cmの小塊状のもものが1点ある。

赤瑪瑙は3点採集された。1点がチップ状で、他はフリク状である。いずれも比較的良質なものである。

カド石は大小10点が採集された。

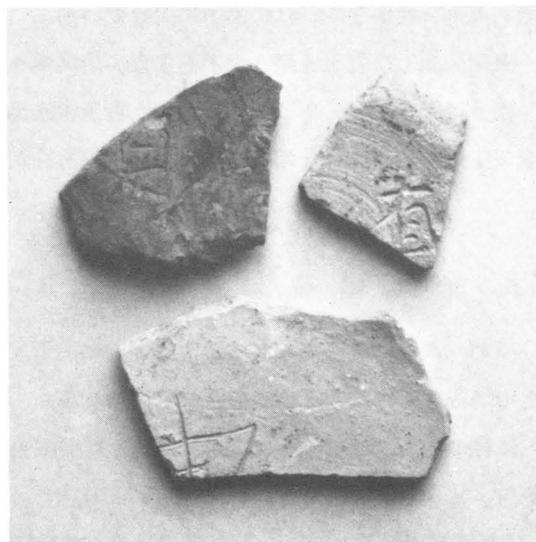


図62 蛇喰遺跡④地点採集須恵器

27. 小丸山遺跡

所在 八束郡玉湯町大字玉造字小丸山に所在する。この地は花仙山西麓の西へ向かって舌状にのびる丘陵北側斜面、尾根上に位置し、小丸山古墳の北側・東側斜面である。また約100m東に出雲玉作跡史跡公園がある。

標高31~32m程度、現状は畑で、一部草地になっている。

遺跡の概要 小丸山古墳は長径24m、短径17m程度の楕円形を呈しており、横穴式石室と思われる石材が一部露出している。遺跡はこの古墳の北側斜面、及び東側斜面にあり、周辺は史跡公園、蛇喰遺跡など、玉作関係遺跡の密集地である。

遺物は北側斜面は約24×18mの範囲、また東側斜面は約12m四方の範囲に散布しており、若干広がる可能性もある。玉材は碧玉が中心であり、北側斜面から砥石と思われる石英片岩が1点採集されている。量的には周辺の遺跡と比べ、決して多いとは言えない。

遺物 北側斜面では須恵器小片1、碧玉チップ9、水晶4点、石英1点、石英片岩1点が採集されている。

碧玉は緑の淡いものが5点含まれている。水晶は無色透明の良品から、濁り部分の多いものまで色々あるようである。

石英片岩は、3×2.2×0.4cmを測る板状の小片で残欠品である。表面に一部磨痕が見られ砥石として使用されたと思われるが、内磨

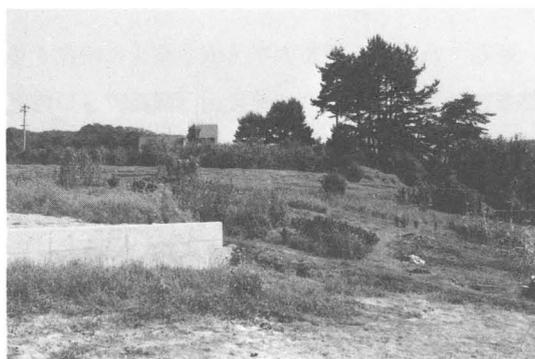


図63 小丸山遺跡近景

砥石であったかどうかは決め手に欠けている。

東側斜面では碧玉4点、カド石1点、白瑪瑙チップ1点、須恵器小片2点が採集されている。

碧玉は皮の部分のものが2点あり、管玉未成品1点が含まれている。これは $2.2 \times 0.7 \times 0.4 \sim 0.65$ cmを測り、一面が全て主要剥離面によって占められている四角柱状であり、形割段階の未成品である。

28. 徳連場遺跡

所在 八束郡玉湯町大字玉造字徳連場にある。花仙山から西方に派生する標高約70 mの丘陵尾根上に徳連場古墳があり、その周辺に玉作関係遺物の散布が認められる。

遺跡の概要 この附近では古くから玉作関係資料が採集されていたとみられ、玉作湯神社所蔵『上代出雲玉作出土品明細書』^{註1}に「赤瑪瑙勾玉荒作、白瑪瑙平玉未成」などの記載がある。

今回の踏査においても、花仙荘の前の道路崖面（徳連場古墳の周溝と思われる落ち込み状の部分）で、碧玉片、土師器片などが採集された。遺跡の広がり等は不明であるが、隣接する史跡出雲玉作跡や烏場遺跡など一連のものであろう。

註1. 玉湯町『玉湯町史（上巻）』昭和36年

29. 向新宮遺跡

所在 八束郡玉湯町大字玉造字向新宮に所在する。田中川の左岸で、標高60 mあまりの緩斜面に位置する。現況では大半が水田となっている。

遺跡の概要 今回の踏査は7月に実施したため地肌の露出しているところがなく、遺物を採集することができなかった。ただし、この地域では古くから多くの玉作関係遺物が採集されていることから玉作遺跡とみて誤りないものと思われる。明治41年に紅簾片岩内磨砥石が玉作湯神社に奉納されたのをはじめ、その後筋砥石、碧玉管玉未成品、碧玉丸平玉、花崗岩窪砥石など多くの遺物が奉納されている。^{註1}

なお、今回の踏査では向新宮北隣のところで碧玉片2、カド石1、須恵器片1を採集した。そうしたことからみるとこの遺跡は少なくとも南北は100 m以上にも及ぶものと推測される。

註1. 玉湯町『玉湯町史（上巻）』昭和36年



図64 向新宮遺跡遠景

30. 波止遺跡

所在 八束郡玉湯町大字玉造字波止に所在する。玉湯川の左岸の旅館街の裏手にあたり、波止山（標高97 m）の東南麓に位置する。標高30 mあまりの緩斜面で、一部宅地になっているが大半は畑である。

遺跡の概要 東西は20~30 mと狭いが南北は150 mあまりの広い範囲で遺物が採集されている。中心は岩田幸雄氏宅の前付近と思われる。同氏母チヨコ氏の証言によると家の前の畑（今は埋め立てて水平な畑になっている）から玉類が出土し、玉作湯神社に奉納した



図65 波止遺跡近景

とのことである。

また、松浦豊氏宅前も相当数の玉類が出土している。ただし、同氏父は「瑪瑙掘り」に従事していたということであり、その際に採掘された瑪瑙の破片が家の前に散布した可能性も捨てきれない。

遺物 碧玉製勾玉、碧玉製管玉、白瑪瑙製勾玉などが玉作湯神社に保管されている。

今回の調査では、碧玉剥片14、碧玉屑片12、瑪瑙2を採取した。

31. 平床遺跡

所在 八東郡玉湯町大字玉造字平床にある。岩屋寺跡横穴（国史跡）の麓の小谷（水田）を南西にのぼりつめたあたりに位置する。

標高50～60mの緩斜面で、現況は荒地～畑地となっている。この遺跡から道を隔てた西側に日焼廻遺跡がある。

遺跡の概要 現在荒地となっており、地肌がほとんど見えないためこのたびは遺物を採取することができなかった。ただし、この地域はかつては北西方向に向かってゆるやかに傾斜する畑として利用されており、古くから多くの玉作関係遺物が採集されている。

遺物 これまでに採集されたもののうち『玉湯町史（上巻）』に掲載されているものは、赤瑪瑙勾玉、青瑪瑙（碧玉）勾玉、水晶勾玉、水晶丸玉、青瑪瑙（碧玉）丸玉荒作、青瑪瑙（碧玉）平玉、筋砥石、内磨砥石などがある。このほかに昭和51年にも、碧玉管玉未成品、白瑪瑙勾玉未成品、赤瑪瑙丸玉未成品が採集され、玉作湯神社に奉納されている（図版2-4）。

32. 日焼廻遺跡

所在 八東郡玉湯町大字玉造字日焼廻1325-1ほかに所在する。平床遺跡とは谷（水田）を狭んで向いあわせの位置にあり、本谷からさらに入り込んだ小谷の入口付近にあたる。

遺跡の概要 昭和56年6月に水田に暗渠を設置するために掘削された際に遺物が出土し、遺跡として確認されたものである。遺物の

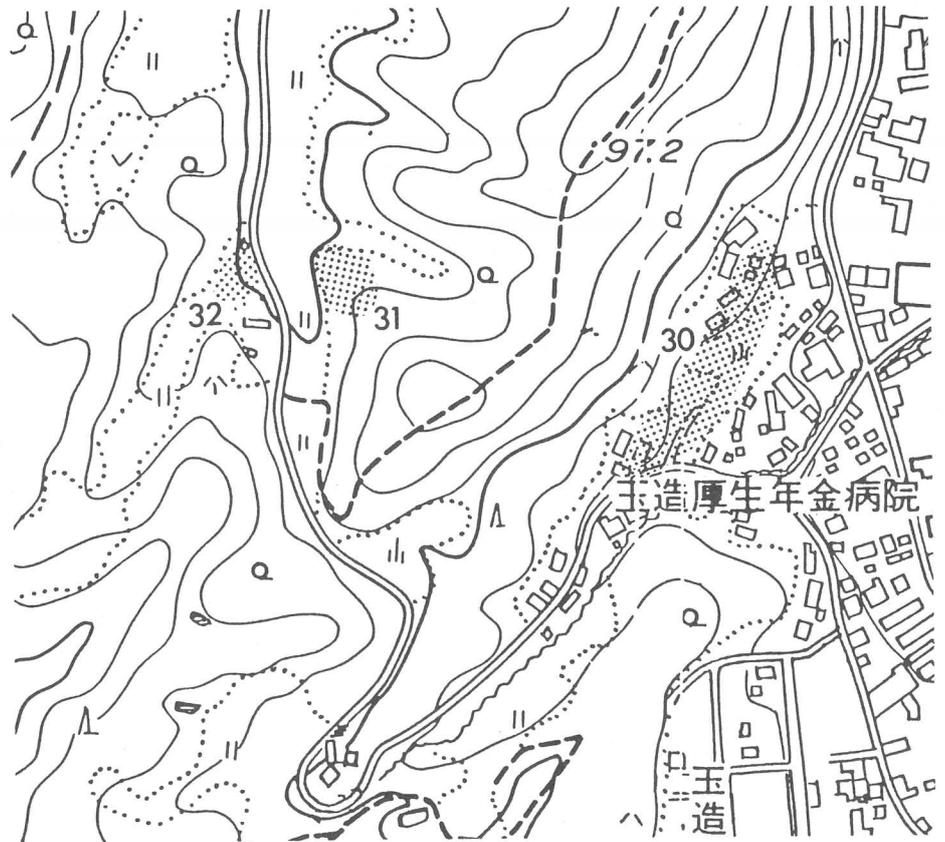


図66 波止遺跡(30)、平床遺跡(31)、日焼廻遺跡(32)の位置

1:5000

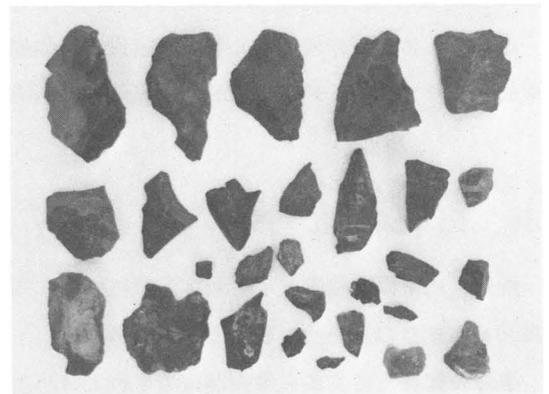


図67 波止遺跡採集遺物



図68 平床遺跡近景

散布している範囲は30×20mあまりのところである。ただし、これは現在畑として耕作されているために遺物が採取されるのであり、実際の遺跡の範囲はさらに広がる可能性もある。

遺物 昭和56年に発見された遺物には碧玉1、瑪瑙3、石英1、硅化木3、須恵器3、土師器23、鉄鏝6などがある。土師器には古式土師器も含まれており、遺跡の営まれた時期にはかなりの幅があると思われる。

今回の踏査の際に発見された遺物としては碧玉片1、水晶片1(未成品か)、土師器片2、須恵器2がある。

33. のぶきだに 延木谷遺跡

所在 八東郡玉湯町大字玉造字南に所在する。玉湯川左岸の標高30～45mの緩斜面に位置する。和久田透・湧田定良氏宅のある狭小な谷で、小字名は「南」であるがこの谷全体が通称「延木谷」と呼ばれているので遺跡名は「延木谷遺跡」と称することとした。

遺跡の概要 昭和25年、和久田透氏宅新築の際に砥石が出土し、遺跡の存在が明らかになったものである。

今回の踏査では主として湧田定良氏宅裏の畑で遺物を採集することができた。和久田透氏宅の砥石出土地を含めて考えると、遺跡の広がり東西約100m、南北約20mの広範囲にわたるものと思われる。

遺物 このたびの踏査で、湧田定良氏宅裏の畑で採集した遺物は次のとおりである。碧玉剥片6、水晶片3、須恵器片1。

34. めぐりはら 廻原遺跡

所在 八東郡玉湯町大字玉造字廻原に所在する。玉湯川左岸の標高35mあまりの緩斜面で現況は水田である。

遺跡の概要 古くから遺物が採集されていたようで、昭和2年に滑石製勾玉、昭和10年に花崗岩筋砥石が玉作湯神社に奉納されている。昭和53年には高木義徳氏所有の水田から玉類、土師器、須恵器などが出土し、玉作資料館で保管されている。昭和57年には小村茂雄氏所有の水田から花崗岩筋砥石、紅簾片岩内磨砥石、砂岩製六角形の砥石が出土し、玉作湯神社に奉納されている(図版3)。このほかに、昭和57年には小村浩氏宅前の水田から出土したガラス塊が玉作資料館に寄託されている。

今回の調査では、小村浩氏宅南の水田脇(これまで多くの遺物が出土している地点の西方約70m)から須恵器片、土師器片、碧玉片を採集しており、かつて採集された地点と合わせ考えると、遺跡の範囲は相当ひろがるものと予想される。



図 69 日焼廻遺跡近景



図 70 延木谷遺跡近景



図 71 延木谷遺跡採集遺物



図 72 廻原遺跡近景

遺物 昭和53年に高木義徳氏所有の水田から出土した遺物には次のものがある。玉作関係遺物としては碧玉剥片1，赤瑪瑙剥片1，石英1，砥石1などである。土師器は量的に最も多く，古式土師器（低脚坏）や中期の土器（高坏，壺など）がみられる。須恵器はⅢ期の蓋坏，糸切痕を有する坏があり，遺跡の営まれた年代は相当の幅がある。

35. 西 遺 跡

所在 八東郡玉湯町大字大谷31の糸原博氏宅の南西に位置する。玉湯川左岸の山裾で，標高50mあまりある。現況の地目は畑で，ほぼ平坦になっている。

遺跡の概要 この場所から糸原雅夫氏により筋砥石が採集されており，玉作湯神社に奉納されている。^{註1}このたびの踏査により，碧玉・水晶・石英片が若干採集された。遺物を採取した範囲は現在畑となっている50㎡あまりの狭い範囲であるが，地形等から周辺の水田まで広がる可能性もある。

遺物 採取した遺物は，碧玉屑片4，水晶4，石英屑片1である。このうち水晶剥片に玉類未成品の可能性のあるものが含まれていた。

註1. 京都帝国大学「出雲上代玉作遺物の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第10冊 昭和2年

36. 大 田 遺 跡

所在 八東郡玉湯町大字大谷字大田に所在する。玉湯川左岸の標高70mあまりの緩斜面に位置する。地目は大半が水田であるが一部畑地もある。

遺跡の概要 昭和36年，山本勇造氏によって赤瑪瑙勾玉，花崗岩製砥石が玉作湯神社に奉納されている。^{註1}また，近年山本幸夫氏宅前の水田で砥石や未成品が出土したということであり，遺跡のひろがりには相当広範囲にわたるものと推測される。

註1. 玉湯町『玉湯町史（上巻）』昭和36年

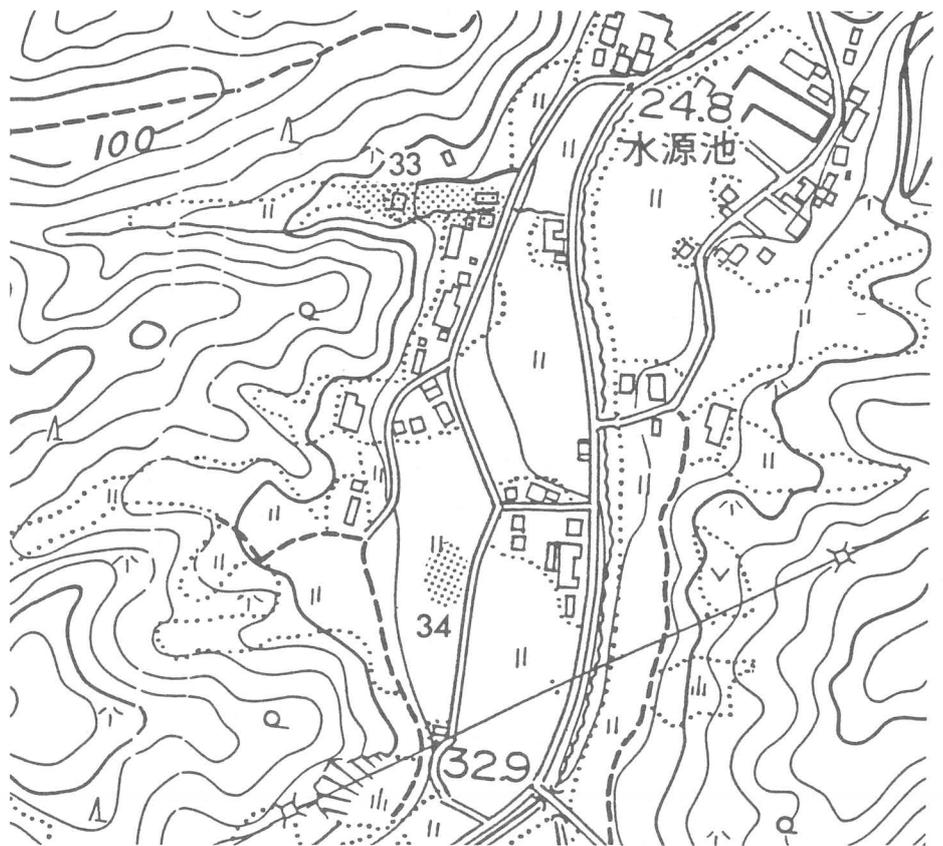


図73 延木谷遺跡(33), 廻原遺跡(34)の位置

1:5000



図74 西遺跡近景



図75 大田遺跡遠景

37. 田 仏 遺 跡

所在 八東郡玉湯町大字大谷字田仏にある。山本繁夫氏宅（屋号「上正田」）の南西側にあたる丘陵緩斜面に位置する。標高約110mで、現況は畑である。

遺跡の概要 『玉湯町史』^{註1}には「大谷田仏 外磨1, 山本岩市」(P 78), 「下大谷 田仏 石製大丸玉1, 山本権市」(P 261)とあり、古くから玉作関係資料の採集されていたことが知られる。このたびの踏査では畑が耕されているところを中心に観察したところ、水晶片, 碧玉片, 須恵器片等を採集することができた。特に20~30mの狭い範囲に集中的に散布が認められ、この近くに工房跡の存在が予想された。

なお、この「田仏」の北側に「稗田」と呼ばれる地点があり、ここでは昭和3年に砥石が採集されていること^{註2}から踏査を試みた。しかし、ほとんどが水田として利用されているため、このたびの調査では遺物を採集することができなかった。今後あらためて調査する必要がある。

遺物 須恵器は7点あり、高台付のものがみられる。碧玉片は3点あり、うち1点は平玉未成品の可能性があり。水晶片は13点あり、この遺跡では量的に最も多い。このほかに石英片7点, 硅化木片1点もみられる。

註1. 玉湯町『玉湯町史』昭和36年

註2. 玉湯町『玉湯町史』P 263 昭和36年

38. 有ノ木遺跡

所在 八東郡玉湯町大字林村字別所・有ノ木に所在する。この地は砂子谷川と本郷川の合流点の東側丘陵の裾部緩斜面に位置している。標高70m前後、地目は水田及び畑となっている。

遺跡の概要 砂子谷川をこの地点からさかのぼると砂子谷たたら跡がある。この地域に土地をもつ渡部氏が、須恵器, 土師器, フイゴの口らしい物を玉作資料館に寄贈している。

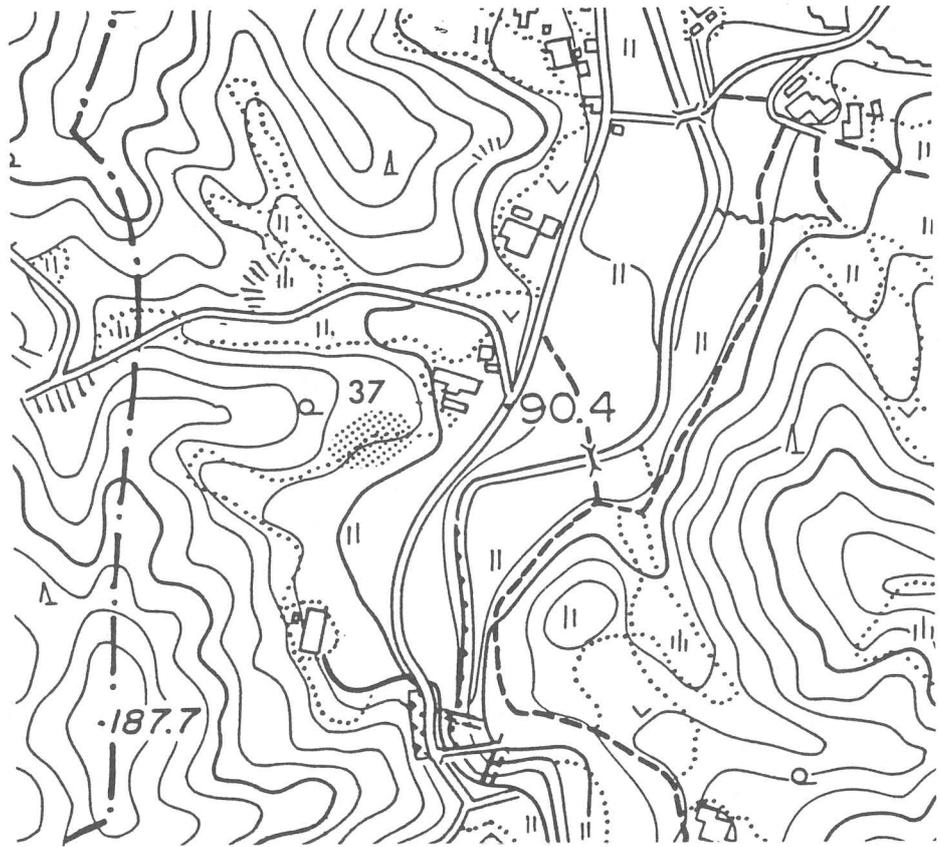


図76 田仏遺跡(37)の位置

1:5000



図77 田仏遺跡遠景

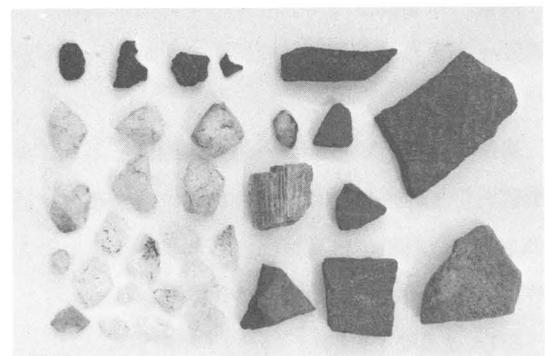


図78 田仏遺跡採集遺物

遺物は180×80mあまりの範囲に散布しており、そのほぼ中心である道沿いの50m四方の地点に集中的にみられた。量的には比較的多く、大半が須恵器であるが、土師器も相当数ある。また前述のような製鉄関係の遺物として鉄鏝が採集されている。玉材は水晶が主体をなす。水晶未成品も4点採集されており、玉作遺跡として認定してよいものと思われる。

遺物 須恵器は42点採集されており、蓋坏、高坏、甕などが含まれている。坏蓋は、山陰須恵器編年Ⅲ期末～Ⅳ期のものである。

土師器は7点が採集されており、器形のわかるものは甕の口縁部1点のみである。

玉材は水晶8点、石英7点、碧玉7点、カド石1点が採集された。

このうち水晶の中に勾玉未成品と思われるもの1点、不明未成品3点が含まれている。

また碧玉は濃緑色の良質なもので、押圧剥離による調整の見られるものもある。

このほかに鉄鏝を9点採集した。

39. 神 田 遺 跡

所在 八束郡玉湯町大字林村字別所に所在する。この地は上野山から派生した丘陵の東端斜面に位置し、上野山山頂から東へ約1.2kmの地である。標高約125m、地目は水田である。

遺跡の概要 遺物は筋砥石が1点採集されたのみである。山裾斜面の棚田状に作られた水田の畦道でビニール袋の重しとして使用されていた。

遺物 筋砥石はアーコース砂岩製。破片であり、もとの大きさは不明であるが、幅と厚さはほとんど変わっていないようである。現存長11×11×4cmを測る。1面のみ使用されており、生きている側辺を手前におくと、左半分に4本筋が入り、右半分は筋とは言えないが、わん曲した磨耗が3本見られる。左半分の筋はいずれも幅9～10mmで、深さ3～5mmを測る。右の磨耗痕は1本が幅21mm、深さ

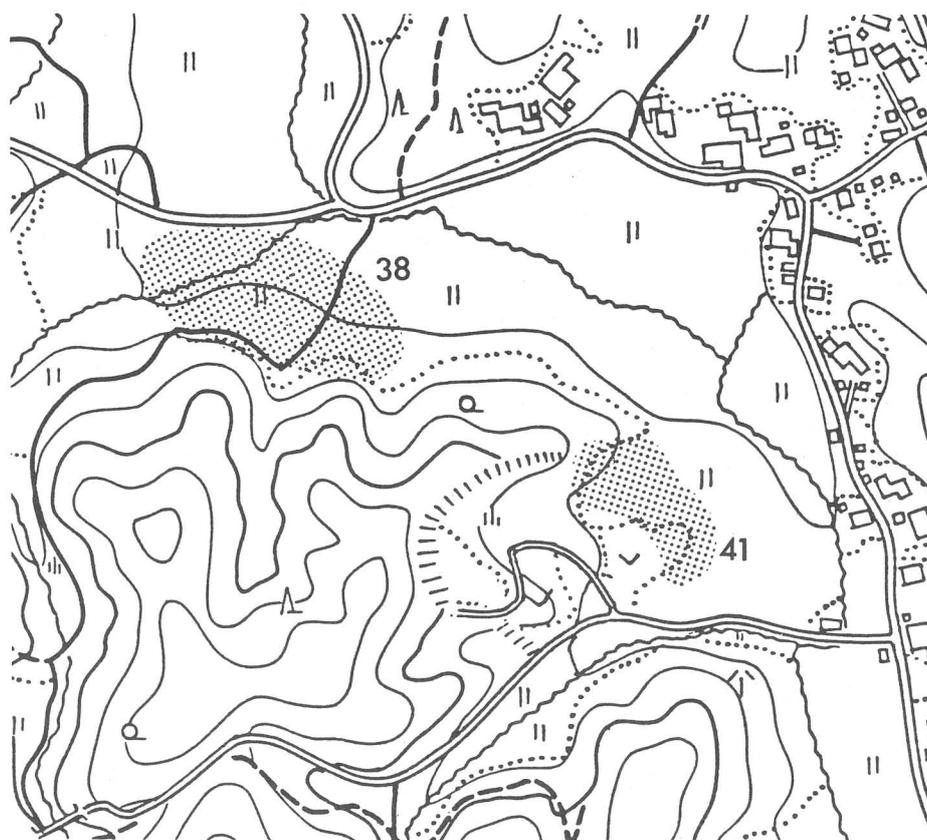


図79 有ノ木遺跡(38)、ソリ田遺跡(41)の位置

1:5000

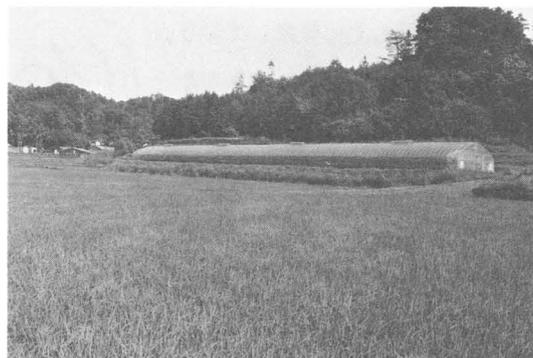


図80 有ノ木遺跡近景

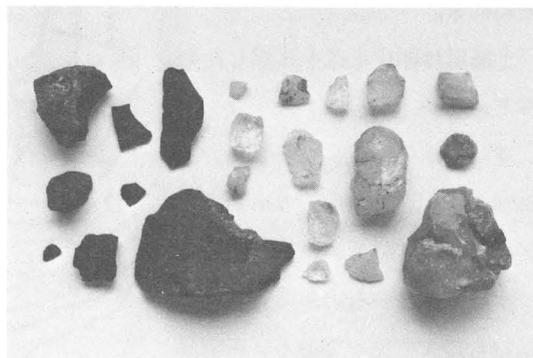


図81 有ノ木遺跡採集遺物



図 82 神田遺跡遠景



図 83 神田遺跡採集砥石

3mm, 他は幅15mm, 深さ1~2mmである。

ひじりばら 40. 火尻原遺跡

所在 八束郡玉湯町大字林村字別所火尻原に所在する。この地は上野山から派生する山塊東麓の南に入り込む谷の谷頭周辺の緩斜面上に位置しており、別所から下大谷へ抜ける峠となっている。標高85m前後、現状は畑である。

遺跡の概要 遺跡は100×100m程度の広い範囲に広がっており、この範囲のうち畑に利用されている所から遺物が採集された。遺跡の範囲はさらに若干広がる可能性が高い。現在の土地利用から4つの地点に分けることができる。

玉材は水晶が大半で、残りを碧玉が占め、瑪瑙類がほとんど見られない。特に水晶製平玉が多いのが注目される。

— ① 地点 —

4地点中最も北に位置しており、牧草地の一角の畑であり、およそ30×25mの範囲に遺物の散布が見られる。遺物は須恵器がほとんどであった。

遺物 須恵器は小片ばかりであるが31点が採集された。器形不明のものばかりであるが中に坏、蓋と思われるものが含まれており、いずれも歴史時代須恵器であると思われる。

土師器は細片1点を採集したのみである。

玉材は水晶4点、碧玉2点、赤瑪瑙1点、石英5点、カド石3点が採集されている。

水晶は良質のものから質の良くないものまで色々である。未成品の残欠1点が採集されており、こ

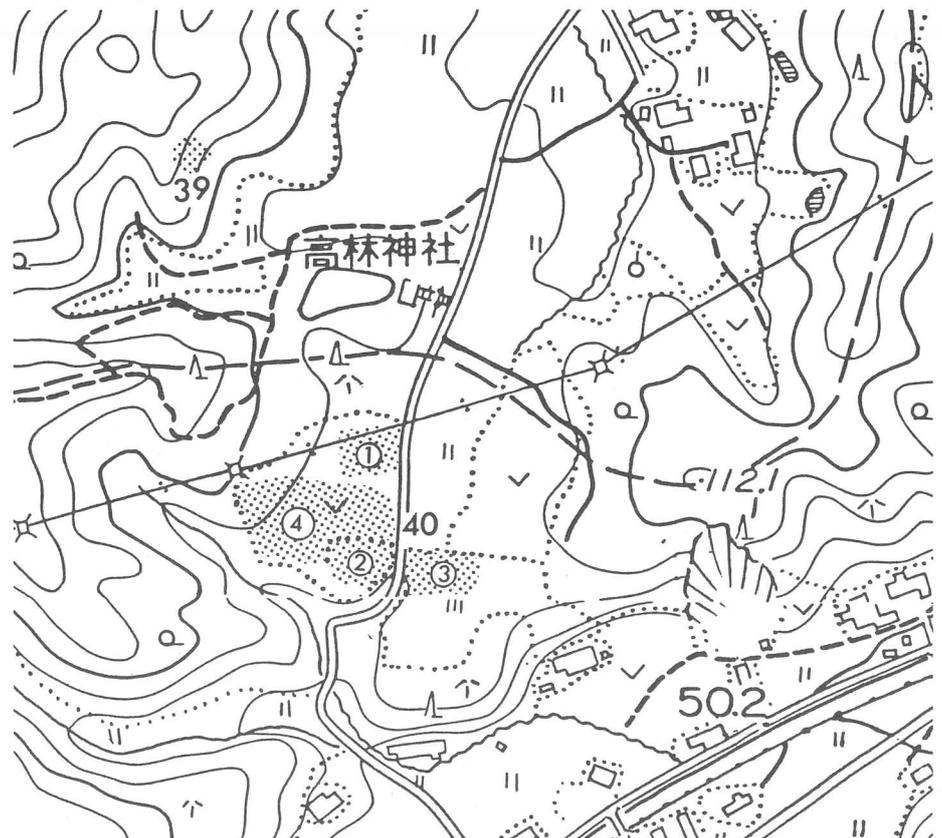


図84 神田遺跡(39)、火尻原遺跡(40①~④地点)の位置

1:5000

れは現存長 2 cm, 幅 1.5 cm, 厚さ 1 cm を測り, 断面楕円形で, 全面に荒い研磨が施されている。勾玉未成品の可能性もある。

碧玉, 赤瑪瑙はいずれもチップ状である。

このほかに黒曜石の小片 1 点が採集されている。

— ② 地点 —

本地点も牧草地の一角に営まれた畑で 40 × 30 m の範囲に遺物の散布が見られた。

遺物 遺物は比較的少量であるが, 水晶製未成品も採集された。土器類は少ない。

須恵器は小片 1 点が採集された。

土師器は小片 2 点が採集された。

玉材は水晶 7 点, 瑪瑙 3 点, 碧玉 1 点, カド石 1 点が採集されている。

水晶は透明な良品から白濁したものまでがあり, 平玉未成品 4 点が含まれ, 最大のもは直径 1.4 cm, 厚さ 0.9 cm であるが, 他の 3 点はいずれも直径 1 cm 前後, 厚さ 0.6 ~ 0.7 cm を測る。4 点とも形割が施されており, 2 点の一部分に研磨痕が残る。水晶原石を縦方向に半裁し, 結晶面の一角が残っている未成品が注目され, 製作技法の一端をうかがうことが出来る。

瑪瑙は一部分にうすい茶色がさす, やや褐色がかかった乳白色で, 赤瑪瑙とも白瑪瑙とも判断がつかかねる。

碧玉, カド石はチップ状である。

— ③ 地点 —

道をへだてて②地点と向かい合っており, 50 × 40 m の範囲に遺物の散布が見られた。

遺物は玉類がほとんどで, 土器類は少量みられるだけである。なかでも水晶が全体の 8 割弱を占め, 平玉未成品が多く採集された。

遺物 須恵器は小細片 4 点が採集された。

その他の遺物として青磁 2 点, 陶器 1 点が採集された。いずれも小細片である。

玉材は水晶 91 点, 碧玉 25 点, カド石 1 点が採集された。

水晶は透明な良質のものも少量あるが, 白濁したものがほとんどで, 石英と区別しがたい石もある。平玉未成品が 7 点含まれており, 他は 2 cm 程度の小塊状剥片も数点見られるがチップ状のものがほとんどである。

平玉未成品は形割途中のもの 2 点, 形割がほぼ終わった状態のもの 2 点, 一部に研磨が見られるもの 1 点, 全面に研磨が及んでいるもの 2 点があり, やや濁った石もあるが, 形割段階以上のものはいずれも透明部分の多い良質の石が使用されている。最大のもは径 1.6 cm, 厚さ 0.8 cm, 最小のもは径 1 cm, 厚さ 0.5 cm を測る。おおよ

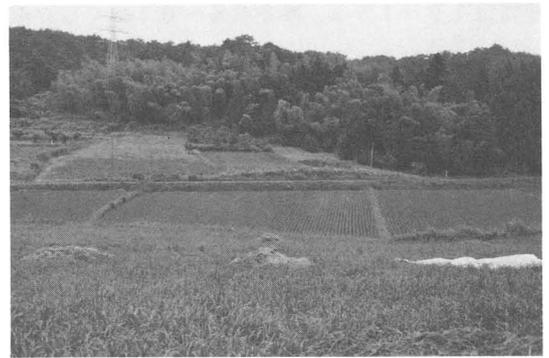


図 85 火尻原遺跡①地点遠景



図 86 火尻原遺跡②③④地点遠景



図 87 火尻原遺跡③地点採集遺物



図 88 火尻原遺跡④地点採集磁石

そ径は1.2～1.5 cm, 厚さ0.6～0.7 cmぐらいのものが多くいようである。

碧玉は深緑色を呈しているが、いずれも屑残片であり、チップ状のものが多くい。

— ④ 地点 —

②地点の西～北西隣に位置し、畑に造成されている。100×50 mの広い範囲に遺物の散布が見られ、遺物は須恵器が多く、平砥石、筋砥石が各1点採集されたが、玉類は少なかった。また紅簾石片岩片が1点採集されたことが注目される。

遺物 須恵器は小片が多いが、29点採集された。器形のわかるものとしては、蓋坏、高坏、高台付の坏があり、いずれも山陰須恵器編年Ⅳ期及びそれ以降のものである。

その他の遺物としては、土師器、青磁が各1点採集されている。また平瓦が1点採集された。

玉材は水晶4点、碧玉1点、カド石1点が採集された。

水晶は比較的透明部分の多いもので、平玉未成品が1点あり、他はチップである。平玉未成品は径1.7 cm, 厚さ1 cmを測り、一部自然面が残るが、ほぼ全面に細部調整が加えられている。

筋砥石は花崗岩製で、残存長11 cm, 幅13.5 cm, 厚さ13 cmを測り、一面に二本の筋が残っている。筋は残存長8 cm, 幅1.3 cm, 深さ0.25 cm, と残存長8.7 cm, 幅1.2 cm, 深さ0.1 cmを測る。

平砥石は花崗岩製で残欠品であるが、残存長22 cm, 幅17 cm, 厚さ8 cmを測り、上下面に平らな使用痕が見られる。

紅簾石片岩はうすい桃色を呈するもので、かけらであるが、残存長3 cm, 幅2 cm, 厚さ0.4 cmを測る。一側面が非常に平らでスベスベしているの、あるいはこの側面を使用しているのかもしれない。

まとめ 以上のように本遺跡は、山陰須恵器編年Ⅳ期及びそれ以降の時期に盛行し、水晶平玉を主に製作していたことをうかがわせる。特に③地点は、20 m四方程度の畑から多くの水晶片、未成品が採集されており、玉作工房跡があったことが予想される。他の①②④地点は玉類も採集されるが須恵器類が多く、遺跡がすべて玉作りに依存していたわけではないのかもしれない。いずれにしても本遺跡ではⅣ期以降の玉作りの良好な資料が得られた。

41. ソリ田遺跡

所在 八東郡玉湯町大字林村字別所に所在する。この地は上野山から派生した丘陵緩斜面上に位置し、上野山山頂から東へ約1.1 kmの地である。標高70～80 m, 現状は草地及び水田である。この遺跡の背後の丘陵斜面には穴薬師横穴群がある。確認されたもので3基、他に3基ある（平野光美氏談）ということである。

遺跡の概要 遺跡は別所ソリ田玉作跡として知られており、その標柱が立てられている周辺から、西側の水田にかけて約110×80 mの広範囲に遺物の散布が見られる。特にこの水田は、約5年前に個人では場整備が行なわれており、畔や崖面から多くの遺物が採集された。大半が須恵器であり、山陰須恵器編年Ⅳ期及びそれ以降のものである。玉材はほとんどが水晶であり、赤瑪瑙は見られなかった。また石英も多く見られたが、中には水晶なのか石英なのか判別しがたい石もあった。

遺物 須恵器は合計24点が採集された。器形のわかるものとしては、蓋坏の蓋、盤、高台付の坏、甕などがあり、全て山陰須恵器編年Ⅳ期及びそれ以降のものである。

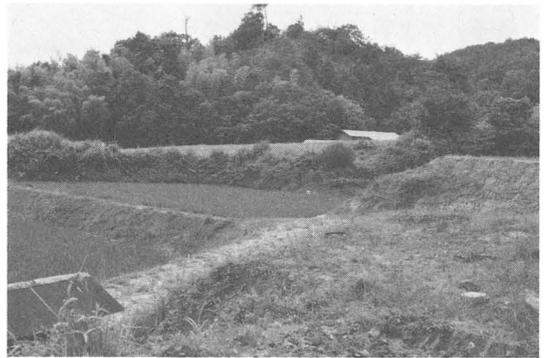


図89 ソリ田遺跡近景

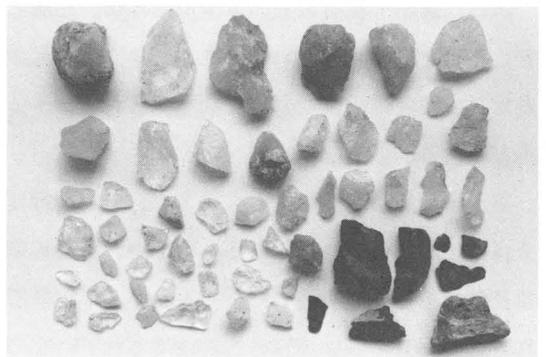


図90 ソリ田遺跡採集遺物

土師器は小片7点が採集された。器形のわかるものは壺・甕の口縁部1点がある。

玉材としては水晶40点、石英9点、碧玉9点が採集された。

水晶は全体に白濁部分の多いものが多く、中には石英と見分けのつきにくい石があったが、無色透明で良質な石材も含まれている。未成品が3点含まれており、平玉未成品1、四角柱状未成品1、不明未成品1点である。平玉未成品は完全に白濁しており、他の2点は透明部分の多い良質な水晶である。平玉未成品は、直径約1.2cm、厚さ約0.5cmを測り、側面部分に押圧剥離が認められる。四角柱状未成品は、 $1.6 \times 0.6 \times 0.5$ cmを測り、2面に自然面が残り、他の2面に主要剥離と細部調整が見られる。不明未成品はフレイク状で、主要剥離面を除く全体に細部調整と、一部研磨痕が見られる。

碧玉は小品が多く、いずれも濃緑色であるがヒビやワレが多く、良質のものではない。

このほかに黒曜石が採集された。 $1.4 \times 0.6 \times 0.15$ cmを測り、欠損しているが、縦剥のブレイド状を呈している。

42. 宮畑遺跡

所在 八束郡玉湯町大字林村字根尾に所在する。標高20~40mの台地状を呈する丘陵上に位置する。丘陵は南から北に向かってゆるやかに傾斜し、遺跡のすぐ西には小川が流れており小さな谷を形成している。現状の地目は畑が大半である。

『古代玉作形成史の研究』^{註1}によれば、昭和52年4月に確認された遺跡で、 40×30 m以上の範囲に遺物の散布が知られていたが、このたびの分布調査によってさらに広範囲にわたって遺物の散布していることが確認された。ここでは以前から知られていた地域を①地点、このたび新たに確認した地域を②地点としてその概要を紹介しておくことにする。

— ① 地点 —

「根尾宮畑玉作遺跡」と書かれた標柱が立っている西側の地点である。踏査を実施した際には畑が耕作されておらず雑草が繁茂していたため、わずかばかりの遺物しか採集することができなかった。

遺物 須恵器は小細片1点が採集されたのみで、器形、時期等については不明である。

玉材としては、碧玉3点、赤瑪瑙1点、石英1点、カド石4点が採集された。

碧玉は比較的良質のもので、2点がフレイク状、1点がチップ状を呈している。

赤瑪瑙は小塊状で、小さな水晶が無数に付着している。

なお、昭和52年には碧玉・瑪瑙製勾玉の他に、碧玉・瑪瑙・水晶等の剥片・屑片が出土している。

— ② 地点 —

①地点と道をへだててすぐ北に位置し、標高20~30mの畑地である。畑が耕作されていたこともあり多くの遺物を採集することができた。遺物は 50×30 mあまりの範

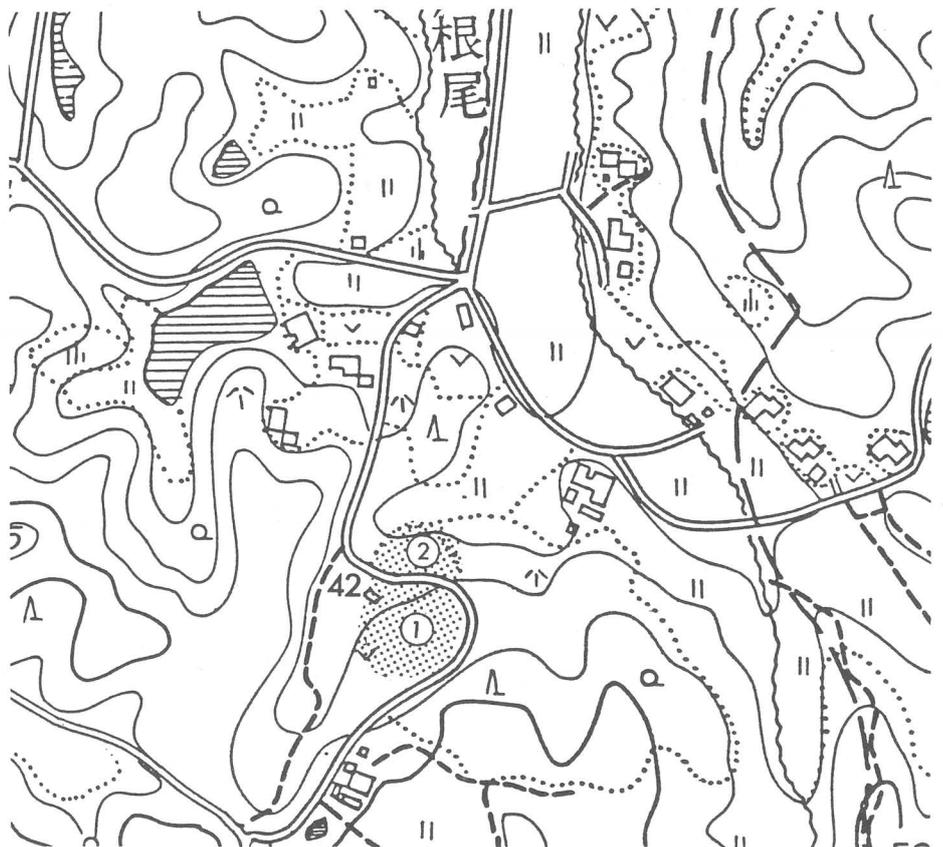


図91 宮畑遺跡 (42①・②地点) の位置

1:5000

圃に散布しており、碧玉、赤瑪瑙、水晶の三種類の玉材がほぼ均等に採集された。①地点と②地点を合すると本遺跡は北南 100 m、東西 50 m 以上の広範囲にわたるものと考えられる。

遺物 須恵器は小片 8 点が採集されたが、器形、時期等については不明である。

土師器は小片 2 点が採集されたのみである。

玉材は碧玉 18 点、水晶 13 点、赤瑪瑙 10 点、白瑪瑙 1 点、カド石 3 点が採集された。

碧玉は緑の濃い比較的良好なもので、チップ状のものが多い。研磨痕のある破片が 1 点含まれている。残存長 1.5 cm、幅 0.6 cm、厚さ 0.25 cm の小片である。

水晶は透明度の高い極めて良質なもののばかりである。平玉未成品が 2 点含まれている。1 点は自然面が二面残っている形制品で、径 1.2 cm、厚さ 0.9 cm を測る。他の 1 点は全面に細部調整が施されたもので、径約 1.3 cm、厚さ 0.6 cm を測る。原石が 2 点採集されており、1 点は六角柱の美しい結晶体で長さ 3.5 cm、幅 1.6 × 1.4 cm を測る。もう 1 点は瑪瑙のような板状の産状を呈しており、三面に自然面を持っている。

赤瑪瑙は両側面に自然面をもつ板状の原石片が 1 点ある。残存長 2.4 cm、幅 2.1 cm、厚さ 0.7 cm を測るもので、このような原石から勾玉を製作していたものと推測される。近年同じような原石から作られた勾玉未成品が採集されている。他は屑片である。

白瑪瑙はあまり質のよくない小塊状屑片である。

このほかに黒曜石 1 点が採集されている。

註 1. 寺村光晴『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館 昭和 55 年

43. 脇田遺跡

所在 八東郡玉湯町大字林村 618 の通称「脇田」に所在する。この地は本郷川の河口より上流約 800 m の川沿いにあり、上野山から派生する丘陵北端裾部のゆるやかな傾斜地に位置している。標高約 20 m、地目は畑である。すぐ下の水田が六反田遺跡である。

遺跡の概要 遺跡は渡部岩雄氏宅前の 15 m 四方の畑であり、すぐ下には水田が広がっている。遺物の量は少ない。

遺物 須恵器は小片 5 点が採集された。器形のわかるものとしては、蓋坏 1、高台付の坏 1 がある。

土師器は小細片 1 点が採集されたが器形は不明である。

玉材は碧玉 1 点、カド石 1 点が採集されている。



図 92 宮畑遺跡①地点

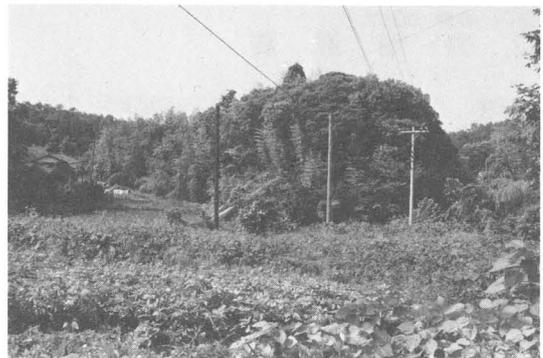


図 93 宮畑遺跡②地点



図 94 宮畑遺跡第②地点採集遺物

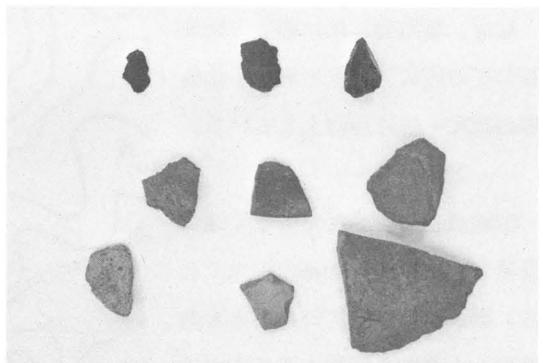


図 95 脇田遺跡採集遺物

44. 六反田遺跡

所在 八東郡玉湯町大字林村本郷字六反田に所在する。この地は宍道湖に流れ込んでいる本郷川の河口より上流約800mの川沿いにあり、上野山から派生する丘陵の北端裾部に位置しており、ゆるやかな傾斜地である。標高約15m、地目は水田である。

遺跡の概要 踏査した時点では水田に水が張っており、畦でしか遺物を採集出来なかった。遺物は水田3枚の畦100×50mに散布しており、量は少ない。北半分の水田畦には玉材のチップ類が多く、南半分の水田畦で須恵器が多かったことが注目された。

遺物 須恵器は小片9点が採集された。蓋坏の坏、高台付の坏が1点ずつ含まれている。蓋坏は山陰須恵器編年Ⅲ期のものである。

玉材は水晶2点、碧玉1点、カド石2点が採集された。

水晶のうち1点は小塊状をなし、白濁不透明であり、他の1点は透明部分の多いチップ状である。

碧玉は濃暗緑色のチップである。

45. 向市遺跡

所在 八東郡玉湯町湯町に所在する。この地は室山から派生した山塊の北東端で、玉湯川の左岸、宍道湖を望む低台地上に位置している。標高10m前後、地目は畑である。

遺跡の概要 遺跡は低台地上から斜面にかけて広がり、100×100mあまりの範囲に遺物の散布が見られる。現在の土地利用より3地点にわかれるが、遺物の散布は比較的希薄である。今回の踏査ではあまり良い資料を採集されなかったが、たんねんに探せば良好な資料が得られるであろう。

— ① 地点 —

①地点は本遺跡中、最も遺物の量が多かった地点である。この地は遺跡の南東部分を占めており、民家横の畑である。遺物はおよそ20×30mの範囲に多くみられる。

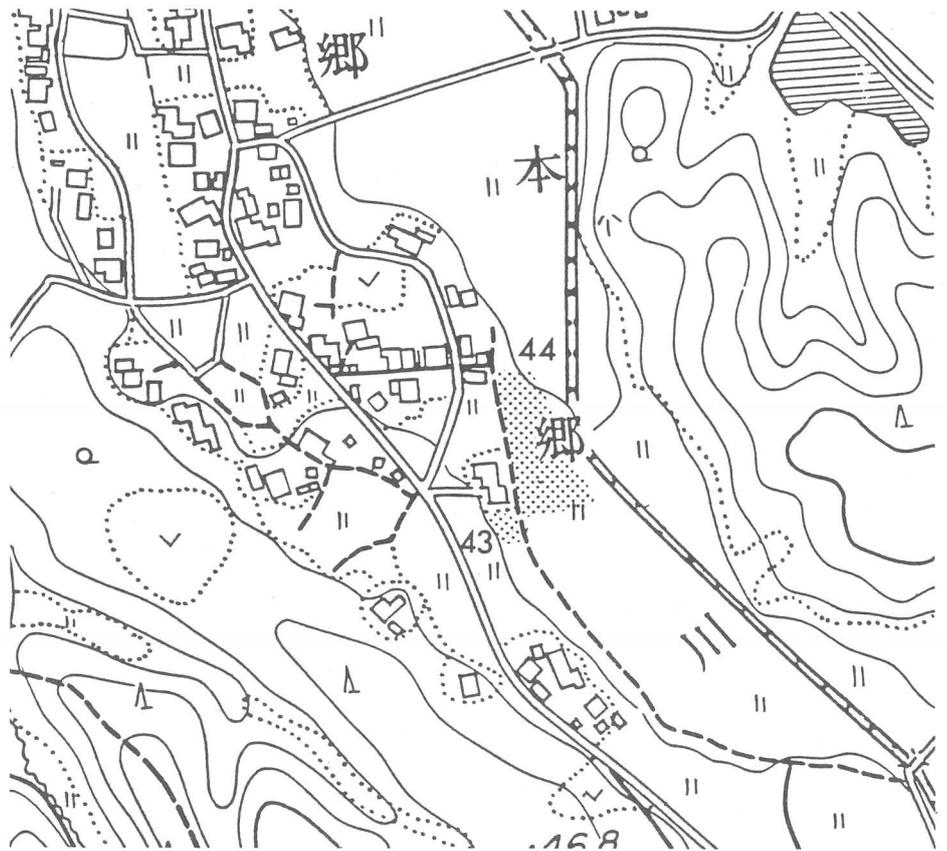


図96 脇田遺跡(43)、六反田遺跡(44)の位置

1:5000

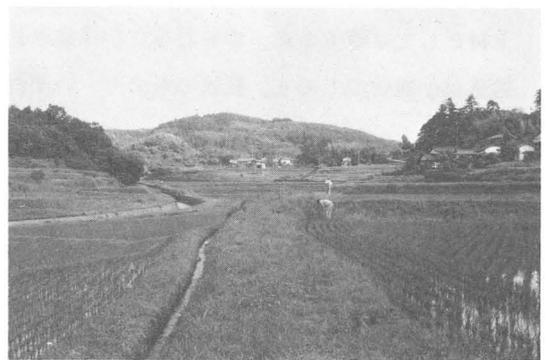


図97 六反田遺跡近景

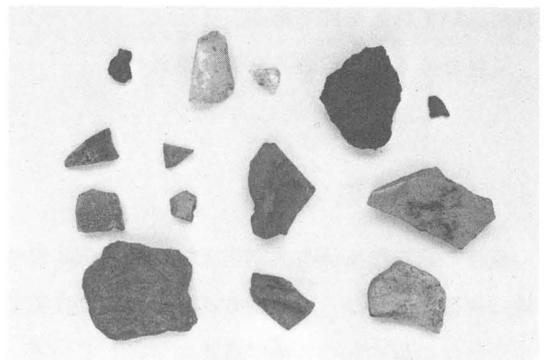


図98 六反田遺跡採集遺物

遺物 須恵器1点, 土師器4点, 不明陶器2点が採集された。いずれも小片である。

玉材は碧玉5点, 石英2点, カド石3点が採集された。

碧玉は2点が小塊状で, 3点がチップ状である。いずれもあまり質のよくない碧玉である。

石英は遺物であるか否かはよくわからない。

このほかに黒曜石3点が採集された。いずれも2cm足らずの小品であるが, 刃付けがなされているものもある。

鉄鏝も1点採集された。

— ② 地点 —

①地点の北に位置し, 遺跡の北東部分を占めている。50×30m程度の広い範囲の畑である。

遺物 須恵器は小片1点が採集された。器形・年代等については不明である。

玉材としては碧玉2点, カド石5点が採集された。

碧玉は小塊状のものと, 板状のもので, いずれも質はあまりよくない。

硅化木も1点採集された。長さ3.1cm, 幅1.2cm, 厚さ0.6cmの小片である。

このほかにチップ状の黒曜石1点も採集された。

— ③ 地点 —

遺跡の北西部分を占め, 40×30mの範囲であるが遺物は極めて少ない。

遺物 土器類としては土師器2点, 陶器1点, 青磁1点が採集された。いずれも小片である。

玉材はカド石1点のみが採集された。

46. 布志名狐廻遺跡

所在 八束郡玉湯町大字布志名字狐廻736番地に所在する。この地は花仙山山頂から北へ約650mの北麓に位置し, 比較的広く, ゆるやかな傾斜をもつ谷の最奥部に位置している。昭和54年度に実施された布志名狐廻は場整備事業に伴い同年初秋に発見され, 多くの



図99 向市遺跡(45①~③地点)の位置

1:5000



図100 向市遺跡①地点

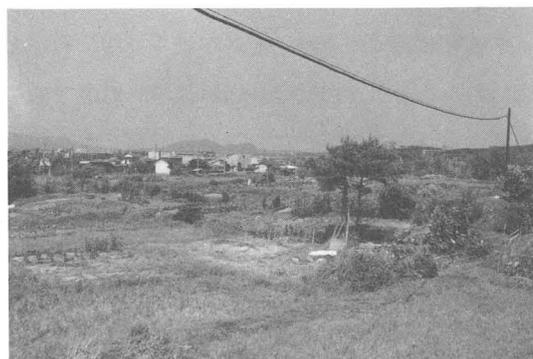


図101 向市遺跡②地点

遺物が採集された。標高は31~32 mを計る。

遺跡の概要 遺物はいずれも採集品である。この内、全体量の9割以上が小支谷入口付近の約600㎡の範囲で採集され、この資料が報告されている^{註1}。

出土した須恵器は山陰須恵器編年第Ⅲ期に限られており、「本遺跡は古墳時代6世紀後半の比較的短い期間に営まれた玉作工房跡と推定される。」としている。

また瑪瑙製勾玉が非常に多く採集されており、内磨砥石も多く採集されている。この勾玉の原石に厚さ1 cm前後の板状石材が使用されており、両側面に自然面が認められる。板状の石材から長方形未成品を作り、縁辺部を打ち欠いて円味をつけ、さらに腹部の凹みと

両側面に細かな調整の剥離を施し、研磨作業を実施したと考えられ、碧玉など塊状の原材から作出する場合に比べ、偏平に打ち欠く手間が省け、格段に効率的である。

遺物 須恵器は坏、高坏、広口壺、小形短頸壺などがあり、いずれも山陰須恵器編年第Ⅲ期の範疇に含められる。

土師器は壺、甕類が最も多く、他に高坏形土器、甌形土器、土製支脚、かまど片などがある。

玉材はいずれも未成品で、勾玉39点、管玉1点、切子玉1点、丸玉1点がある。

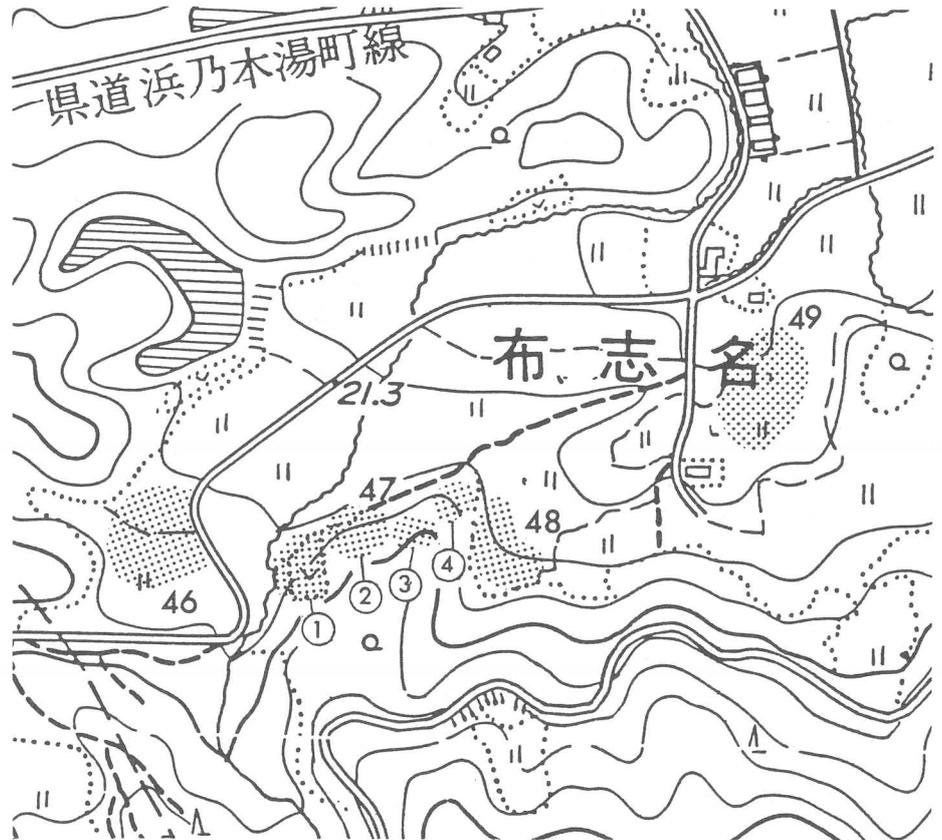


図102 布志名狐廻遺跡(46)、永丁夫遺跡(47①~④地点)、岩屋口遺跡(48)、布志名布田遺跡(49)の位置 1:5000

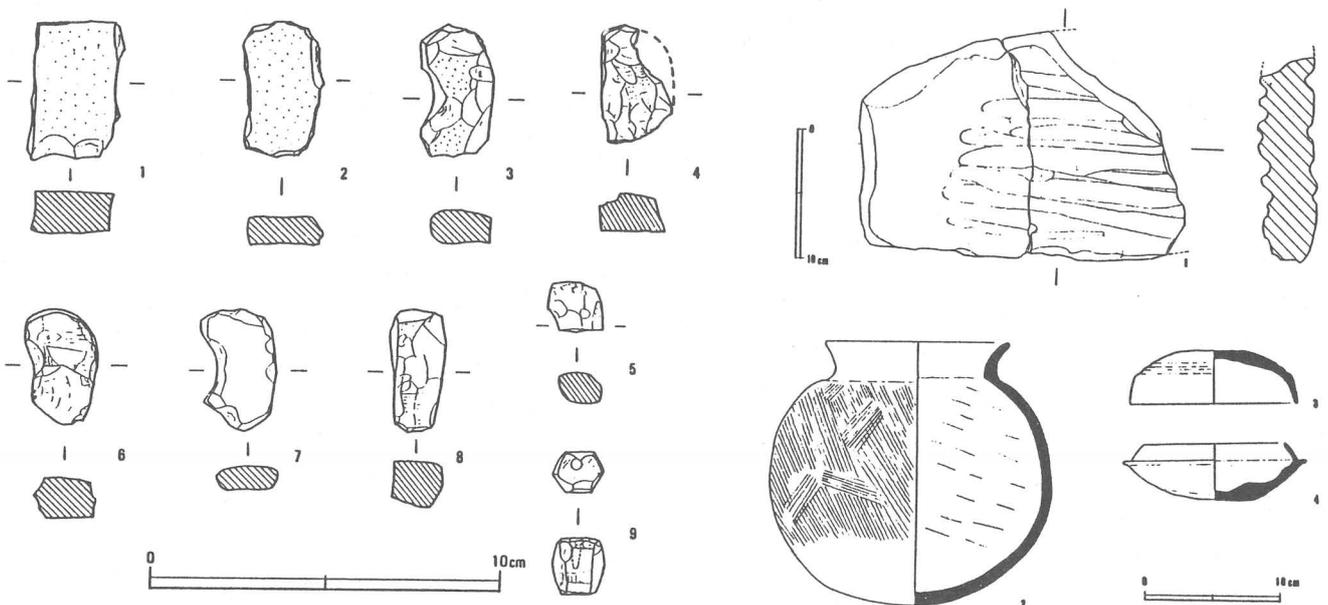


図103 布志名狐廻遺跡出土玉類、砥石、土器 (『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅶ集 1981より)

勾玉は瑪瑙製品33点、碧玉製品5点、結晶片岩製1点がある。瑪瑙製が多数を占め、厚さ1cm前後の板状原石を用い、ほとんど両側面に自然面を残す。

管玉は碧玉製で、四角柱状を呈し、3つの側面にヨコ方向の研磨痕がある。

切子玉は水晶製で六角柱の頭部に近い結晶体を使用しており、研磨を8割がた終え、穿孔半ばの未成品である。また丸玉も水晶製である。

砥石には筋砥石1、平砥石1、内磨砥石9がある。

筋砥石、平砥石はいずれも欠損品であるが、粒子の荒い砂岩質である。

内磨砥石はいずれも結晶片岩製で板状を呈し、両側辺のみを使用する例もあるが、上下の面も使用されており、筋砥石や平砥石と同様な機能も推定される。

註1. 勝部 衛「玉湯・布志名狐廻遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅷ集 島根県教育委員会 昭和56年

ながちょうぶ 47. 永丁夫遺跡

所在 八束郡玉湯町大字布志名字永丁夫ほかに所在する。この地は花仙山北側斜面の東に向かって開口する比較的広く、ゆるやかな傾斜をもつ谷の奥部南斜面に位置している。標高40m前後、地目は大半が畑であり一部は水田もある。

遺跡の概要 本遺跡から約100mほど西の谷最奥部には、布志名狐廻遺跡があり、農道によって分断されているが、もとは一続きの遺跡であったと思われる。遺跡は100×50m以上の範囲に濃淡をもちながらも広がっており、さらに周辺に広がる可能性が高い。現在の土地利用上からとりあえず①～④の4地点に分けている。

— ① 地点 —

本遺跡中最西端に位置しており、35×25m程度の範囲の畑である。遺物は山陰須恵器編年Ⅲ期の須恵器と表裏面に自然面をもつ板状瑪瑙が特徴的で布志名狐廻遺跡との類似性を指摘することが出来る。

遺物 須恵器は小片ばかりであるが4点が採集されている。器形の分かるものは蓋坯の坯1点があり、山陰須恵器編年Ⅲ期のものである。

土師器は小片2点が採集されている。

碧玉は5点が採集されており、いずれも皮に近い部分と思われ質は良くない。

水晶は2点が採集されており、1点は透明な良品で、1点は白濁部分がほとんどである。

赤瑪瑙は12点が採集されている。表裏面に自然面をもつ板状のものも3点含まれており、他はフレイク、小塊状である。

白瑪瑙は14点が採集されており、表裏面に自然面をもつ板状のものも3点含まれており、他は小塊状である。

瑪瑙原石は4点が採集されており、いずれも質は悪い。最大のものは12×11cmを測る。

カド石は6点採集されている。カド石の付着した碧玉小塊2点が含まれている。

— ② 地点 —

①地点とはほぼ同じレベルの東側に位置する畑で柿、梅が植えられ、



図104 永丁夫遺跡近景

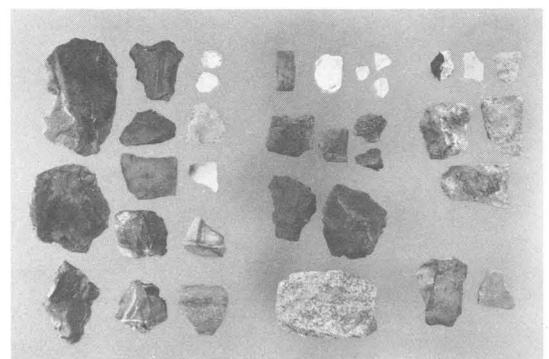


図105 永丁夫遺跡採集遺物

豆が作られていた。遺物の散布は20～30m四方の範囲に見られ、碧玉が多かった。

遺物 須恵器は小片2点が採集された。蓋坏の蓋1点が含まれており、山陰須恵器編年Ⅲ期のものとしてよさそうである。

土師器は壺・甕類の口縁部1点のみが採集されている。

碧玉は9点が採集された。いずれも濃緑色を呈しているが、必ずしも質の良い物ではない。

管玉未成品が1点採集されている。これは直径10mm、長さ22mmを測り、全面に荒い研磨が施されており、やや中ぶくれの円筒形を呈している。両小口は一方の擦痕が見られ、側面部は横方向に研磨されている。穿孔は行なわれていない。やや色の淡い部分が混じる。

赤瑪瑙はチップ1点が採集されたのみである。

水晶は4点が採集されており、無色透明な良質の石も含まれている。

その他石英6点、カド石2点が採集されている。

— ③ 地点 —

現在畑になっているところで一番高い位置にあたる。遺物は2枚の畑中心に散布しており、15×10mあまりの比較的狭い範囲に分布している。白瑪瑙がほとんどであった。

遺物 須恵器は小片1点が採集されている。

土師質土器も小片1点が採集されている。

碧玉はチップ1点を採集したのみである。

白瑪瑙は11点が採集されており、全て表裏面に自然面をもつ板状のものであるが、厚みが5～6mmのものが多く、玉を作った際にできる屑ではないかと思われる。

赤瑪瑙はチップ3点を採集した。

カド石は6点が採集されている。

— ④ 地点 —

小さく舌状に張り出したこの尾根の先端部に位置している。遺物の量は少なく、分布も希薄である。

遺物 須恵器・土師器はいずれも小片1点ずつが採集されている。

赤瑪瑙は表裏面に自然面をもつ板状のものが2点採集されている。1点はたき火の跡にあったため火を受けており、もう1点は中央部に水晶が析出して白くなっている。

48. 岩屋口遺跡

所在 八東郡玉湯町大字布志名字岩屋口に所在する。この地は花仙山山頂から北へ約600m行った所にある小さく舌状に張り出した尾根の東側に形成された小谷の最奥部周辺に位置している。西へ約250mの地には布志名狐廻遺跡があり、すぐ西の尾根の西側斜面には永丁夫遺跡がある。標高は30m前後、地目は畑となっている。

遺跡の概要 布志名狐廻遺跡、永丁夫遺跡と一続きの花仙山北側斜面上にあり、もとは一つの遺跡であった可能性が高い。板状の自然面をもった瑪瑙が多く採集されており、さきの2遺跡との共通性が指摘できる。

遺物の散布は50m四方面程度の範囲に見られ、自然面の多い玉材の屑片が多かった。

またこの小谷の入口付近に石室石材と思われるような大石が残っていた。

遺物 須恵器は小片3点が採集されているが時期は不明である。

土師器は小片4点が採集されている。

碧玉は7点採集されており、1点が美しい濃緑色を呈する他は質の悪いものばかりである。

水晶は2点が採集されており、いずれも透明部分の多い質の良いものである。

赤瑪瑙は16点採集されており、そのうち10点が表裏面に自然面をもつ板状のもの、もしくはそれを打ち欠いたものである。そのうち自然面にかこまれた小塊状をなす石の3箇所を押圧剥離を施した未成品らしいものが1点含まれているが、何の未成品かは不詳である。

白瑪瑙は35点採集されている。原石塊状のもの3点が含まれている他は、ほとんど板状のものである。いずれも質が悪く、屑片である。



図106 岩屋口遺跡遠景

49. ぬの だ 布 田 遺 跡

所在 八束郡玉湯町大字布志名字布田に所在する。この地は花仙山北麓の北向緩斜面上に位置し、比較的広く、ゆるやかな谷の谷尻にあたる。標高10～20mを計り、地目は水田である。

遺跡の概要 本遺跡の所在している谷の同じ南側斜面の西には岩屋口、永丁夫遺跡と続き、谷奥には布志名狐廻遺跡があり、そこではさかんに玉作りが行なわれていたと推定される。しかしながら本遺跡は、80×40mの広い範囲にもかかわらず、今回の踏査では遺物の散布も少なく、玉作遺跡であるという確信は得られなかった。

遺物 須恵器は2点が採集されたが、器形は不明である。

土師器は1点が採集され、壺・甕の肩部と思われる。

玉材は碧玉3点、赤瑪瑙4点、カド石1点が採集されたが、いずれも質の悪い小片である。

50. だい にち 大 日 遺 跡

所在 八束郡鹿島町南講武字大日に所在する。講武川の左岸で、講武平野の南辺に位置する。標高15～20mの南西側に向かってゆるやかに傾斜する地形で、現状の地目は畑である。

遺跡の概要 昭和61年、鹿島町教育委員会によって発掘調査が実施されて確認されたものである。この調査はほ場整備事業に先立って遺跡の範囲を確認する目的で実施されたため、全容を知ることにはできないが多くの成果が得られた。

調査の結果、5棟の竪穴住居跡が検出され、このうちSB04から石英あるいは白瑪瑙と思われる屑片が出土している。このほかG5区では滑石製とみられる勾玉状品、石英あるいは白瑪瑙屑片などが出土した。またG8区でも碧玉と思われる剥片、石英あるいは白瑪瑙と思われる剥片等が出土している。^{註1}

玉作関係遺物の量が少ない上、明確な未成品がみられないので、現状では玉作遺跡であると断言できないが、可能性の高い遺跡として注意される。

註1. 赤沢秀則氏の御教示による。

51. 大東高校校庭遺跡

所在 大原郡大東町大字大東字輪ノ内ほかに所在する。斐伊川の一支流、赤川の右岸に位置する。標高約50mあり、加多神社のある丘陵麓



図107 大日遺跡50の位置

1:50000

から赤川に向かってゆるやかな傾斜地をなしている。

遺跡の概要 昭和27年、島根県立大東高校のグラウンド造成の際に碧玉質勾玉、管玉未成品、内磨砥石、剥片等が出土したことにより玉作遺跡として注意されるようになった。その後昭和49年にグラウンド整備に際して発掘調査が行なわれ、さらに多数の玉作関係遺物が出土したことから一層玉作遺跡としての存在が明確になったが、後世の削平等により工房跡といった遺構については確認されていない。

遺物 碧玉製勾玉未成品、同管玉未成品、同剥片をはじめ各種攻玉工具とともに古式土師器および若干の須恵器片などが出土している。^{註1}

註1. 前島己基「出雲国玉作遺跡の一例」『日本玉研究会誌1』昭和45年『大東町誌』昭和46年



図108 大日遺跡遠景



図109 大東高校校庭遺跡遠景

52. ^{また} 又 下 遺 跡

所在 大原郡大東町大字大東字又下に所在する。斐伊川の一支流、赤川の右岸に位置し、大東高校校庭遺跡の北東約200mの地点にあたる。東側に向かってゆるやかに傾斜する地形で、現況地目は水田である。標高は55mあまりある。

遺跡の概要 昭和61年12月から翌62年3月まで、大東町教育委員会により発掘調査が実施され、玉作関係遺物が出土した。この調査は島根県立大東高校の柔剣道場建設に伴って実施されたもので、調査地は体育館の北側である。

現表土下約1mのところには黒褐色砂質層がみられ、この層の中に多量の遺物が包含されていた。明確な遺構は検出されていないが、遺物はⅢ期・Ⅳ期の須恵器が量的に最も多く、土師器土製支脚、砥石等も出土している。ほかに古式土師器も若干出土しており、この遺跡は相当長期間にわたって営まれていたことが知られる。^{註1}

遺物 玉作関係遺物としては、水晶製勾玉1、碧玉管玉未成品1、碧玉剥片1、赤瑪瑙剥片1、砥石1がある。水晶勾玉は長さ約2.5cmのもので、すでに穿孔されており、ほとんど完成品に近いものである。碧玉管玉未成品は長さ約3.5cmの角柱状のもので側面打裂工程のものと思われる。砥石は石英片岩製内磨砥石である。欠損しているが両辺と一側面に使用痕がみられる。^{註2}

註1. 杉原清一氏の御教示による。

2. 高橋進一「忌部神社所蔵の結晶片岩製砥石について」『歴史学通信』第11号 島根大学歴史学学生研究室 昭和62年

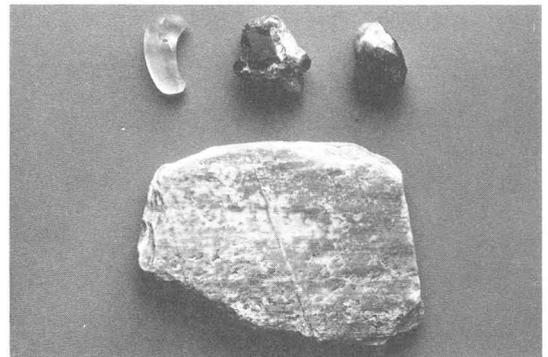


図110 又下遺跡出土品



図111 大東高校校庭遺跡51, 又下遺跡52の位置 1:50000

53. 矢野遺跡

所在 出雲市矢野町に所在する。この地は斐伊川、神戸川によって形成された大規模な沖積平野の旧自然堤防上に位置し、標高は5m以下の低地である。

遺跡の概要 昭和60年から数次にわたって出雲平野集落遺跡研究会によって発掘調査が実施されている。遺物分布の密度の高い地域を1～5の5地点に分けて調査が実施されている。これまでのところ第1～3地点が発掘されており、第2・3地点より碧玉、瑪瑙類の剥片、屑片が出土している。このうち第3地点から比較的多くの玉作遺物が出土している。

第3地点は出雲市矢野町307番地を中心とする地域である。ここでは攪乱を受けた土層の中からではあるが赤瑪瑙、白瑪瑙、緑色凝灰岩、水晶、カド石が出土した。また、筋砥石や攻玉用の平砥石に極似している砥石もみられる。未成品としては約 $2 \times 2 \times 1$ cmの水晶長方体状のものがあり、全面に細部調整がみられる。このほか擦り切りと思われる加工痕のついた緑色凝灰岩片も出土している。これらの玉材は花仙山周辺などからもたらされたものと推測される。玉作関係資料は弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器類と混在してみられ、この遺物包含層は近辺から運搬して盛ったものと思われる。この土はそう遠くないところから運ばれてきたものと思われ、この地点の近辺に玉作遺跡の存在する可能性が高いものと思われ^{註1}。

註1. 出雲平野集落遺跡研究会の御教示による。

(高橋進一, 松本岩雄)

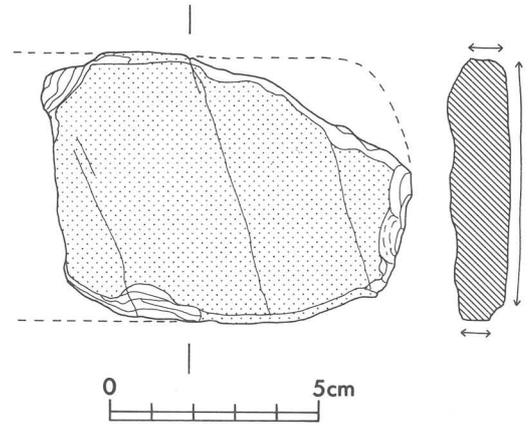


図112 又下遺跡出土の内磨砥石



図113 矢野遺跡(53)の位置 1:50000



図114 矢野遺跡調査風景

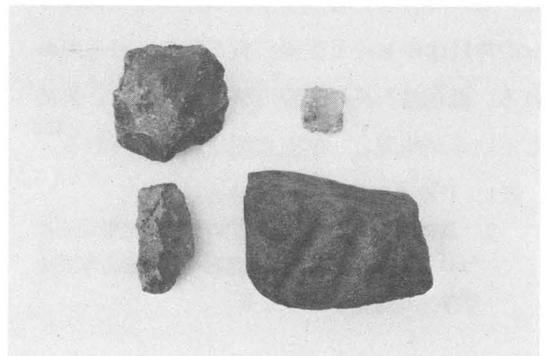


図115 矢野遺跡出土品

IV 近・現代の玉作りについて

1. はじめに

八東郡玉湯町大字玉造周辺は、古代出雲国玉作りの中心地と考えられ、これまで述べてきたように古墳時代から平安時代にわたる多数の玉作遺跡が分布している。ところが平安時代以降の遺跡・遺物は発見されておらず、記録にもみえないことからその後は長く中断されたと考えられている。^{註1}

玉湯町地域は、原石産出地（花仙山）を擁していることもあって近・現代には再び玉作り（めのう細工）が行なわれている。この玉作技術は江戸時代末期に甲斐または若狭から導入され、再開されたと伝えられ、^{註2}今日に及んでいるが、技術の導入先や時期については明確な資料に欠け、不明な点が多い。

当地方の玉生産史を考えるにあたっては古代のみならずこうした近・現代のものをも含めて検討すべきものと考えられる。^{註3}このたびの分布調査にあたっては時間的な制約等もあり、古代玉作遺跡を中心にみてきたが、調査の過程でいくつかの近・現代の「玉材採掘坑」や「瑪瑙細工場跡」を踏査することができたので、その概要を紹介しておくことにする。

2. 玉材採掘坑

このたびの調査で実見した玉材採掘坑は、花仙山の南西麓に位置する字金屋廻、字蔵ラ廻、字横尾堀の地域である。

A 金屋廻玉材採掘坑

八東郡玉湯町大字玉造字金屋廻周辺で、ホテル「ムサン」背後の丘陵上にあたる。標高90～100 mあり、丘陵上は広く

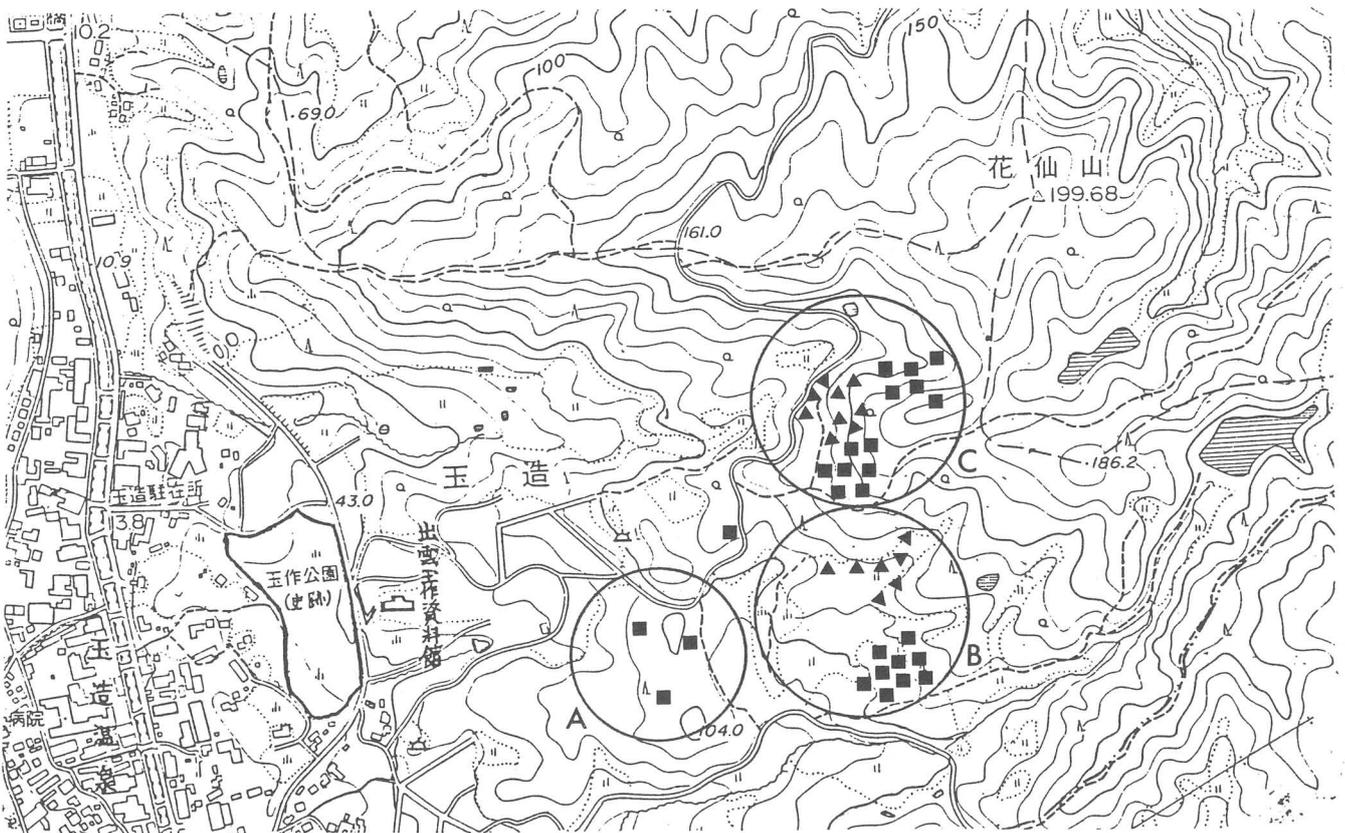


図 116 玉材採掘坑の分布 (A 金屋廻 B 蔵ラ廻 C 横尾堀) ■タテ坑 ▲ヨコ坑 1 : 10,000

平坦で台地上を呈している。この丘陵上には金屋廻古墳群も分布している。

玉材採掘坑は3穴確認することができた。いずれもタテ坑で、穴の平面は四角形を呈している。最も保存状態の良いな1穴は、平面は87×90cmあり、深さは約5mまで掘られていた。この坑底あたりで原石の筋にあたったと思われ、坑底からヨコ方向に1mばかり掘り進められている。タテ坑の四壁には降りたり登ったりするためのステップ（足がかり）が掘り込まれている。

この地域では坑の数が少なく、それほどたくさんの原石が採れたようには思われない。

B 蔵ラ廻^{くらまわ}玉材採掘坑

八東郡玉湯町大字玉造字蔵ラ廻周辺にある。金屋廻の東側にあたり、標高100～130mの谷の緩急の斜面に多数みられる。この地域は多量の原石を採取することができたと考えられ、地質調査所発行の20万分の1の地質図「大山」（明治30年発行）の解説にも「字クララザコ」の地名が記されている。^{註4}

今回確認した採掘坑は、タテ坑9穴、ヨコ坑7穴である。水田周囲の斜面や傾斜の急なところはヨコ坑が多く、緩斜面ではタテ坑を掘る傾向がある。1号坑と仮称したヨコ坑は遺存状態が良好で、内部に入ることができた。この坑は入口部における基底部の幅1.5m、高さ1.2mあまりあり、天井の断面は「凵」形を呈する。坑は南から北に向かって掘られているが、原石を追いかけて掘り進められたと思われ、次第に西側にカーブしている。全長約10.5mのところまで掘られており、最奥部は幅0.85m、高さ0.8mとかなり狭くなっている。坑内には「ゲタ」と呼ばれる木製の台が放置されていた。これは湧き水で尻がぬれるのを防ぐために用いられたものである。^{註5}このほか、坑のほぼ中央部の壁には針金製のローソク立てが設置されていた。

蔵ラ廻のタテ坑は、金屋廻のものと同様のもので、坑の大きさは90×100cmあまりある。

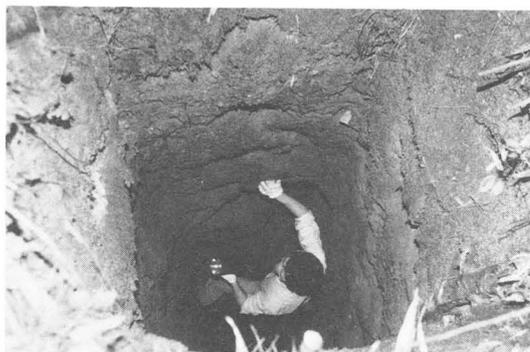


図117 金屋廻採掘坑



図118 蔵ラ廻玉材採掘坑遠景

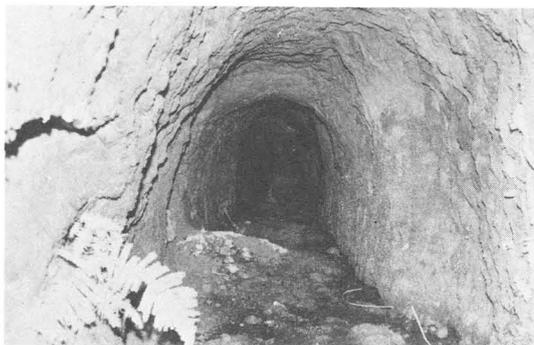


図119 蔵ラ廻1号玉材採掘坑

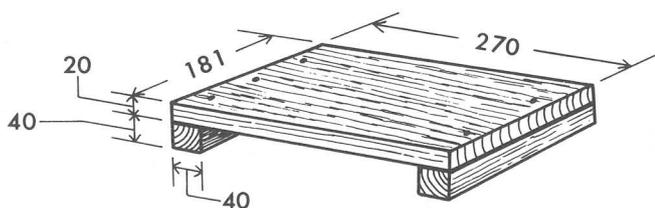


図120 蔵ラ廻1号坑採集の「ゲタ」
(単位 mm)



図121 蔵ラ廻1号坑採集の「ゲタ」

C 横屋堀玉材採掘坑

八東郡玉湯町大字玉造字横屋堀にある。蔵ラ廻の北側にあたり西側から入りこむ谷の最上部に位置する丘陵で、標高は140~160mある。この地域も多量の原石が採取されたと思われ、多数の採掘坑がみられる。また明治30年発行の地質図「大山」^{註6}の解説中にも出雲瑪瑙産出地として「字横屋堀」の地名が記されている。

今回確認した採掘坑は、タテ坑13穴、ヨコ坑9穴あまりである。このうち遺存状態の良いヨコ坑は、入口部の基底幅0.64m、高さ1.14mあまりのもので、蛇行しながら25m奥まで掘られていた。この内部および周辺には玉材小片が若干みられた。碧玉が大半であり、赤瑪瑙、水晶等がわずかにみられる。

タテ坑は金屋廻や蔵ラ廻のものとはほぼ同形態、同期模のものである。

なお、この横屋堀の丘陵緩斜面には20㎡あまりの範囲を平坦に造成したところもあり、玉材採掘に伴う休憩小屋等であったものと推測される。

以上の3地域のほか、「めのう掘り聞書」^{註7}によれば「エチゴ丸」「石床山」でも採掘されていたようであるが、このたびの調査では確認することができなかった。

3. 瑪瑙細工場跡

分布調査の過程で、明治期の瑪瑙細工場跡を1ヶ所確認したので紹介しておくことにする。八東郡宍道町上来待字佐倉の末ノ廻に所在することから「末ノ廻瑪瑙細工場跡」と仮称しておくことにする。宍道湖から来待川に沿って南東へ約2.5km入ったところで、この地は小さな谷の南側斜面に位置している。

宍道町上来待字佐倉の永原家（屋号小加賀美）の分家であり、江戸末期から明治にかけて瑪瑙細工が行なわれていたといわれている。現在は家屋等も全く失われており、雑木林となっている。

かつて恩田清氏が瑪瑙製管玉未成品2点を採集され、玉作資料館に寄託されている。

斜面を造成して、狭い平坦地を作って製作所を立てていた模様であり、そのすぐ下が一部崩れて多量の瑪瑙、碧玉のチップが散乱していた。

玉材はほとんどが赤瑪瑙であり、まれに碧玉、白瑪瑙が混じる。瑪瑙は全て焼いて発色を良くしており、中には焦げている物もある。碧玉は焼かれていない。

赤瑪瑙はチップ96点、管玉状未成品1点、四角柱状未成品1点が採集された。

管玉状未成品は、全体の1/3ほどの欠損品で、形割の後、1/3ほど穿

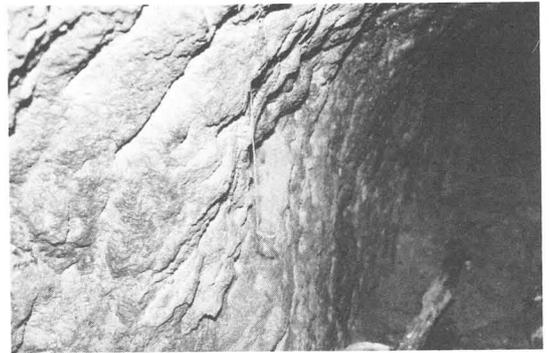


図122 蔵ラ廻1号坑のローソク立て

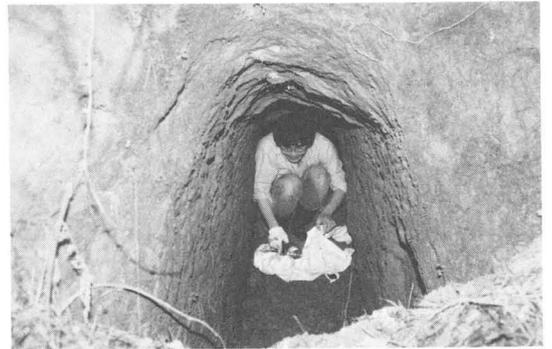


図123 横屋堀採掘坑

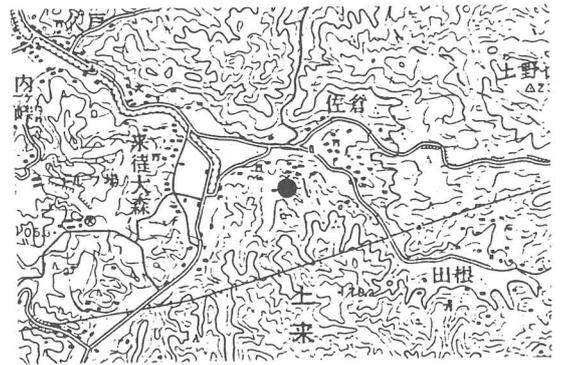


図124 末ノ廻瑪瑙細工場跡の位置 1:50000



図125 末ノ廻瑪瑙細工場跡採集遺物